



## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不思議のダンジョンというお仕事

### 【著者名】

Z1391E

### 【作者略】

高速左フック

### 【あらすじ】

ある日、ひょんな事から不思議のダンジョンでのワナ作りをする事になつた少年シユロそしてその日常…。

## 第一話

### ニルバス村

この村には、不思議のダンジョンといつ洞窟がある。

不思議のダンジョンとは、入る度に中の構造が変化したり、落ちているアイテムが毎度変わるという洞窟のことだ。

当然、深く入れば、いいアイテムがあるのだが、モンスターも強くなるので一筋縄ではいかない。

命は奪われるまではいかないが、力尽きたら持っていた物を無くして、外へ放り出されるというリスクもあるが、生活費を稼ぐには、低い階層で十分補えるので。彼にとって、ダンジョンでの探索はいい仕事であった。

彼の名前は、シユロ。

父さんを去年亡くし、母さんと妹の三人となつたので、「学校に行かずに働く」

と最初はそう言つたのを母さんは毅然とした態度でそつと云つた。

「お前は学校にいきたいのでしょうか？」

学費くらいは、私が働いてなんとかします」

だが、生まれつき身体が弱い母さんは、職場で倒れ自宅療養となつた。

そして自分に働ける仕事はないものかと、長老に相談すると、「まいったのう」と頭を抱えたのであった。

当然だ。

学費を稼ぎながら学校に行き、生活費を稼ぐとなると条件は絞ら

れる。

『短い時間で高給であること』なのだから。

「そんなの危ない仕事くらいしか、思い浮かばんのう。

：「おお、そうじや。危ない仕事には変わりはないが、この村にある洞窟に行つて見てはどうじや？」

「あの不思議のダンジョンの事ですか。この村じゃ、成人を迎えてないとダメじゃありませんでしたか？」

「本来なら成人を迎えてないとダメという決まりなのじやがな、昔は…というより、ワシの頃なのじやが、15でよかつたのじやよ。実際ワシも、その年で入つてみたのじやが、モンスターも大した事なかつたのもあるしの。

そして他の国では、若くても試験に合格した人なら、どんなに若くてもダンジョンを探索してもよいといふのう。

帰還の石のお金はワシが持つから、シユロよ。やつてみるか？」

当然断る必要はなかつたので、試しに洞窟を探索してみた。ホントに大した事なかつたので、『長老の家で働いている』といつ名田と、冒険者には事情を知つてもらつて今に至つている。

## 「」は洞窟の2階

シユロはいつもの様に洞窟を探索していると、小石の様なモノが飛んできたので、左手で払おうとすると。

スポーツ

「うお、なんだ？」

それは、指輪だった。そしてそれは綺麗に指にはまり、その指輪

をまじまじ見ていると、目の前にモンスターが倒れていた。おそらくこのモンスターが持っていた指輪だろう。

だが思わず後ろに下がった、何故ならそのモンスターは深くに生息しているはずの『ヴァンパイア』だったからだ。

当然、次にやる事は一つだ。

道具、帰還の石、使う、さようなら。

「ちょっと、待て。」

「だがヴァンパイアの目が光り、身体の自由を奪われた。私は危害を与えるつもりはないのだ。」

さつき、石でコケてしまつてな。指輪を見なかつたか？「動けずにいるシユロの回答を待つているヴァンパイアは指にはまた指輪を見つける。

「フン、人間と言うのは拾つたアイテムを、しかも人様のモノをすぐには装備する習性があるのか？」

ヴァンパイアは、指に填めている指輪を見つめながら嫌味をいふので、反論したかつたが身体の自由が奪われたままなので何も言えなかつた。

「…まあいい、とにかく返してもらいうぞ」

そう言つて、シユロの手を取つて無理矢理手を開けて、指輪に手を掛けるがなかなか指輪がはずれない。

もう一度試しそうと、仕切りなおしてやってみるが何度もやっても外れなかつた。

「もしかして、この指輪呪われているのでは？」

「…みたいだな」

結局シユロとそのヴァンパイアは、身体の自由が効いてくるまで指輪の解除作業に明け暮れて、一つの結論をだした。

「別に一人は頭が悪いワケでわない。

「確かにヴァンパイアは、呪いを無効に出来ませんでした?」

「いや、それは自分自身という意味だ。

相手に掛かっている呪いは無効にできないのだ。」

ホントに困ったのだろう、さつきからヴァンパイアは頭を抱えていた。

指を切り落とそうとしないのかと、思つてはいるのだが、ヴァンパイアは言った事を守るといつ事らしく、そのおかげでシユロは無傷だった。

「じゃあ、一旦外に出て、呪いを解除してこのフロアに来ましょうか?」

「それは、困る。

その指輪は…まあいい、魔界ではかなりの高価なモノでな。持ち出されるのは困る…そうだ。」

次の瞬間、とんでもないことを口にした。

「お前が魔界にいけばいい」

「…はあ?」

「呪いを解いてもらつ為に、魔界に来てもらつ。」

そんなに警戒するなと言うが、魔界に行く事自体経験がないので、さすがにシユロは警戒した。

「二人で呪いを解除する巻物を探すといつのは?」

「モンスターは人間と一緒に探索しない撃があるから却下だ。それにお前は弱いだろう?」

即答で答えるヴァンパイア、言い返せないシユロ、仕方ないじやないか低い階層でしか探索してないのだから…。

「……」

しばらくの沈黙が続き、シユロの頭の中で一つの考えが浮かぶ。

『逃げよう』

『ヘアツ！－（眼光）』

そう思い、道具袋に手を掛けた瞬間、ヴァンパイアの目の光を浴びるしまう。

「すまないな、何故か逃げられると思ったのでな。」

このヴァンパイアは人の心が読めるのだろうか？

そのまま硬直したシユロの身体を人形を抱えるように持ち上げ、懐から黒く光る帰還の石を掲げた。すると本来なら、光が包み込む本来の帰還の石に対し、黒い光が包み込んで来たを見てホントに魔界に連れて行かれる事を直感するがどうにもできないので、シユロはそのまま魔界に連れて行かれた。

そして…

「どこでどうなつてこうなつたのだろう？」

「そんなの私に聞いてほしくないものだ。」

思わず独り言が漏れたシユロを見て、ヴァンパイアも独り言を言うように答える。

魔界に来たトコロまでは良かつたと思う。だがいざ呪いを解いて貰おうとすると、

「…」いや、特別な呪いだな。他を当たつてくれ。」

その言葉通りに「一人は、他を当たったのだが、さすがは『特別な呪い』どの施設も『他を当たってくれ』と言つ。

「仕方がない、緊急事態だ…」

まだ手があるのか期待してヴァンパイアを見るが、ふと数分前と似た感覚が襲つてきた。

「我が王にあつてもらおう。」

## 第一話

そして、現在に至るワケだ。

今、謁見の間といつアコロで、このヴァンパイアの王を待つていた。

「どうした？」

「正直、帰りたい。」

それは仕方の無い事だ。人は生きている内に、世に言つ『魔王』と言われる人物に会う事はないだろつ。そんな事があるのは『勇者』と呼ばれる人物くらいだ。

そして正直シユロはそんな事になるとは思つても見なかつたので、落ち着く事は無理だつた。

「…トイレに行きたくなつてきた。」

「もう少しで来るから我慢しろ。」

見るとヴァンパイアの足もカタカタ震えていた。それがシユロにとつての少しの励ましにはなつた。

すると、辺りが緊張していよいよ王が出てくるのだろつ。

張り詰めた空気がシユロを緊張させた。姿を見ようと玉座の辺りを凝視していたがそこまでだつた。あわてて頭を下げたからだ。何故なら魔王の魔力というモノも気配に混ざつているのだろつか、その気配だけで息の根が止められる感覚が襲つて來たからだ。頭を下げたまま気が付いたのだが、辺りは暗くなつていた。そしてここはいつの間にか『何か』に周りを囲まれていた。

「話は大体聞いたわ。顔を上げなさい。」

言わされたので視線を唯一光のある玉座の方に向けると一人の女性が座つていた。

「ふーん、ホントに人間なのね。」

その魔王は、金髪でサラサラの長髪に綺麗な顔をしていた。遠目から見れば魔王とは誰も思わないだろう。だが、近くでは魔力が尋常ではないのがはっきり分かるほど、彼女の周囲の空気が歪んでいた。おそらく彼女が殺意を持つて、自分の身体に触れればその部分は消し飛ぶだろうという事が直感で分かるくらいだ。

「……で、あなたは、指輪がどういう代物か知ってるの？」  
「あのヴァンパイアから、『大事なモノ』くらいしか聞いていませんが？」

『呆れた』と目線を送つて、そのヴァンパイアを見る。その視線でヴァンパイアは、恐縮するを見て。やはりこの『魔王』は強いだろうと再認識させられる。

「どうも、この『魔王』説明が苦手のようだ。  
それは『ワナの指輪』と言つて、ちょっとこの『木の矢』を指輪の付けている手に持つてみなさい。」

そう言つてシユロに近づき、木の矢を手渡す魔王。

「それでスイッチを思い浮かべながら、その矢を見て……そうそう、なかなか、うまいじゃない。」

すると指輪が光り出し、木の矢を茶色いスイッチに変えた。

「これがワナ？」

「これで洞窟の中に置くと見えなくなつて踏むと作動するつてワケ。これが今の私たちのこれからに必要としているモノなの。」

「じゃあ、余計に自分のモノにする訳にいかないじゃないですか、返しますよ？」

「言つてくれるのはありがたいけど、そつまく行くものじゃないの。」

その指輪の呪いが解ける条件は、『装備者の死』というのが条件なのよ。それでモノは相談なんだけど、私達に協力してくれないかし

「ひへ」

『おじおじ』

『バカな、人間に任せるとこいつのかつーー?』

『まったく姫様と来たら…』

ざわざわと周りがざわめき出すので耳を傾けているとそんな事を騒ぎ出す外野、面倒そつなので自分から切り出すことにした。

「協力と言つと?」

「まずこれを見んで?」

そう言つて魔王は一枚の紙面を手渡す。

「すいません、この国の中の字が読めません。」

「…ブリード、読んであげなさい。」

あつ、少しこちらつきなさつた。

そんな事もあつてシユロの隣にいるヴァンパイアの名前がブリードという事も分かつたのと同時に、何故この指輪が必要なのか大体の事は理解した。

つまり一番簡単な階層だと思われているので自分達のこの階層を複雑にしたいとこつ事らしき。

「それで、そのワナの指輪で洞窟で使うワナ作りをしてくれないかしら?」

「別にいいんですけど、作動するワナをわざの要領で作つて…あつ、どこで渡せばいいんですか?」

「それにはじで用意するわ。ああ、やつだ。お返しは必ずさればいいから…」

私達のお返しは、魔力を上げたりするのだけど?」

「ああ、それなら。金品でお返しできませんですかね?」

『ああ、やはり人間だな。』

『まったくだ。欲深い……』

『これだから、人間は……』

…ああ、こいつやって魔界と人間界のいさかは絶えなくなるのだろう。

「自分の家の生活のお金稼ぐ為に洞窟探索してるんですよ。だから金品で…と、言つたんですが…」

「…まあ、そういう事にしておくわ。」

これは信用して貰ださいと言つても、無理な話だろう。相手は魔界の王、そして自分は人間界の一般人、表であらわしたら対称で示せるくらい対極の立場なのだから。

そう考えたら、いい加減、頭が痛くなつてきた。

「じゃあ、等価の方は…そちらでおまかせして…いいですか？」

「そうさせてもらつわ。

…あら、フラフラしてどうしたの？」

どうもホントに頭が痛くなつてたらしく、視界が歪んできた。その場で手をつけず地面に倒れこんだ。

「…もしかして…ワナを作るって事は…魔力とか…消費するの…？」

「消費するモノは魔力と聞いたから、寿命じゃないのは確かよ。」

…ああ、それを聞いて安心した。

…やうに気が遠くなってきたな。

「…セリカ様、もしかして、この者は魔力というモノを消費した事がないのでは？」

「嘘でしょ、火を投げ付ける程度の魔力でワナができるモノよ。それくらい、人間の住む世界で習う事じゃない。」

「…ですから、『魔力の消費の仕方』すらも知らないのでは？人間は初めて火を投げ付ける動作でも、気絶するといいますから。」

かしこまりながら申し上げているブランドの物言いも床の冷たさを感じながら聞いていると足音が聞こえてきた。

途切れそうな意識を何とか持たせながら視界を戻してみると、セリカと呼ばれた魔王が自分の方に近づき、両手でシユロの身体を軽々と持ち上げ、その顔を柔らかく掴んで呟つ。

「まだ意識はあるみたいね。そのままで聞きなさい。今日は『貴方が私の為にワナを作る』というトロロまでといつ事でお開きにしましょう…」

彼女なりに氣を使っているのか、吐息が掛かりそうな距離でセリカの手の暖かさを感じながら聞いていると微笑み。

「物事の整理がついたら…」

…人差し指を出して。

「また、いらっしゃい…」

こめかみを『こつん』と突付いたのだろう。  
シユロは、眠りについた。

「はつーー?」

飛び起きて氣が付くと、自分の家、しかも自分の部屋だった。

「……」

汗を搔いていたので手で拭おうとしたが指輪が皿に移ったので、あれは夢じゃなかつたよつだと認識せられた。

「なに、自分の手をふりふりさせたの?」

最初びつ母親に言つて訳しよつと困つてこゑど、いつも人の皿には見えなこよつだつた。

その指輪を見つめながら学校に行くと長老と会った。

「おはよー、シロ。」

昨日は散々じやつたよつじやの……」

シロが『洞窟』でアイテムを集めて売つてこゐたのは、道具屋と長老と洞窟を探索する冒険者達の中での秘密であつた。

そしてびつも昨日は洞窟の前で倒れていたらしく、それを見つめた冒険者が自分の家に適切な理由を付けて運んでくれたらしく。

「…ぬぬしの」とじやから、深くまで潜る事はないじやねつが、不覚をとつたよつじやのね。」

ふおふおふお、と笑つ長老だったがホントの事をこいつ訳もいかな

いので、一人して笑つことにした。

「 そう言えど、あのセリカといつ魔王、また来いと言つたがどうすればいいのだろう？」

しばらく考えたが、魔界に行く方法がわからなかつたので、とりあえず早めに洞窟に行つた方がいいと思つた。

「 ですが、せつかくの儲けを台無しになつたのは事実ですから、また探索していいですかね？」

「 まあ、そう焦るな。まずは疲れを癒してからじや、お前に何かあつたら、お前さんのかあさんに面目が立たんからう。」

長老は『ふおふお』と笑い、特別に探索を許可した人の礼儀として当然の返答を返す。

「 おお、そろそろ遅刻する時間じやぞ？」

そのまま歩いて行けば、15分前に学校に到着する時間であったが、これも長老としての礼儀なのだろう。

一週間に一度だけの探索だといつ約束もあるし、まあ、確かに焦つては駄目だ。

そうして、一週間後を待つ事にした。

「 が、次の日。

『オレの見間違いかもしれないが、2階で出るはずのない魔物を見

たんだ……』

わざに次の日。

『2階で、ヴァンパイアはあつえねえよな……』

そして更に……。

『そういう『この村の探索者で見た事もない顔も探索した時にいたな、新顔かな?』』

ヤバイ、人様に被害が出る前に……。

『くそ、ただ一緒に探索に誘つただけじゃないか、あの女、めちゃくちゃ強いじゃないか……。』

気が付いたら、駆け足で長老に許可をもりついていた。

「おや、もう探索に出るのかの?」

「ええ、週末に用事がありますので、特別の特別に許可できませんかね?」

「そうか、じゃあ仕方が無いの?」

はい、仕方がありません。

これ以上、人様に被害が『出る』前に、『出る』杭は打つときませんと……。

「だが、気をつけるんじやぞ。」

近頃は、2階辺りでも物騒らじいからのう?』

「は……はい、気をつけます……」

言えない、自分が原因ですと、とてもじゃないが言えない。

そして長老の家を離れて、今は洞窟の2階。

「何をやつてるんですか?」

「力の指輪を試してるのよ。」

「…それ、メリケンサックですよ?」

「そうなの。やつをあわせいで倒れている男に『金の指輪』譲譲され  
たんだけど、

『私の『家』に山ほどあるからここ』って、断つたんだけど  
こいから…」

そこで落ちていたこの指輪を握るよつにしてみたら、殴るモノだと理解できたので『試してみて』こんな現状が起きたらしい。  
…ホント、ここが不思議のダンジョンでよかつた。

「それより、またいらいしゃこと言つたのに、なかなか来ないとは  
どうこう事かしら、言い訳によつてはただじやおかないわよ?」

セリカは優しく言つているが、鉄で出来たメリケンサックを握り潰していた。

忘れてはならない、彼女は魔王なのだ。

「そつ、そんな事言つても、洞窟の探索は週に一回つて決まりです

から…」

「あら、そんな決まり私は決めてないけど、誰が決めたのよ?」

「これでも僕は家の生活の為に自分の村の村長が、特別に週に一回だけという決まりで探索を許されてるんですよ。」  
「あら、『生活の為に洞窟でお金を稼いでる』といつ話は本当だったの？」

鉄球、もとい、丸めたメリケンサックをひょいと投げたのだろうが、当たった柱がガラガラと砕けた。  
…もしかして、ぶつける気だったのか？

「まあいいわ、今から魔界に行くからついてらっしゃい。」  
そういってセリカは黒い帰還の石を出してそれを掲げた。

「ところで、一ついいかしら?」

魔界のモンスター達の街中を歩く最中、セリカは一方的に聞いてきた。

「あなたって、年いくつなの?」

「今年で17ですか?」

「あら、私の一つ下じゃない。」

「えつ、そなんですかっ!?」

「いくつだと思ったの?」

「……。」

「あのねえ、それは種族によつては万年、千年生きてるのもいるけ

ど、私達の種族は人間とあんまり変わらないのよ?」

幸いセリカは怒らず呆れてくれた。

「えつ、じゃあ、セリカさんは何歳の時に魔王となつたんですか?」

「そうね、16の時だつたわ。」

年も離れてないのだから、セリカでいいわよ?」

「16ですか。」

「あら、貴方も何かあつた年だったのかしら?」

「父さんが亡くなつた年でした。」

「そうだつたの、それは清々したでしょ?」

「そつ、そんなつ!?」

「隠す事は無いと思うわ?」

「私、だつて自分の父を消した時は、気持ち良かつたもの。」

聞くとこのによると、セリカの父親はビックリするもヤツだつたらしい。

だけどそれはセリカの父さんのケースであつて、その目線で世の中の父さんを見ないほしかつたのでついセリカの方を見てしまつた。

「あら、怒つたの？」

「……。」

おそらく何を言つても無駄なような気がした。

セリカが見た父親像は、しばらく続くだろう。

そこに自分の父さんはこうだと言つても理解、というより受け入れるのは、たつた一年経つくらいでは変わりようがないからだ。

「……」の話は、やめにしませんか？」

「……そうね、やめましょ。」

「……どうして、殺さないのですか？」

「何、急に？」

魔界の街中で、しばらく沈黙を続いたので少し気になつた事を聞いてみた。

「ほり、」の指輪つて、装備者の死が呪いを解除する条件でしょ？」

あの時、一番手つ取り早い方法は、これだけだと思つて。」

実際は死にたくないが、魔王を含め『王』というモノは基本的に

『無駄』が嫌いといつのは、有名な話だ。

「」の場合、一番の『無駄』は自分であり。

当然、『無駄』を省く手段は当然、自分の死だといつ事だからだ。

「ああ、その事ね。

「布拉ドって、ヴァンパイアいたの覚えてるかしら。

あいつと私って血縁上じや、従兄に当たるのよ。

それで、あいつに『危害を加えない』という、約束したでしょ？  
あれって、契約の意味合いもあって、それで守らないといけなくなってるのよ。」

そう言つて、元が緩んでる。

…多分面白そうだと、思つたのだな。

「ヒーリーが貴方のお店よ。」

歩いている内に目的の場所についたようだが、セリカの一言に驚いてしまった。

「お店っ！？」

「あら、建物が気に入らなかつたかしら？」

「いや、そうじやなくて。

てつくり、工房かと思つたんですよ。」

するとドアが開き、そこから布拉ドが出てきた。

「セリカ様、今、家の中の整頓が大体終わつたトコロです。」

「まあまあね。」

セリカは家を一通り外見を見て、ドアを開けて中に入つて行つたので、シユロも後に続いて中に入つてみると本当に『お店』をするつもりだらう、カウンターまできちんと準備してあつた。

「お店を経営する話は分かりましたけど、ちょっと問題がありますよ？」

「経営の事なら、布拉ドに任せてあるから大丈夫よ。

貴方はちゃんと『ワナ』を作つて、経営すればいいの。」

「いえ、ですから、『ワナ』を作る自分に問題が…」

そうだ、自分は魔力の消費の仕方すら、この前知った初心者なのだ。

一度だけ注文するのならいいが、大量に量をこなすとすれば話が違う、生命の危機に晒されてしまう。

「その点なら、大丈夫よ。」

『ブラド』と呼びかけ、セリカが目配せをすると、ブラドが被せてあつた布を取り払うと、大きなツボが出てきた。

「これは魔道のツボと言つてな、よく魔道士が出てくる逸話で聞くだひうつ?

まあ一般的なサイズなのだがこれに…

『確かに木の矢を10本』と、フレデが本を読んで確かめながら、ツボに放り込み、それを混ぜ込みながらシユロを手招きする。

ツボは近づき指輪を近づけると指輪が光るので、前の要領で「スイッチ」を思い浮かべると、『ポンッ』と軽い音と共にスイッチが落ちてきた。

「……どうした？」  
彼女の身体は負担を掛けずに「バナ作り」が出来るたゞ一人

でもこれは中に元々入っている魔力と、必要となる部品を放り込む事によって消費者の魔力消費を抑えて、自分の魔力消費によって掛かる負担を軽減してくれるツボらしい。

「ですが、何ていうか。

「前に自分で作つた方が丈夫そうでしたけど、これ何回か踏んたら壊れそうですよ?」

增補子言記

まあ仕方ない事だな、大体「力を作る」という行為で大事な要素は、『自分で魔力を消費する』というのが必要不可欠らしいからな

「じゃあ、自分の魔力が大きくなるまで、この壺を通してワナ作り

をする事になるんですね。

「そういう事だな。」

「一人とも、私を無視するくらこ楽しいのかしり？」

「はっ、すいません。」

振り向くとセリカが少しイラ付いた感じで立っていた。どうも無視されるのは、嫌いらしい。

おかげでブランドは急にかしこまり頭を下げたりしている。

「まあいいわ、じゃあ、開店記念の景氣付けにショロ、貴方何か作つてみて。」

ブランドの持つていた本をショロに手渡そうとするが、何かに気付いて寄り添つてきた。

「えっ、どうしたんですか？」

「貴方が魔界の文字が読めなかつたのを思い出したの。だから読んで上げようと思つたのよ。」

近付く事によつて、自分の顔が真つ赤になるのが自覚できた。

「そつ、そんな事しなくていいですよー？」

「あら、照れる事ないじゃない。」

明らかに状況を楽しんでいるセリカ、だがこつちはさうじやなかつた。

さすがにそんな事されたら恥ずかしさで、『また』氣絶すると思つたので、早めに決める為、適当にパラパラと本を開き、自分の作る罫の書いてあるページを決めた。

「これはテレビーターね。」

「確かに踏んだら、瞬間移動するところヤツでしたね。」

「そうよ。

…材料は、銀の矢6本と、鉄の盾3個、あら、意外と簡単に作れるモノね。

「ブリードあるかしら?」

『はい』と、うやうやしく頭を下げながらブリードは用意に取り掛かる為に棚をあさり出したのを見て、手伝おうとするセリカに腕を引っ張られ自分の腕に組み付いてきた。

「いいじゃない、作業はブリードに任せることにして、貴方はここに座つてなさい。」

「でつ、ですけど、こういう作業は何かしら手違いがあると、大変な事になりますから手伝った方がいいですよ。」

逃れようとするがセリカの腕はピクリともしなかった。

「ぜんぜん動きませんけど、魔力とか使つてます?」

「魔力を使うほど力を込めてないけど?」

「自力ですか、自力でこれですか?」

「…ねえ、そんなに嫌なの?」

一生懸命あがいているとセリカは唐突にそんな事を言つて來た。

「別にそういうワケじゃないですよ。」

「じゃあ、どういうワケで貴方はそんなに足搔いて離れようとしているのでしょうか?」

「それは、その…」

「ほら」「らんなさい、私の事が嫌だから足搔いて離れようとしているのでしよう?」

「いえ、なんていうか、その、匂いが…」

「失礼ね、私は毎日フロは欠かせてないのよ。」

セリカはだいぶイラ付いて來たのか、組み付かれている腕が折れそうなくらい痛い。

「そうじゃなくて、とても良い匂いがするから、組み付かれると恥ずかしくて仕方がないんですよ。」

「あー、そうなの、だったら良いじゃない。」

急に力が緩んで、セリカは『フフフ』と笑みを浮かべて、『うわ』と更に寄り添つてきた。

……って、現状の打破になつてないじゃないか。

「離してくださいよ。」

「駄目よ、ここにいなさい。」

「二人とも向をやつてるんですか、用意出来ましたよ?」

「あら、早いのね？」  
そうこうといふやくせつ力は開放してくれた。

「じゃあ、指輪を掲げますよ」

シユロは氣を取り直すようにそう言い、周りの安全を確かめて指輪を掲げ、本に載つてあつたスイッチを思い浮かべた。

『「オオオー』

ツボが空氣を吸い込むよひ、辺りに風を起した。

「あれ、何かおかしくありません？」

「そうだな、さつきは『ポンッ』と軽い感じで出てたよ……な？」  
すると次の瞬間セリカは羽を広げて飛び上がり、一階の窓からガラスを突き破つて一足先に逃げた。

…『一足先』に？

「逃げるシユロ……！」

ブランドもその窓から飛んで逃げたのを見て、シユロもドアに向かつて全力で走つた。

「すんません、オラ、街で張り紙をみたモンですが？」  
そのドアが開いたかと思つたら、何故かオークがこの家に訪ねてきた。

どうしてオークが？

という疑問より、身体がオークを抱えて走っていた。

おかげで走るスピードが落ちたが、今は走る事に専念しないと自分の身がヤバイ、オークも何が起きているのかわからないのか抱きかかえられているままだった。

そして『カツ』という光と共に、シユロとオークの身体は中に舞い地面を「コロコロ」転げた。

「おい、シユロ、大丈夫か?」

気が付くとブラドに横つ面をペシペシ叩かれていた。

「あ、はい、大丈夫です」

と田を覚まし、後ろの方を振り返ると家が吹き飛んでいた。

「一体、どういう事かしら?」

そうして魔王様はお怒りだった。

まあなるのは分かる、それは一日で家を紹介して、一日でツボだけを残して家が崩壊をしたのだ。

要は探索2回目で、一日で施設を紹介して、その日の内にその施設が吹っ飛んだのだ。

おかげで二人の人間とモンスターは正座だ。

「材料はよかつたのですか?」

「あらシユロ、私を疑うの?」

少し殺氣が混ざった視線でこちらを睨むが、原因を探さないと何の解決にならないので、セリカの持っていた本をブラドに手渡し読ませてみた。

「材料の方は合ってますね。」

「だとしたら、数量ね。

「ブリード？」

「で、ですが、セリカ様、私も数量入れましたよ。」

セリカの周りの空気が歪みだしたので、ブラドは恐怖に慄きながらも言い返す。

すると、空から焦げ付いた材料が降ってきた。

「矢が6本、盾が3つ、ありますね。」

「あの、その盾、呪われてますだよ？」

すると、やつき助けたオークが盾を指差して遠慮しがちに言いつ。

「あら、誰、貴方？」

「！」の張り紙みたモンですだ。」

オーケは被つている兜から一枚の張り紙を取り出し、セリカに見せた。

「ああ、アルバイトの…ちょっと、ブラド、事情を説明してあげなさい。」

セリカは思い当たる節があつたようだつた。

どうもバイトも雇い入れる予定があつたらしく、ブラドはそのオーケに事情を説明している。

「それよりセリカさん、この盾が呪われているせいで、ツボが爆発したんじゃないですか？」

「そんな事なら、書いてるはず……あら。」

「……どうもあつたらしい。」

そしてその呪われた盾を放り込んだのも、呪いの効かないモンスター・ヴァンパイア＝ブラドというのが手伝い、分からなかつたようだ。

「……なるとお互に悪かった事になりますね？」

「そういう事にしておくわ。」

ため息をつきながら、セリカは納得してくれたようだ。

「じゃあ、店がなくなつた以上仕方がないから。また店を用意するから、来週来てもらおうかしら？」

「来週ですか？」

「貴方つて、週に一度しか洞窟に来れないのでしょ？」

「ああ、なるほど。」

「それじゃあ、帰りましょ。」

「そこの二人は、後片付けよろしく。」

相槌を打つて、二人のモンスターは回収作業に移つた。

「じゃあ、お先に失礼します。」

そういうと、一人は手を振って応えたのを見て少し笑ってしまった。

「どうしたの？」

「いや、『お先に失礼します』なんて、魔界で言うなんて思つても見ませんでしたから、思わず笑つてしまつたんですよ。」

最初は普通に仕事を探していたのだ、『お先に失礼します』といふのも、普通の仕事の中で言うセリフなのだろうが、洞窟の探索なんて事をしているので言う事がなかつた。何故か魔界で言うなんて事を予想出来ただろうか、考えて見ると変な話だつたので笑わずにいられなかつた。

「そんなモノのかしら？」

そう言えば、私にも今日こんな事があつたのを思い出したわ。貴方が、私の事を『様』づけで呼ばなかつた事かしら？」

「あつ、もしかして…ダメでした？」

「別にいいのよ、ただ、とても新鮮な気分だつたわ。こんな気分になつたのは久しぶりよ。だから特別に許してあげるわ。これからは『さん』づけで呼びなさい。」

軽く笑みを浮かべながら、セリカは洞窟の前で帰還の石を手渡す。

「じゃあ、この洞窟に入つてから、この帰還の石を使いなさい。  
来週の2階でいいのかしら？」

「あ、はい。

それじゃあセリカさん、また来週。」

「またね。」

そう言つて、また笑いながら手をふるセリカを見て、シユロは洞窟に入り家路に着こうとするが、重大な事に気付いた。

「あつ、今日の稼ぎを稼いでない。」

そうして、少しアイテム集めに勤しむ事にした。

## 第七話 やのー（繪書き）

よつやく、話の方向性が出来てきたので、書を始めたこと感じます。

## 第七話 その1

「おっ、来たか？」

あれから、数日が過ぎた。

「あっ、ブランド。店番、いつもありがとうございます。」

…というより、週に一回の探索の決まりがあるため、実質一回しか来ていない。

「店長、お待ちしてましただ。」

そして、アルバイトで雇つたこのオーラ、名前は『ダロタ』といいうらしい。

最初ブランドは、このオーラの採用を渋つていたが、実際、自分達には分からぬ言語を理解したり、呪われたアイテムを解析出来るところ、この二つの能力があつたのだ。

今やダロタは、店の経営に無くてはならない人材に変わりないだるう。

店の方は週一でしか開店出来ないが、繁盛しているのは良い事だつた。

…だが。

「ここかい、最近繁盛している。ワナ作りの店って？」

…それは突然やつてきた。

「あつ、いらつしゃ…つー…？」  
まずブラドが硬直した。

「ブラド、どうしただ？」  
そう言つてダロタがカウンターを覗く…すると、カタカタ震えだした。

「あの…どちら様…？」  
このパターンは何となく『何か』に似ていた。  
だが、一応、ブラドに聞いてみようとする、その話し声が聞こえてしまつたのか、その相手の方から話し始めていた。

「ああ、オレか、カイリって言つんだ。  
隣の国の魔王さ。」

短く纏めた栗色の髪に、赤いレザーアーマーに身を包んでいる細身の外見。

だがそんな軽さを感じさせる行動とは裏腹に、カイリの自身の魔力でほんのりと赤く、そして、空気を歪めていた。

…まるでセリカと雰囲気が似ていたので、おそらくカイリの言つている事は本当なのだろうと直感できた。

「……。  
「なんだ、驚いて声も出ないのか？」

「いえ、驚くも何も、一度魔王つて人物見てるから、何ていうか

新鮮味が薄れてしまいまして。

隣の国の魔王ですか…。それで、ここには何の御用で?」

「ははっ、新鮮味が、面白い事をいつもやつだな。気に入ったよ。いや何せ、最近セリカがワナを作る店をよつやく始めたと思ったら、何とその店が大繁盛つて話じやないか?」

「そんな繁盛つて、今は開店して間もないからですよ。カイリさんのトロロだつて、やうだつたはずだと思ひのですけど?」

「だけど、聞くとトロロによると、週一回のペースでの開店なんだわ。」

それでこの賑わいは、普通のワナ作りの店じやありえないんだ。だから、こいつやつて…」

「視察に来たワケですか…まあ…ん? ?」

その時、ブリヂとダロタがちょんちょんと背中を突き刺して來たので、自分を裏手に手招きをした。

「おい、シユロ、どうして隣の国の魔王がここに來るの?」「そんなのこいつらが聞きたいよ。もしかして…やばいのかな?」

「やばい…やばいな。」

「んだ、やばいな。」

「最悪のケース…何が起こるの?」

「まあ、この大陸の地図が書き換えられるな。」

「えつ、どうこう事ですか?」

「ブリヂの言つとおり事が起きるだよ。」

数ヶ月前、カイリと『ある人物』が戦つて、この町の二つくらいの面積の島が消し飛んだという事件があつただ。』

店内の様子を物色に近い様子で勝手に見学を始め出すカイリを見て、少し緊張しながらブラドに尋ねてみた。

「もしかして…戦争？」

「いや、正確には…。」

ブラドもバツの悪そうな顔をするので、更に緊張してしまつ。

「『喧嘩』だ。」

ガタツ

「ええと、勇者が来たとか…？」

「そうだと、多少面目がつくのだが…な。」

「仮にもアレ、魔王…ですよね？」

魔王に喧嘩を売るつてどんな…ああ。

いた。

思い当たり過ぎて目眩が起きた。

「『セリカ・カイリ事件』と隣の国との間に住んでいるモンスターは、こう呼んでるだ。」

「まあ、理由は、しょうも無い事らしい。」

だが、この町を吹き飛ばすくらいの爆弾がここに存在<sup>ある</sup>。いや、来たのは間違いないだろ？

じついう時、どういう対応をすればいいか解るな。シユロ？

「迅速に『視察』、完了。

丁重に『帰つて』、今日は飲み明かそつ…ですね。」

「解つてるじゃないか?」

「当然ですよ。自分には帰る場所があるのでですから。」

「…店長、ガンバルだ。」

覚悟を決めて、いざ、現場へ…。

「どうして、アナタがここにいるのよ?」

「何故つて、ただ視察に来ただけで、別に良いじゃないか。」

現場には、爆弾が増えました…。

そして『なあ、シユロ』とカイリは朗らかに笑いながら自分に同意を求めた。

それをみたセリカ、当然イラつきなさる。

爆発まで…あと15秒。

不穏なナレーションまで聞こえて来た。

「ゴゴゴゴゴ…。

窓の景色をチラリと見ると、大気の歪みを受けた影響か小石が浮かんでいた。

「ま、待つてくださいよつ。

カイリさんは、視察にやつて来ただけでなんですよ。」

「あら、随分カイリの肩を持つじゃない。  
いいわ、カイリを片付けてから話を聞いて上げるから、少し待つ  
てなさい。」

明らかに言動がおかしい魔王、それに対してもう一人の魔王はと  
いつと…。

「面白い事を言つじやないか、この前のケリをつけようつてのか  
？」

笑いながら更に自身の魔力を高めたのである。

一人の魔力が家屋全体を揺らしていた。  
もう止められないのだろうか、命の危険といつモノを身近に考え  
てしまう。

助けを求めるように、ブラドたちがいる場所へと視線を移す。  
見るとブラドはダロタを抱えていた。

「あつ。」

そして、窓から飛び去った。  
こんな状況に当然参ったのは、他ならぬ人間、言つてみれば自分  
だ。

「いい加減にしてくださいっ！」

相手が魔王というのも忘れて睨みつけて言った。

「なつ、何よ。」

「ただの視察に来ただけでしょう。済ませて帰つてもうれば良い  
じゃないですかっ！！」

「ははっ、人間に怒られてやんの？」  
「カイリさんもですっ！！」

## 第七話 その2

「では、この日付に届ければよろしくのですね。

…ああ、お代は届けに来るブラドに払ってくださいね。」

愛想良くモンスター相手に接客を終わらせて、今日の営業を終わらせる。

まあ、これで自分の店での仕事が終わったワケではない、これら注文を受けた商品の作成、すなわちワナをこれから作るのだ。

ブラドに材料を運ばせて、ダロタが材料を呪われてないかチェックする。

チェックを終えた材料をブラドがツボに放り込み二人がよく混ぜ込む。

そして、それを見た自分は指輪を通して注文通りの品物を作る。作業量的に楽をしている様に見えるが、実はコレが一番重要な作業だ。

一つを作るワケではないので、慎重にイメージを構築しながら意識を集中する。

たまに雑念…、腹が減ったやら、あの密として入ったモンスターつて、倒したら経験値がすぐえ入るんじやね?…など考えてしまつと放り込んだ材料を無駄にするだけではない。

自分が黒コゲになつてしまつからだ。

まあ、どんな様かといつと、この一人のモンスターが本気で心配するくらいだ。

…まつたく、良く生きてるよ。

今回は上手くいったようで『ポンッ』と軽快な音と共に落ト地点とテープを貼つているトロロにカラカラと、数量通りのスイッチが落ちてくる。

「ふ~ん、上手くなつたじゃな」

「まあ商品は、大してオレントマと変わんねえ出来だな」

再度、ガタゴトと注文されたワナを作る為に材料を確認していると、カイリがそんな事を言つてきた。

「なあ、それなのにどうして繁盛してるんだ?」

「繁盛つて、ですけど今日は客足が少なかつたですから、そもそも客が減つて行くと思いますよ?」

まあ、客足が少ない理由は今日ずっと店内で監視に近い見学していた。この魔王(2名)のおかげで本日の売り上げが通常の半分だったといつのはあるのさ…。

「あら、どうしたのシユロ?」

…黙つておく。

「だけどよ。セリカに聞いたけど、実質2回しか営業をしていいのだろ?」

オレんとトロの店なんか最初から客なんか来なかつたんだよな。

絶対、何か秘密があるハズだつて。」

『どうだ』と確信を突いたようにコツチを向くが、それが自分に  
とつては確信とはとても思えなかつた。

「そう言われましてもね…ああ、忘れてた。」

「何があるのか?」

「違いますよ。ただ今日の帳簿を付け忘れてまして。」

「そんなの付けてたの?」

「もしセリカさんに報告する事があつたりすると、いざ役に立ち  
ますからね。」

そういうつて帳簿を取り出し、ブラドから伝票を受け取り、その帳  
簿に数字を記入していると、魔王に挟まれた。

「…で、何ですか一人とも?」

「あら、見てるだけだけ?」

「いや〜、帳簿の書き方に何かしら秘密があると思つて…なあ?」

『氣にするな』を声をハモらせて言いなさる一人の魔王は、見て  
いる事が作業の負担になる事を知らないのだろうか、まるで宿題を  
みる親のようにじつとみていた。

「だけども、シユロ、そんな帳簿の書き方は良くないぞ。」

「どうしてです。お父さん?」

「何だ、それ?」

まあいいや、良くないつてのはや。」の数字の書き方だよ。」

そう言つてカイリは数字を指差すが、自分はそれが何故『間違い』なのかわからなかつた。

「いや、だからさ、この数字を元に戻さないといけないだらう?『カイリ、あなた何言つてるの?』

彼女もカイリの言つている事が解らないのだらう。  
『ちょっと見せてもらうわね』と、帳簿と伝票を重ね合わせて見ていた。

「ホークマン 落とし穴 530、機械人形 スプリングフロア  
180...」

セリカは、そう口ずさむように伝票を読み上げ、続いて帳簿をしばらく見て、2つを自分に返しながら言つた。

「…合つてゐるぢやない。  
「合つてますよね?」

「オレが言いたいのはさ、この落とし穴を530Gで売つてている  
というワケないじゃないだらう、ケタを直せつて事だよ。5,30  
0,000Gにさ。」

「えつ、530万Gつて、冗談キツイですね。」

「……。」

明らかに驚きの表情を見せた魔王 カイリ。  
ホントに何かおかしいトロロがあつたのだらう。

「お、お前、ホントに言つてるのか?」

「はい、それが何か?」

よほど自分の『おかしい』反応を見て、カイリはセリカに答えるを求めた。

「お、おい、セリカまさか…？」

「まあ、そういう事になるわね。」

セリカも普通に答えるが、カイリが聞こいつとしている事が解つているのだろう。

サラサラの長い金髪を弄りながら素つ『氣無く答えた。

『マジかよ。』とカイリが自分の顔を見る。

「カイリさん、もしかして…。」

その一連の事で、自分でも何となく気付いた事を聞いた。

「こんなに安く提供すれば、どおりでこの店が繁盛するはずだよな。」

「やつぱりですか…。」

「気付いてたのか？」

「はい、何となくですが…。」

気付けばそれは、この商売を始める前の話に遡る。

自分が外にお金を持って出て行くと、色々疑われるからアイテムにしてほしいという話だったので、セリカが相場を決めておいたと いう話だったのだが…。

セリカが決めた相場表を見ると、力の指輪やら、ドラゴンキラーなど高価なモノが目立つたのだ。

「 こんな高価なモノを、低い階層で拾えるワケがないですよ…。」

そう言つてセリカには悪いと思つたが、自分でその相場表を書き換えたのだった。

そしてその事が彼女の気分を害しただらうかと思い、セリカの方を見ると呆れながらこう言つたのだ。

「 …ホントにいいの？」

その時の真の意味がここにあつたのだ。

## 第七話 やのわ（繪書わ）

これから、この話は一話完結型にしたいと想こまわ。

「なるほど、じゃあ、お前は病弱な母さんと自分の学費を稼ぐ為に働いているのか…。」

事情を告げてカイリの方を見ると、カイリは目を輝かせていた。

「えらいつ！！

良い話じゃないか、やっぱりお前、気に入ったよ。  
じゃあ、それならわ、オレのトコで働かないか？」

「はい？」

あまりにも突然の事なので、頭が普段どおりに働いてくれなかつた。  
だが、カイリは構わず、どうしてか話を進めた。

「いや～、オレのトコもさ、いよいよ政治に力を入れようと思つてんだ。

聞く所によると人間の施設つて、娯楽もあるんだろ？

それでそれを少しばかり教えて欲しいと思ってな。

セリカのトコに人間のワナ作りの店主がいるつて、話を聞いて事で引き抜きに来たのや。

で、セリカの方はオレのトコにいた。

ワナ作りの職人をよこすから、どうだコツチに来ないか？」

「ちよつと、何を勝手な事を言つてんのよ。」

セリカは自分の手についていた商品を『ぐしゃり』と握りつぶしながら、立ち上がってカイリを睨みつけた。

間違いない、経験者は理解する。

…いらっしゃなさつてる。

だが、いらっしゃ度に何かを握り潰すクセは治した方が良いと思つた。

せつかく作った商品が金無しだ。

しかし、カイリはさすがに魔王なのか、そんなお怒りのセリカを物ともせずこう言った。

「何でだよ。減るもんじやないだろ？。

お前にオレの国からコイツより良い腕の職人の店主を寄こす。オレはコイツの悪い腕を耳を瞑つて、人間の世界の政治の話を聞く。

「ハ、こうのを何て言つんだっけ？」

「適材適所だべか？」

何でそんな言葉を知つている。このオークは？

「ま、まあ、シユロ、悪い話じやないとコッチは思つんだ。お前はどうする？」

何かややこしい話になりそつたので、自分で言ふのひとは当然、一つだ。

「いい話かもしれないけど、お断りします。」

「ああ、そつかい、なら仕方ねえな。コッチも諦めるしかねえな。

セリカは『当然ね』と言つた表情で、カイリに見ていたが、この魔王の潔さは、自分にとつては心地よさを感じたので失礼の無いよう取り繕つ。

「すいませんね。ですけど、自分の知つている程度なら、休憩時間以内なら相談に乗つていいですよ？」

「これくらいの譲歩はしてあげた。

「甘いわね。」

セリカは呆れてそんな事を言つてきたが、こつこつ人間、もとい魔王だが、こんな性格の持ち主とは、仲良くしておいて損はないだろつと思つたからだ。

「いいのか？」

「はい、こつちも、これから何か相談事があつたら、遠慮なくカイリに聞いても良いですかね？」

「ああ、オレの答へられる範囲ならな。

「こつちもそれ以外でも聞きたいことがあつたら聞いても良いかな？」

カイリは機嫌よく手を差し出したので、その握手に答える。

「ええ、男同士ですから、気兼ねなくどうぞ。」

「んつ、ちょっと待て、お前…、今何て言つた？」

和やかな空気が一瞬にして凍りつく、見ると一匹の魔物は『何か』

に凍り付いていた。

何かおかしい事を言つたのだろうか的な視線を一匹に送る。

『アカン、アカン。』

するとそれを言わんばかりに、一匹は首を横に振つていた。  
向き直るとカイリは下を向いたままだ。

「なあ、シユロ、お前に一つ聞いておくが、お前から見てオレはどう見える?」

…何だらう、この選択間違えたら、『殺りますよ』ってオーラ。

何ともいえない緊迫した空氣の中、とりあえず握手から離れる。

そして、俯いたままのカイリを上から下へ、下から上へ、見やり自分なりに想定できる解答を模索してみると一つの答えが浮かつたところで、『ある物』が目に映つた。

ある物とは、カイリの履いていた履物であり、それは少しヒールが高かつた。

まるで女物の様に…。

「もしかして…。」

「『もしかして…』じゃねえ、オレは、オレは…ッ…！」

「女だ…！」

一瞬の閃光

2回に渡り、ギリギリの綱渡りで守られていた家屋。  
だが、その時、とうとう3回目で家屋が崩壊したのだった。

「なあ、シユロ。お前カジノって、知ってるか？」

本日の営業を終えて、またたりとした魔界の時間を過ごしていると、前回、自分の国の政治に力を入れようとするために地上の意見を聞こうと、自分の働いている、この店に来たという『女』の魔王、カイリは唐突にそんな事を聞いてきた。

「あの賭け事をするトーキーの事ですか？」

「そうそれ、前に言っていた様にオレの方でもやってみようかと思つてさ。

店の方も一段落したみたいだし、約束通り何か知つている事を教えてほしいんだよ。」

しかし困った事がある。

カイリにもそれが伝わったのか、『どうした』と聞いてきたのでこう答えた。

「すいません知つてはいますが、行つた事ないですよ。」

そのカジノのある街は遠いところにあるのもさる事ながら、年齢制限もあるらしいので行つた事がないのが現状だった。

「それじゃ、オレと行つてみないか？」

そして、カイリの唐突なそんな提案にこれまで自分の国の政治はどうしたのか、ここにいるもう一人の魔王セリカは自分に忠告してきた。

「シユロ、この前店を吹っ飛ばしたそんな輩と付き合つていたら、命なんていくつあっても足りないわよ。」

まあ彼女の『半分』は彼女の言ひとおりである。

「……。」

思わず田を細めてしまつ。

それは田蓋を開じればすぐに映像が浮かぶくらい鮮明な記憶……。

店、吹つ飛ぶ、自分吹つ飛ぶ。

「口、口とよつやく止まつた頃に前を身体を起こすと、田の前に立つてゐるカイリ。

死を直感……

しかし『冗談だよ。初めてじゃねえから、今度からは『氣をつけてな』と頬を撫でられる。

少し安心、だが依然と拭えぬ悪寒。

何故かイラつきなさつてゐるせいか。

すーっと、空へ舞い上がる。

翼を広げ、自分の頭上に広がるの光の球体。

そして…手は振り下ろされた。

さて、問題だ。

『誰に付き合つと、命がいくつあっても足りないでしょ？』

「あら、そんなに見つめてどうしたの？」

「…なんでもありません。」

ダロタもブладもじつとうとした視線をセリカに向けていた。

まあ、そんな事も構わずカイリは聞いてきた。

「別にいいじゃねえか、シユロ行つた事がないなら行つて見ないか？」

「だけど、年齢制限とかでバレると思いますよ？」

「そんなモノ、魔力でどうにかしてすればいいじゃねえか、大体何だ。年齢制限って？」

ホントに一人は知らないのだろう。

このままでは『食えるのか？』と言つてしまいかねない表情だった。

た。

だけど、例え相手が魔王であつても、地上に出てくるのであればルールくらいは守つてほしいと思つた。

そんな事を考へていると、カイリが自分の顔をじつと見つめて聞いてきた。

「なあ、そんなに行きたくないのか？」

いくらカイリが男と見間違えるほどの中見をしているとはいっても、女性と言われば女性と見えるとても整った顔立ちをしていたので、その視線に顔を赤くしながら顔を背けてしまった。

しかし、どうも行きたくない理由を探していくように思われたらしい。

「いえ、そういう訳じゃありませんよ。

じゃあ来週、ここで待ち合わせして、行きますか？  
あと、一つだけ約束を守つてくれますか？」

カジノには一度でも行つてみたいなど純粹に思つていた事もあつたので、こちらとしてはそんな些細な願望がかなうとなれば断る理由がなかつたのでカイリを見つめて言つた。

「な、なんだよ…。」

「カイリさん…くれぐれも、『破壊』しないでくださいね。」

その時、少し甘く見ていたんだ。

相手は魔王で、その話を聞いた魔王も黙つているワケがないって事…。

その2につづく…。

## 第八話 その2（前書き）

諸事情がありまして、遅れてしまいました。  
すいません。

## 第八話 その2

そして、当田…

家には『友達の家に泊まりに行く』といつも当田で、シユロは不思議のダンジョンの入り口へと足を運ぶ。

何故なら、そこが待ち合わせ場所だからだ。

落ち合つ時間まで、30分も早くその場所に向かう。

他の人からみると、待ち合わせとしては早すぎると思つだらう。

続いて言えば『デートは初めてなのか?』なんて思われたりするだらう。

……。

…確かに初めてだ。

だけど相手は『魔王』だ。

何かの拍子で、この世界を破壊されでもしたら…  
…[冗談じゃない]

そんな事を考えながら自分の指定した待ち合わせ場所に向かつて  
いると、カイリが手を振つていた。

「あつ、来た来た。今日はようしくな。」

なんとその魔王は、30分も前に待ち合わせ場所にいた。

「あれつ、時間、間違えた？」

「いや、お前は間違えてないよ。オレが早く来たんだ。」

「そつよ、貴方が気にする事はないわ。」

そして魔王は、もう一人現れた。

「あら、貴方の雇い主の私がここに来てはいけないの？」

「…いや、別に構わないですよ。それじゃあ、行きましょ。」

半ば飽きながらセリカの顔を見ると彼女は不思議そうな顔をしてこんな事を言った。

「何言つてるの、もつ着いたのよ？」

セリカはいつの間にやらカジノのある街へと移動呪文を唱えていたらしい。

移動呪文といつのは空を飛ぶ事を知っているのだが、セリカはそれを必要とせず、そのままその場所に辿り着いたのだ。

「…どんだけ魔力高いんですか。」

そんなでたらめな魔力に自分は呆れていると、『あら、私は魔王よ?』というのもともな意見で片付けられたので、取りあえずカジノのある建物に入る事にした。

「しかし、見事に…。」

セリカは清楚な服装を着ており周囲を引き付けて歩く。

それに対し、カイリはそのボディーガードといったトコロか、黒くフォーマルで決め、周囲を引き離しに掛かっていた。

だが周囲の視線それだけを覗くと、この街に相応しい服装で歩いているのには違いない、誰も『魔王』だとはわからないと思つた。

「…溶け込んでますね。」

差し詰め自分はこのお嬢様の召使いだらうか、素直にそんな感想を口にした。

「まあ、俺たちは魔王でも人に危害を加えるために地上に来たワケじゃないんだ。

紛れ込むような変装…なのかな、まあ、それくらいはするのは普通だよ。

そんな事よりシユロ、それは何だ?」

『何だ?』の正体はおそらくカップに入れた『コイン』だらう。

「あら、それが噂の小さな…」

「似てるけど違います。これがカジノで使える『通貨』なんですよ。」

「通貨…、普通のお金は使わないのか?」

「はい、直接お金を使って賭け事となると、計算する時に難しい様ですよ?」

だから20Gを1枚のコインにして、それを受け付けに行つてきて、100枚、作ってきたトコロなんですよ。」

「あら、私、お金出しないわよ？」

「いや、構わない。うちのおじいことの事にしてください。」

そういうて適当に三等分して、カイリとセリカに分けてあげるとセリカは『そっちの方が多い』と言つてきたので、自分のを手渡しながらスロットを選ぶ事にした。

「おい、シユロ、これ壊れているだろ？」

しばらく、数回スロットで遊んでも、カイリはそんな事を言つてきた。

「壊れてないでしょ、もしさうだつたらこんな感じで『故障中』つてなると思いますよ？」

そう言つてカイリの隣にあるプラカードを指差すが、続いてセリカが文句をいつた。

「いえ、私も壊れていると思つわよ。

さつきから『F』を狙つて、『STOP』を押しているのだけどさつきから揃わないもの。」

魔王の動体視力を持つてすれば、そんな事も可能なのだろう。

「ああ、こいつスロットつて、『F』揃わないんですよ。」

「おいおい、それじゃあ、揃をするじゃないか？」

「ですから、いひやつて……」

言いながら『小役』を辛うじて揃える事に成功しながらこいつ言つた。

「回転数を稼いで、特定のアクションを待つてから『フ』を揃えるのが基本ですかね。」

セリカは『なるほど』と頷きながら、コインを入れて小役を揃えるように狙いを定める。

「あつ…。」

魔王、敗北。

「……。」

気が付くともう一人も、失敗していた。

「…むかつくわ。」

「奇遇だな。セリカ、オレも手伝つてもいいか?」

明らかに壊しに掛かった魔王一人。

「ちよ、待つてくださいよ。難易度とか設定されていふと想うんですけど。」

それに壊したり騒ぎを起しきなって約束したじゃないですか。いたつ、いたたたたつ。」

セリカの放電を軽く味わいながらショロは慌てて止める。

「どうもスロットは、魔王たちにとつては馬が合わなかつたみたいなので、他を当たる事にした。」

ナガラバニ。

## 第八話 その2（後書き）

シユロの性格が決まってないから、文章があやふやになってるね。

近々、性格決めようと思つてます。

## 第八話 その3（前書き）

すいません、更新日を忘れてました。

## 第八話 その3

「お客さん、今日は散々だつたようですね?」

カジノにあるカウンターで疲れた様子で一休みしていたので、そこにいたバーテンダーに負けた様だと勘違いされたので、『ちがう』と言つた感じで否定してしていると、今回の疲労の原因である片割れ、つまりカイリが隣に座つてきた。

「もう『ちよつかい』出さなくていいんですか?」

「『ちよつかい』つて、なあ…。オレはただ声を掛けただぞ?」

知り合いに声を掛けるのは悪い事ではない。だが、それはやつて良い時と悪い時がある。

それが原因でここで疲れて休んでいるのだから…。

数分前の事だ…。

「なあ、シユロ、あの人、だかりはなんだ?」

「『闘技場』ですね。確かモンスター同士を戦わせて勝ち残ったモンスターを予想して配当をもらつていうゲームですよ。」

「あら、だつたら、強いモンスターに掛ければいいだけじゃない。」

「そういう強いのは、倍率が低い様になつてて、掛けても大して儲からないようになつてるんですよ。」

そうやって、今回の競技が終わったらしく、人がその闘技場から離れていくと、明らかに落胆する人たちが多くった。

「いやー、今回は負けたな。」

「まさかハンティキャップマッチとはいっても、鉄巨人に勝つてしまふとは…。」

「しかし、倒された鉄巨人、身ぐるみ剥がされていたな。災難だよな?」

今回の戦いの結果は、みんなの予想を外した大穴レースだつたらしく、豪商らしい姿をした男が苦虫をすりつぶしたような顔をして憎まれ口を叩いた。

「…かー、大損だ。あの『オーラ』と『ヴァンパイア』め。」

「……。」

そして、あまりにも心当たりあるコンビを指す一言、つっこセリカと目が合い、闘技場に駆け寄る。だがもう『彼ら』は撤収していた。

「今田は休田にするつて言つていたのに何やつてるんですかね。の人たち…。」

「ま、まあ、休田を謳歌しているつて事で良いんじゃないのか?」

「休田謳歌が追いはぎ稼業ですか、これでも十分な給与を出しているつもりですよ。」

何か自分の経営手腕に問題があるのでしょつか?」

「お、落ち込むなよ。それより次のオーダー表が出てきたぞ?」

半ば…というより、ほとんど納得できてはないが、オーダー表を見ると開催側にとつても前回の結果があまりにも予想外だったのか、『勝ち試合』がオーダーされていた。

「やつぱりホントに強いのは、1・2倍・低いのね。」

「まあ、穴狙いでこの100倍とか狙う人もいますから、コレが妥当なのでは？」

「じゃあ、シユロお前はどれに賭けるんだ？」

やるとは言つていらないのに、カイリはやる事を前提に聞いてきた。

「じゃあ、2番人気の…」コレに賭けてみます。「

だが自分としては興味があつた事はあつたのでやつてみるとした。

そして…

「凄いじゃないかシユロ。」

賭け事に勝ち、何とか格好の付いた事を内心で安心していると、カイリが抱きついてきた。

当然、気恥ずかしさの身体を外そうとするが、セリカの時もあつた様に彼女に対してもどんなに力を込めても離れるワケがなかつた。

ただ、前回と違つるのは背中が物凄く寒気が走つた。

「カイリ、危ないわよ？」

そう言つてセリカは、指で何かを弾き『ブーン』と鈍い音を立て  
カイリに向かつて行つた。

あまりにもゆっくりだったのでカイリは受け止めると思つたが、  
カイリは手の甲にそれを当てて、真上にそれを弾き、地面に落とし  
てそれがメダルだったとわかつた。

しかも、そのメダル、指で弾いた部分だけ凹となつていた。

「危ねえな。受け止めていたら手に穴が開いてたじゃないか、オ  
レがコイツに抱きつくのがそんなに嫌なのかな?」

「そうね。むかつくわ。」

「別にシユロだつて、嫌がつてないんだし、なあ?」

こういつ時に同意を求められる勘弁してほしい。  
だけどさすがに恥ずかしいので、解答の変わりに離れるようこ  
足搔くがカイリの腕は微動だもしなかつた。

「じゃあ、ここは一つ勝負しないか?」

「どうこいつよ?」

言つている間にも明らかにセリカ本人の殺氣で空氣が変わつてい  
つて、カイリはさすが魔王といつてコロかそんな事も構わず  
こういつた。

「ここはカジノだ。次の闘技場の試合で、オレが勝つたらシユロ  
を貰つていぐ。」

「ちよつ、ひょち、何…かつ…!」

あのセリフは『勝手に決めてるんですか?』だったが、カイリは首を絞めて…というより閉め、何も言わせなかつた。

というより、初めて首を絞められて、苦しさより痛みが走った。

「そうね。じゃあ、私が勝つたら、あなたはこれから私の国に来るの禁止ね。」

そうしてセリカは自分の要求を言つて、その賭け事に乗る事にしたのだ。

問題はここからだつた。

「おーいっ！」

カイリは気合十分と言つた感じで、中央にいる自分に声を掛けたのかと思いきや、闘技場の彼女の賭けたモンスターに声を掛けた。

それを発見した筋肉質のモンスターは、明らかに驚き、動搖しながらそちらを見上げたのを見て、カイリなさうに言った。

「今回の戦いはさ、こちらにも大事な勝負なんだ。

負けると絶対、許さないからな。

周囲には『普通の応援』の言葉の様に思えるだらう。

だが、王様を前にした。

うがお互いに回を合って餌をめた。

『出来レースしつけば、いいんじゃね?』

その程度の話し合いが行なわれていたのであらう。

だが…。

一つ目の小さな魔法使いのモンスターが『何か』を発見した。というより、『してしまった』という方が妥当だらう。

事の重大さをいち早く察して、モンスターにしか聞こえない声を出して自分より強いモンスター2匹に気付かせた。

硬直した3匹、セリカはカイリと違ひただじつと見つめていた。

困惑する2匹、幸いその一つ目のモンスターは難を逃れたらしげ、当然、困惑していた。

『絶対、許さない』といったカイリは、外れたらどんな仕打ちをするのだろう。

『絶対、何かする』セリカは、外れたらどんな恐ろしい事が待つているのだろう。

考えたらこっちの胃が痛くなつて来た頃。開始のゴングが鳴つたのであった。

そして、その結果…。

「両者ダブルノックアウトでしたよね？」

「いや～、結構良い所まで、行つたと思つんだけな…。」

ああ、あの時に運良く残つた一つ目のモンスターの涙の意味を、

」の明るく笑っている魔王は解っているのだろうか…。

いや、わからないだろ？

「それでカイリさん、参考になりましたか？」

とりあえず、本題を聞いて見た。

『カジノに行つてみたい。』

そんな事を軽く言つているがカイリの事だから、自分の国にカジノでも建てるつもりなのだろう。

しかし、カイリから出た言葉は意外な答えだった。

「いや、ならなかつたな。」

## 第八話 その3（後書き）

その4に続きます。

「どうしてですか？」

「コレだよ、コレ…。」

カイリはそう言って、一枚の紙切れを差し出した。  
それを手にして見ると、それはこのカジノでの景品の全ての品目  
が書かれていた。

だが、これが何故『必要ない』という理由になるのかわからなか  
たので、つい、どうしてなのか聞いてみるとカイリは相変わらず、  
軽い調子でこう言った。

「簡単に言えばさ、景品なんか設定するとアタシの国にいるモン  
スターはその景品田当てで働くがなくなるだろうな。  
そうなった時に、敵対している国々から攻め込まれて見る、あつ  
といつ間だぞ？」

意外としつかりとした考へで自分の国のことを見つっているカイリに  
驚いてしまうが。

「…何か、お前、失礼な事を考へてないか？」

「いえ、全然。」

最近、表情を変えずに否定する自分を自分で褒めてあげたいと思  
います。

「どうか、だつたらいいや。

大体、景品つて言つてもモンスター相手に好みはそれこそ様々だ  
ろ、そうなると面倒くさいからな。

まあ、そういう事で、今回誘つておいて何だけど、あまり参考に

ならなかつたな。」

『悪いね』と軽く、そして、気遣い謝つて、カイリを、周りから見たら魔王とは誰もが思わないだろつ。つい笑みをこぼしながら、忘れない内にカイリに小さな小箱を差し出した。

「何だ。コレ？」

「今日のカジノでの景品です。」

それは決して高いモノとはいえないが、小さなモンスターがぶら下がつているピアスだった。

「すいません、今日の稼ぎでこれくらいしか、交換出来ませんでした。」

「ホ、ホントに、いいのか！？」

じつちを向くカイリの目は輝いていたので、気に入つたのがわかつたので安心しながらこつ言つた。

「はい、これが『カイリの分』ですか。」

そして何故か、彼女はまるで空氣の抜けるようにトランションの下がる。

「あれ、もしかして、気に入りませんでした？」

「いや、何でもない。お前は悪くないんだ。ま、まあ、ありがとな。」

でもよ、もう一つはセリカのモノとしても、他の包みは何だ？」

「これはブリードとダロタの分です。

一番安い景品ですけど、魔力の回復する『魔法の聖水』2つをお  
みやげにするつもりです。」

「ダロタって、あのオーラーか?」

「はい、彼は魔法は使えませんけど、換金するなり、鑑賞用にさ  
せるなり扱いは彼らに任せるつもりです。」

『ふーん』と、ほかに何か気になる事があるのか、じつを見つ  
めながらカイリはこう言つた。

「……やっぱお前変わってるな。」

「じうじうですか?」

「前から思つてた事だけじや。」

普通、魔界のモンスターってのは、種族間の上下関係みたいなも  
のが厳しいモノなんだよ。

なのにお前の店で働くあいつ等とお前と来たら、そんな垣根見た  
いなモノがないだろ?」

「やうこつモノですかね?」

「そんなモンだ。その証拠に今日一緒に仲良くなれないから、じや  
ないのですか?」

「ああ、あれですか?」

それはただ自分が店長としての威儀みたいなモノがないから、じや  
ないのですか?」

「そりがしいが、ブリードは貴方の事を結構評価してたから、そんな

事はないと思つわよ。」

「あつ。」

いつの間にか自分のもつ一つ隣にセリカは座っていたので、セリカにも景品を上げる事にした。

「はい、ノーブ。

カイリさんと同じモノですけど、どういだ。」

セリカは景品であるピアスをじつと見て、受け取りながらカイリと対照的な態度で素っ気無く言った。

「まあ、気に入らないのはカイリと同じだけ、貴方のプレゼントならもらつておくわ。」

「おいおい、じつにプレゼントはな。

素直に『ありがと』と言つて、受け取るのが礼儀だというのがわからないのか?」

半ば呆れた表情で、カイリはセリカに注意していると、それが…

「あら、カイリ…いたの。」

『垣根』のある魔王達の戦いのゴングを鳴らした。

「あん、てめえ、何つった?」

「言葉の通りよ?」

世紀の一戦が今、正に始まろうとしていた。

当然、この事態を黙つて見過ごす自分では無い。

「ちよ、ちよっと、待つてくださいよ。」

一人に間に割つて入ろうとする。  
しかし…。

「シヨロは、下がつてなさい。

しつこつ輩は、一回痛い目見ないとわからないのよ。」

片手で軽々と自分の身体を持ち上げて払われてしまつ。

その事で測らずして後ろから笑いが起つたので、周囲を見ると人が集まっていた。

おやうへ、これから起つる事態を理解していないのだらう。

しかし、セリカもカイリも周囲が気にならないのか、カイリに至つてはしつつ言つた。

「はつ、この前、お菓子を盗み喰われたくらいで、腹を立てるお前にオレが倒せると思つてゐるのか？」

おやうへ、『セリカ・カイリ事件』の事だらう。

しかし…。

お菓子とられた程度で、島が消滅した…。

では、今回はどうなるのだらう…。

…いかん、とても良い方向のイメージが沸かない。

何が何でも止めなければ、世界が滅ぶ。

『ハハハ…。

明らかに一人を震源にして地震が起きた。

だが、ここまでだつた。

自分の身体が崩れ落ちる様に倒れたからだ。

『シユロー！』と先に気付いたカイリが駆け寄るが返事が出来なくなつていると、頭に声が響いた。

『すまないな、これ以上、騒ぎになると收拾がつかなくなるので、手つ取り早い手段をとらせてもらつたよ。』

この声は数分前に聞いた事のある声だつた。

『もしかして、こここのバー・テンダーさんですか、でも、どうして？』

『それは、私も魔界出身だからだ。』

驚きながら、話を聞いていると、昔からカジノのある町には魔界と何かしらの繋がりがあるらしく。

そのため、闘技場のモンスターはその契約の中で、出て来る事が出来るらしい。

そういえば、ダロタもブリヂーの闘技場に出ていた事を思い出していると、バーテンは話を切り出した。

『本題に戻すぞ。今日のトロロは帰るんだな。』

『ですけど…。』

『お前がどんな勇者か知らんが、魔王を一人同時に戦つて勝てるのか?』

そんな話は聞いた事もない、それ以前に勇者でもないので、この魔界出身らしいバーテンの言う事を聞く事にして帰ろうとして動こうと身体を動かすがそれが出来ない。

目は開いている、息も出来る、ただ出来ないのは身動きが取れないだけ、こんな状態でどう帰れというのだろう。

『それなら、じつちに任せとおけ。』

…何かとでも嫌な予感がした。

そうして、今、自分はどうなっているのかと…。

「カイリそろそろ、シユロを背負うの交代の時間よ。」

「もう、そんな時間か、少し早くないか?」

ホントに世紀の大惨事を未然に防ぐ事に、何とか成功したのだが、今、自分は村に着くまでしばらくの間、一人に交代で背負われている状態が続いていた。

意識がある為、物凄く恥ずかしいが、身動きが取れない。

『今なら、このシユロだつたか。』

『コイツを好きにする事が出来るぞ?』

『のバーテンダーの一言で全て丸く収まつたのだ。』

急に喧嘩をやめて、お互いに頷き合い、自分を背負つてカジノを出て数分。

まるで贅になつた氣分で、運ばれているとカイリが口を開いた。

「おい、セリカ、あれがショロの住んでる村だろ？？」

「やうね。」

「じゃあ、始めるか？」

『やうね。』と明らかに笑みをこぼした瞬間、何か自分の貞操に危機を感じたので、セリカ達に聞こいつと何かしら足搔く。

だが……。

「この流れの経験上、セリカがやつたのだろう。」

今度こそ意識が飛んだ。

「はつ。」

次に用覚めた時は、見覚えのある自分の村にある宿屋の天井だつた。

「……」

慌てて自分の被つっていたシーツを捲る。

「よかつた。」

まだ貞操は守られていたみたいだ。

だが……。

「おい、あいつだらう?」

「ああ、あの美人一人と同時に付き合っているヤツだよ。」

……村中が、とんでもない噂が立っていた。

「えええへー!?」

## 第八話 その4（後書き）

ようやくショウロの性格が決まりましたので、次回は若干読みやすくなると思います。

## 第九話 哀しき戦士たち その1（前書き）

『学園生活』をシリーズに進めてきましたので、骨休みにちょいと執筆してみました。

ちなみに作者、この私の意向で、もとあつた第九話ですが、編集させてお送りいたします。

## 第九話 哀しき戦士たち その1

人間と言つのは、たとえどんな『異常』とも呼べる環境でも、最初は不慣れにすゞしていても、徐々に慣れてしまつものである。

それはこゝ、魔界にいるショロといつ人間も同等の事が言えるであろう。

「じゃあ、そろそろ店じまいの用意をお願いしますね。」

と、明らかに自分より年上のヴァンパイアに命令して、自身はオーラと共に内部の片づけを始めている。

そう、この店には人間とモンスターが共に経営している。

外部からみれば、それは異常極まりないだろう。

だが、人間慣れてしまえば、どうつて事はないといつを最近知つた。

その証拠に、3人は文字通り『一休み』している。ブラードは本を読み、ダロタは何かを探していた。

「ショロ、そこにある手鏡を取つてくれるだか?」

鏡が自分の近くにあつたので近くに滑らせる様に投げると一言お礼を言つて、バリカンを手にしたので、今度は自分が何をするのだろうとダロタを見ていると、ダロタはおもむろに兜を脱ぎ出した。

あの営業時間でも外す事のなかつたダロタの兜が今、外されようとしている。

貴重な光景に慣れなどない。

気が付くとブラドも興味深いのだろう。  
本を机に置いてそれを見ていた。

ゆつくりと外されたそこには…。

「モヒカンだ…。」

初めてオーケの髪の毛は赤い毛なのだと知った時、次に浮かんだ言葉はそんな一言だった。

「んだ、912歳の頃から手入れを続けているだ。」

そして、ダロタはバリカンを手に鏡を見ながら自分の頭を剃り始めた。

オーケの種族上、髪の毛は薄いのだろう。

ダロタはポツポツと生えている無精ひげのような髪の毛とシワだらけの頭を『ウイーン』と撫でていると『ジュジュ』と毛が剃れた音がしていた。

このオーケ、もといモヒカンオーケは、さつき『912歳』と言つたが正確には…。

人間で例えると5歳だ。

ちなみにさうに正確に年齢を出すと現在『1460歳』、人間換算で『8歳』だ。

長寿なオーラもいるらしいのだが、その年齢を出すと…。

66612歳…。

ようは計算するくらい面倒な年齢のオーラもいるらしい。

「あら、もう営業お終い?」

この国の魔王、セリカの来店で店内は更に異常を増してしまつが、こんな状況も慣れてしまった。

「あつ、はい、何か用ですか?」

「あら、まるで用が無かつたら私は来ていけない様な言い方ね?」

セリカは、そのまま机に座らうとしたその時だ。

「シユロ…。」

すると、セリカは近くにあつた木彫りの魚を咥えた熊のビニでもある彫刻を手にする。

「動かないでね…。」

ブランドが土産に買つて帰つてきた、それを手にして振りかぶり何をするのかも聞こつとする自分の意見も待たずそれを投げる。

ガシャン…と、自分の後ろにある窓ガラスを投げた形のまま貫通させた。

「急に、何するんですか？…？」

「ちい、逃げられたわね…。」

おそらく何かを排除する為に、それを投げたのだろう。

「あ…。」

しかし、次の瞬間、目に入ったのは…。

「あら…。」

もう一度いつぶつだが、

『貴重な光景に慣れなどない。』

だが最悪な事だが、自分の思考ではそれを言葉に出来なかつた。

そこには、窓ガラスが割れた音に驚いて反応した勢いで悲劇が起きてしまつたオーケがいる。

自分よつ年上（年齢不詳）のブラドが顔を激画にして、こう言んだ。

「ダーロターッ！…！」

## 第九話 哀しき戦士たち その2（前書き）

そういうえば、ダロタつて初登場の時、兜を脱いだ事あるんだよね。

まあ、中身まで見えなかつたつて、事で……。

## 第九話 哀しき戦士たち その2

「な、なんて事を…。」

「それは、私の台詞よ。あれはどういう事よツ！？」

今度ばかりは、セリカが悪いだろうが彼女はそんな事おかまいなく、何かに怒っていた。

いつものイラつきではなく、純粋な怒りだというのが純粋に見て取れたが、それじゃあダロタがあまりにも可哀相だったので、精一杯食いついた。

「いきなりモノ投げ付けて、目の前の惨事が目に入らず、何を急に怒っているのですか？」

『キツ』と自分を睨みつけて、自身の魔力を解放したのだろう『ドンッ！…』と空気を波打たせながらシユロを睨みつけてこう言つた。

「良い事、何とかしなさい…！」

まつたく何を何とかしろと言つのだろうが、それを聞こうとする前にセリカは思い切りドアを閉めてそのまま出て行つた。

「一体…何ですか、あれ…？」

「いや、わからん…。シユロ、その辺に何があつた？」

「何つて、魚を咥えた熊の木彫りの像…。」

「それは掴んだモノだろ？？」

そんな事を話して投げたそのトマロを注目していると、何かが動いた。

それは…。

「…ネズミ…ですか？」

「ネズミだべな…。」

気が付くとダロタが横にいた。

「ダロタ、大丈夫…なのか？」

年上ゆえの行動だろうか、ブラドは不安を隠しながらそう聞いてみると、ダロタは鏡を見ながらバリカンを手にして、ひと通し、そしてこう答えた。

「髪は、また生えてくるだ。

それより今、目の前にある困難に立ち向かうのが大事だべ。」

…なぜだろうかダロタが、かつて良く見えた。

「しかしネズミか、参ったな…。」

「ネズミって、それが怖いって、あの人らしくないじゃないですか？」

「いや、シユロ、それがあの人だべ。なあ、ブラド？」

「そうだな、これは私の方から話したほうがいいだろ? な。それはセリカ様の子供の頃の話だ。

まあ、今も昔も性格は変わらないのだがな。

当時子供の頃と言う訳でな。セリカ様には美容の為と毎寝の時間が定められていたんだ。

そして、セリカ様が寝ていた時だ…。

「その時…？」

「耳をかじられたんだ。」

「どこの未来のネコ型ロボットですか…。」

ブラドはさつきから笑いを堪えていたのだろう。とつとつ笑い出した。

「それ以来セリカさまは、毎寝をする事はなく、ネズミをみるとさつきのようく嫌がる様になつたのだ。おかしいだろう。」

正直、笑えなかつた。

自分でもネズミに噛まれたら疫病にかかると言つ話を、よく聞いているからだ。

「そんなに笑つて、何がおかしいかしら？」

それともう一つ、魔王様がそこにいらっしゃるからだ。

「さすがに失礼だと思って戻つて来てみたら、ブラド、何が『おかしい』の？」

『ねえ?』と聞きながらブラドの頭をわし掴みにして、自分の身長より高いブラドを苦も無くねじ伏せていた。

「あの後、高熱にうなされる私の苦しみがあなたにわかるの? それとも貴方達に同等の苦しみを『』えてあげましょうか?」

今度はこっちを見つめてきたので、思つ事と言つ事は一つだ。

「それはブラドさんが酷いと思つます。僕たちは笑えませんでしょ。ねつ、ダロタ?」

「んだつ。」

当然じゃないか、人が嫌な思い出を笑いモノにする人は、人として最悪だと思う。

こういう時は連帯責任というのも、確かに考えた。だけど、今回の件に関しては『明らか』にこっち無関係なのだ。

だから、この罰をブラド一人で受けるのは当然だと思った。

そう、巻き添えなんてゴメンだなんて、一つも考えてない。

「さすがにわかっているのね。

見なさいブラド、あなた最年長のくせにそんな事もわからないの?

?』

「いたたたたつ、軋む、軋んできますつ、セリカ様つ!-!」

「そうですよ。反省してくださいよ。

ねつ、ダロタ?」

「んだつ。」

「セ、セリカ様、こ、これ以上はマズイです。か、顔が8の字になりますーー!」

「あら、貴方、どの時代の生まれかしい?」

そろそろ断末魔の雄叫びを聞こえてきそうだったので、セリカに聞いて見た。

「とりあえず駆除しておけば、良いのですかね?」

「あつ。」

ブレードを手放して本題を思い出したのだろう。



## 第九話 哀しき戦士たち その3

「そうね。来ないよ」シリとは言わないから、駆除したら許してあげる。

じゃあね…。」

「行つてしまつただ…。」

「いいのか、シユロ、みんな安請負して?」

「別にただのネズミ退治でしょ」  
普段、ウチでもやつてますよ。」

「……。」

「一人して、その顔はやめてくださいよ…。」

「いや、地上と魔界の違いは、普段何気ないトコにあるのだなと思つてな。」

「えつ、何がですか?」

「…まあいい、とりあえず一日、家全体の掃除に取り掛かるとしよ。話はそれからだ。」

そんなやつとつを思い浮かべ、掃除をする事、約一時間…。

『ネズミ退治中。』とこづラカードがぶら下がったロープでグルグル巻きにされている。

我が仕事場を前に横一列に並ぶ、男三人がそこにいた。

さつきまで掃除をしていたためエプロン姿のショロ。

掃除が済んだので、エプロンをとつた普段着のブラド。

そしてこれから『エリ』の戦いに赴くのだろうか、ガスマスクを被つたダロタ…。

「ダ、ダロタ？」

「よしそ、初めてくれダロタ。」

「んだつーー！」

何でそんな格好をしているのか、聞こづとする前にダロタは『シユコー』と不気味な呼吸をしながら突撃していった。

「ブラドさん、この物物しさは一体…？」

明らかに地上と違うネズミ退治に心惹かれてしまい、今度はブラドに聞こづすると家から煙が立ち上ってきたので、さつきダロタが何をしようとしたのかがわかった。

「地上は巣穴を埋めて、その辺にネズミ捕りを仕掛けるのですが、なるほど魔界は煙をたててネズミを追い出すワケですか。」

確かに『地上と魔界の違いがある』といつモノだと感心しているとブラドはよつやくコッチを向いたが、しかしブラドは困った顔をしていた。

どうしてそんな顔をするのかわからなかつたが、なんとなく理解出来てきたのはダロタが戻つて来た時だつた。

「寒かつただ。」

「シユロ、知つてゐるか、モンスターの中には氷を吐いたりするヤツがいるらしいぞ？」

「それは知つてますけど、まさか…ネズミも？」

「お前な。魔界に『生きうる全ての生命』を地上の人間は『モンスター』と呼んでいるのだぞ？」

おいダロタ、大丈夫か、ガスマスクが曇つてゐるぞ？」

身に着けたガスマスクは温度差で曇つていたがダロタ本人は元気だつた。

「よし、今度は俺の番だな。」

そう言つて次に「ラードが家の中に入り、しばらくして戻つて来て」  
こつ言つた。

「つまく屋根裏に逃げ込んだようだな。」

そうなると今度は何となく想像出来た。

「今度はシユロ、お前だ…。」

屋根裏に逃げ込んだネズミを発見して倒せといつただろう。

「この薬を飲んでくれ。」

「ちよつと待ってください。  
何ですかそれ？」

「何つて……なあ？」

そういって何かおかしい事を言つたのだろうかとブリッジとダロタ  
は首を傾げていた。

…とてもワザとらしく。

そして、聞かされたのは、魔界独自のネズミの撃退法だった。

## 第九話 哀しき戦士たち その4

「というワケで、シユロ、ダロタ、準備はいいか?」

ブランドが作ったインカム越しに聞こえてくるブランドの声に、『ん  
だつ』と一言、頼りがいのあるように頷いたダロタだが…。

「何が『というワケ』なんですか?」

ブランドさん、やつぱりやめましょう。』

明らかに乗り気ではない、人間がここにいた。

「どうしたシユロ、『ううのはノリが大事なのだぞ?』

「確かに今、僕たちは『ネズミ退治』のために『うういるんですよ  
ね?』

「何を当然な事を言っているのだ。何か問題があるのか?」

「大アリですよ。  
ネズミ退治はわかりますよ。何ですか、この装備?  
在庫に、マシな装備ありましたよね?」

現在、シユロの装備は、鉄の剣、鉄の盾といった一般的な装備を  
施されていた。

「おいおい、ただがネズミ退治に、大事な商品の材料を使ってほ  
しくないものだな。』

「ただが『ネズミ退治』って言いましたけど、匕首からしてみれば『モンスター退治』なんですよ？命が関わっているといつのこと、この一つだけってのは心細いですよ？」

「何を贅沢言っているんだ。十分だろ？？」

「口、コレが贅沢ですか？」

繰り返すよつでしつこよつだが、装備を確認してみよう。

鉄の剣  
鉄の盾

コレに何の問題があるか、それでは、別の視点で見てみよう。

武器	鉄の剣
盾	鉄の盾
身体	布の服
頭	なし

防御力に凄く問題があつた。

「だからダロタも一緒に屋上に上がらせたのだろう。」

「そんな問題じゃないですよ。  
彼にいたっては、フル装備じゃないですか？」

ちなみにコレがダロタの装備だ。

武器 木の斧

盾 木の盾

身体 鉄の胸当て

頭 ブリキの兜

「この扱いは一体なんなのだろ、うか？」

しかし、どうしてシユロは、鉄の剣を手にするほど、ただがネズミをそんなに怖がっているのか、それにはワケがあった。

「どうして、自分達まで小さくなる必要があるんですか？」

現在屋上においてシユロはブラドが作った薬によつて身長約5センチくらいだらうか、小さくなつていた。

「それはお前がネズミを相手をしてもらひからだ。」

「…ブラドさん、人間を過大評価してませんか？」

全生物において、人間は『強い』生物であるわけがない。

実質、ネズミ退治において、人並みにネズミが大きかつたら、退治にしようと思わないだらう。

ましてや魔界の生物は皆、モンスターなのだ。

せめて装備を充実させて欲しかつた。

「それにですね。」

文句はまだ死きない……。

「シユロ、見つけただつ……」

その時、ダロタが声を上げていた時にはシユロの田の前にネズミがゅつくりとこちらを睨んでいた。

「うわ……っ……！」

思わず呻くようになると同時に、ネズミはこいつに突進してきた。辛うじて横飛んでそれを避け、向き直ると同時にダロタに向かつてこいつ叫んだ。

「ダロタ、こいつ……！」

こいつぞやの様に抱き抱え、懸命に走るシユロが目に入ったネズミは、口を開けて全力で向かつてきた。

一足歩行と四足歩行で走る二つの動物。

絶対的に不利な競争……。

徐々に短くなる生命線……。

しかし……。

「……？」

急にネズミの動きが止まつた。

何が起きたのかわからないのだから、代わりに自分がそれを確認した。

トラバサミ。

コレがショロの左手にはめられた指輪の力…。

抜け出さうと足搔くネズミを無視して、ショロは手にした鉄の盾をかざす。

すると、指輪が輝き出してそれを光の玉に変え、それをネズミの手前の床に溶かすように投げた。

「……」

何とかトラバサミから開放されたネズミは、それに気付かないのが見えていないのか、突進を再開する。

しかし、前回との違いは獲物が動かない事だ。

知能があつたのなら、少しくらい怪しむだろう。

だが、そんな事を考えさせる前に、鉄球が飛んできた。

その指輪はワナを作る。

痙攣したネズミを見ながら、もう動く事もないだろうと自分たちは勝利を確信した。

……。

「…というのを自分としては、少し期待していたんですよ。  
どうして、コレを使つたらいけないんですか？」

「長い想像だな。

大体、お前、あの釜を使わないでワナを作つたら一品が限界だろ  
う？」

とにかく、ダロタと一緒に任務を果たすんだ。  
いいな？」

渋々、頷くのは人がいいのだろうか、人間の性だろうか？

とりあえず、ネズミを探すことにした。

第九話 哀しき戦士たち その5（前書き）

今年の初投稿です

## 第九話 哀しき戦士たち その5

「ちりりりゅく 女達はあ～いするつ 男達へ～」

「それ何の歌ですか?」

「この前、地上で流れていた歌だ。

アキ…」

そんな事を聞いていると、ダロタが『ていん』と音を立てて転げ落ちてきた。

この家の屋根裏というのは、元々、屋根裏で何かをするよつな田的に作られているワケではないのでフローリングではない。

そのため小さくなつた自分達にとつては独特の垣根が出来ており、さつきまでその垣根の上を歩いていたワケだが、こんな細い道で2人が立つていたら、ネズミが突進して来た際に危険だと話し合い。このフロアに目印をつけて、交代で偵察して来てはこの場所に帰つてくる。

見つけたら、片方を呼ぶという作業をしていたのだが、一つ思いついた事があつたのでブラドに提案した。

「セリカさんに家」と吹つ飛ばしてもらこまじょうよ。」

「それはもつと駄目だ」

「どうですか、一番手荒な手段ですけど一番手つ取り早いですよ?」

「あのなあ、シユロ。

あまりこう言つ事は言いたくないがな。

たしかに簡単だ。

たしかに何回か家が吹き飛ぶという事態が今まであつた。だがな、その修繕費は何処から出していると思つていい?」

しばらく考えて、一人の人物が思い浮かんだ。

当然という事なのだろうか…

「まさか、ブラド?」

「流石に気付いたか、その通り私の自腹だ。

いくら富仕えの身でも、それもそろそろ…底を付いて来てな。」

ああ、なるほどと申し訳なく謝つていると、ブラドは『かまうな』と言ひのを聞いていると…。

「だが、考へても見る。

そこでお前がセリカ様の為に、ネズミ退治をしたといつ各自で私がこうこうのだ。

シユロは勇敢にも、そのネズミと同じサイズになつて打ち倒しました。

そうなると懸賞金も期待できるとこうモノだ

「ブラドさん…、その人が負けるつて考へた事あります?」  
「…」  
「どうも狙いは『ある一部』がしめているよつなので、大切な事を言つておく。

思わず弱氣になるのもワケがある。

… プラダと会話をしている途中で音がしていた。

実際はとても小さな音だったかもしない、だが身長5㍍の白分達にとってそれはとても大きな音だった。

ゆづくつと振り向きながら、手にした剣を握り締める。

「いや～、よくこりゃしました」

といった感じのヤケに腰の低いネズミが出てきた。

プレスを吐き出すそうだが…

身体は痩せ細つており…

『弱そう』

「あつ、すいません…

この場所、日光当たるので、この日陰側でお話出来ませんかね。私、日光に当たると立ちくらみが激しくて、激しくて…」

やたら虚弱体質のネズミを見て…

『勝てる』

「あなた方が来た理由はわかります。立ち退けというのでしょうか？ ですがね…魔王セリカがネズミ嫌いだといつのは、私どもでも有名でしてね。

それを『利用しようと/orて考えてはいません』が、魔王が立ち寄

る店に『魔氣のあるネズミ達と称賛されよつとは思つてはいません』  
けど…。

ど・う・し・て・も、立ち退けといつのなら、それなりのモノを  
拝つてくださいよ

腹黒いネズミに心していひ思つた。

『やつちまおう』

そして、じつじつた。

「やつちまえ…」

「えつ、えええ、ちょつ…ぶつ…」

言つのが早いかダロタの走り込んでからの見事な頭突きがネズミ  
のアゴに命中する。

「いや…、ぎやあああ…」

そうして…。

「リンチだな…」

「失礼ですね。戦法といつて下さいよ。

人間の狩りは、集団で行なうのが基本なんですよ。

大体、ボスが現れたら集団で戦いを挑むのはRPGの基本でしょ

う?』

戦いを正当化していると倒れていたネズミがピクリと動いてこう

呴いた。

「ふふふ……無駄な事を……。

私を倒しても、あの御方さえ生きていてくだされば、また第一、第三の私があ前たちの前に現われるであろう。

それまでこの一時の勝利に浸つてはいるがいいわッ！――

そのネズミは、まるで中ボスのような事を言い出した。

第九話 哀しき戦士たち その6（前書き）

ちなみに次回で第九話は終わりです

## 第九話 哀しき戦士たち その6

「それで、お前の御方とやらばジに隠れているんだ？」

数分後、帰還した自分達は、憎たらしいネズミがもたらした情報を詳しく聞くため、元のサイズに戻っていた。

「これ以上、時間を掛けると帰る時間になるんですよ。話してもらえませんかね？」

「私も甘く見られたモノですね。それで、口を割るとでも……？」

そう言つと、『ふい』と顔を背けたので…。

「ダロタ嬢……」

ダロタが頷きネズミに…

「な、なんだ…痛たたたつ…！」

『動』

「ムチは、ムチは駄つ目えええつ…！」

『物』

「あちつ、ロウガロウがたれてるつ…！」

『虚』

「これ以上、重いの乗せないで…痛いでつすううう…。」

『待』

とりあえずダロタのやつている事は、教育上よろしくない『4文字』なのでバラバラに使い表現する事でよしとしよう。

あとはダロタの格好とか、ネズミが何か言つている事とか『絶対怪しくないけど、時間が迫つてるのであえて、ブランドも突つ込まず、何とか生きているネズミ』と書つた。

「あのなあ、勇気のあるネズミ達と称賛だったな。その意気込みは買つてやるが、『始めて』だと思つのか?」

「そ、それは、『うつ事で』『わこましょつか…』

「ネズミが怖い』といつ事を利用する魔王がいなかつたと思うのかと聞いているのだ」

聞く所によると、その弱点を利用する他の魔王はいたようだ。

その時、何が起きたのかといつと、自身の城を破壊するだけでは気が治まらなかつたらしく、相手の国にそのまま攻め込み…といつより、消滅させたらしい。

「誰とは言わないうが、その赤毛の魔王は、以来、セリカ様にネズミだけは使ってはならないと感じたそうだ」

「じゅ、じゅあ…？」

「お前達」ときの心配をするつもつはないがな。  
消滅は避けたいだらう?」

ガチャ…。

「シユロ、そろそろ帰る時間みたいだけ終わったの?」

その時、消滅の主がドアを開けた。

…。

バターンッ。

…。

「…看板見なかつたんですかね?」

「そんなの通用する人ではないといつ事だ…。  
どうする、消滅はすぐそこまで迫つてゐるぞ?  
逃がしてやるから、大人しく教える。  
お前だつて、消されたくないだらう?」

「そ、それはそうなのですが…。

あの御方は、どこにいるのやら、私も知らないのですよ

「何い…ダロタ…!」

「んだつ…!」

「ままままつて、ホントなのですよ。

『新しい別荘を作ったから、しばらくそこで過ぐす』と言つたきり、戻つてこないのですからああああつー？』

…ちなみにダロタはオスです。

「別荘に心当たりは？」

「さあ、木で出来た像に穴を彫つた…とくらいしか聞いておりませんから…」

「木彫りの像だと…」

言葉を頼りに部屋を探すが、この店にはそんなモノがない。

「小さい部屋だがなかなか快適と聞いていただけですから…」

だが…。

「小さい…木彫りの…」

三人は視線はある一点を見ていた。

「ガラス割れでありますね…」

ネズミが言つたように、そこはガラスが割られている…。

『小さく』手ごろなサイズの、魚を咥えた熊の『木彫りの像』の形でセリカが打ち抜いた窓がそこにあつた。

その7に続く。  
。

「ふうん、そういう事…」

その時、お怒りの消滅の王が自分達の命を揺さぶらんと呴いていた。

「セ、セリカ様、ど、どうかお怒りをお納めください…！」

「怒つてないわよ私はただその下種の入った像を触つて下種に投げつけた自分に腹がたつてているだけよだいたい何その勇気のあるネズミ達と称賛されたいのが目的でこの店に住み着いたつて良い度胸じゃないどちらが上かこの機会に教えてあげるから早く逃げなさいシユロ！」

ブランド達は無視なのだろうかと考えつつ、怒りのためだろうか、句読点すら着けずに話し出して『逃げなさい』と言つたセリカの言う通りに逃げようと思ったが、それが出来なかつた。

そのせいもあるが一人の方を見てみると、同じように逃げようと足搔いていた。

陽光の無い室内で、三人の薄い影が濃くなつたと思えば、セリカに向かつて伸びていくので、今までとは違う破壊だと直感させてならない。

だが…。

「セ、セリカさんっ！」

『すりつ』と、身動きがとれるよくなつたと思つとヤツカはその場に倒れようと崩れたので慌てて抱き留めた。

。

「おい、どうだ？」

「まだ、用覚めませんね」

奥の休憩室のベッドにセリカを運び、介抱していると「ラドが様子を身に来たようだつた。

「とにかくシユロ、時間は大丈夫なのか？」

「それなら、昔に帰る時間が遅くなつた事があつたんですよ。今回もそういう理由で誤魔化しますよ」

「すまないな」

「いえ、これくらいの事しか出来ませんの…」

すると「ラドは『ククツ』と笑い、それに気付いた自分をみて『悪い』と一言謝つてこう言つた。

「よく魔王相手に、わけ隔てない対応が出来るモノだと思つてな。それが人間というモノかと思つたら。ついおかしくて笑つてしまつた」

「失礼ですね」

「ああ、失礼だ」

「ブラドの対応についムスッとしてしまつたが、ブラドは構わず『  
だがな…』と自分に言つた。

「誰よりも早くセリカ様に駆け寄つて、ベットに運んだ事を『  
これくらいの事』なんかで済ませるんぢやない。

私は人間の事を全部知つているワケではないが、それは誰にでも  
出来る事ではない事くらいは知つているのだからな。

…ん?」

「どうかしました?」

「いや、何でもない。

じゃあ、私とダロタはもう帰るから、後は頼むぞ」

そう言いながら、『ダロタ、一緒に帰るぞ』と言つて、さよなら  
も言わせず一人は帰つていくのを窓から見送つてるとセリカは目  
を覚ました。

「あつ、気が付きました?」

「……」

ただ黙つたまま、起き上がつたのとまだ調子が戻つてないのかと  
思つたので『無理しないで、まだ寝てた方が良いですよ』と言つが  
しばらく黙つて呟いた。

「…いと思つたでしょ?」

良く聞き取れなかつたので、何を言つたのか聞いつとひするのが氣に喰わなかつたのか、今度は聞き取れるくらいの大きさで「いつ」言つた。

「ネズミが苦手な魔王なんて情けない魔王だと思つたと聞いているのよ」

「そんな事はないですよ。ただ可笑しかつただけです」

「ほら見なさい」

「別に良いじやないですか…」

「あら、自分の非は認めた上で自分の意見を肯定するの？」

「そういう意味じやないですよ。  
嫌いなモノの一つあつて、良かつたなと思つただけですよ」

『じうじて』と聞くので一つの物語を話した。

子供の頃に聞かされた物語、それは単純に勇者が魔王に弱点である『道具』を使ってに倒されるという話だ。

「そんな間抜けな魔王の話、聞いた事ないけど…。  
あなたは私を魔王と知つている上でそんな事を話して、何が言いたいの？」

空気を歪ませながらそんな事を聞いてきたが、それもいつもの事だ。

「魔王だから、弱点が一つくらいはあるとしても戻って、言いたいんですよ」

『ふーん』と呆れてくるのか、しづかへりやかに立ち上った。

「やるやうに帰らなこと、遅すぎる時間じゃなことの?」

「まあ、やうですけど、大丈夫ですか?」

だが、言つまでもない…。

彼女の足がもつれて、慌てて抱きとめる。

しかるなるのは、今日で一度田だ。

おなかの辺りで彼女の頭を受け止める形になつて、少し呻いたのがセリカに聞こえたのだろうか『ごめんなさい』と珍しく素直に謝つて、立ち上がろうとするが密着した彼女の身体が急に力が抜けて、元の体勢に戻つた。

「まだ、調子が戻つてないみたい」

ただそう言つて、呟いたままセリカは一向に動かさない。

「で、ですけどこのままじゃ、姿勢に悪いですよ」

慌てて自分の身体を起ししゃうとするが『やめ』と抱きついたまま

「駄菓子よ、もひひこ」のままこなでこ

じうなつたら、エクともしないのがわかつていて。」

「わかつました」

しばらべの間だが、この体勢でいた。

。

そして、次の店に来る口がやつてきて……。

「シユロ、がんばつている？」

そう言つて、セリカはいつもの様に様子を見にやつて来たが、入店と同時に怪訝な表情に変わつていった。

理由は……。

「シユロ、実はさ。

私も、虫が嫌いで、駆除しに来てくれよ

カイリはやつて、抱きついていた。

「カイリさん、とてもやつは見えませんよ」

「この店に来る途中でも、私、怖くつてさー

「だつたら、抱きつかないでくださいよ」

「いいじゃねえか、セリカだつて、苦手なモノがあつて腰が抜け  
てたんだからさ~」

窓からチラリと赤い『何か』が映つたのを、気のせいだと思つて  
いた。

だが…どうも見られていたらしく…。

そして、自分がセリカに気が付いた頃には…。

「

田の前に『白』が広がつていた。

えつ、何が起つたつて?

それはブランドの財布にきいてください。

## 第十話 待ち構える魔王の様々 その1

「退屈ね……」

セリカはあくびを一つ、そう呟いて玉座から立ち上がり眼鏡を掛けたメイドに『外出するから掃除しておいて』と声を掛けた。

「はつ、はい、わかりましたです」

そう呟つて、緊張するメイド。

自分がこれから外出するのだから、いない時ぐらに緊張を解いてほしいと思つたが、それは無理だらつ。

今週、ショロガこの魔界に来るまでの6日間の間、余つて退屈だつたので、やつきのメイドに少し悪戯をしたのだ。

やつきのよつて『掃除をしておいて』と言つた後に自分は窓から飛び去る……。

…フリをして、気配を完全に消して戻つてくれる。

思惑どおり、玉座に注目しているメイド。

そこに『故意』に置き忘れた綺麗な装飾を施してあるトイアラがあつた。

だが、流石にメイドとつたトロロだらつ。

『わあ、素敵です』とティアラの装飾に一度感激して、元の位置に戻そつとキヨロキヨロと入れる箱を探しているのだろうが見つからない。

何故なら、セリカが持っているのだ。

警備のモンスターに聞くと、中には粗暴な輩もいてそのティアラを壊してしまう可能性があるから、次の手段は必ずと仲間のメイドに聞くしかなくなるのだが…。

「あ、あれ？」

カギが掛かっていないが、まるで誰かが押しているかのようだ  
アが開かない。

そうセリカ自身の魔力を利用して外に出られない様にしたからだ。

「あの～、ここから出たいです～？」

ドンドンドンと三回叩いては、繰り返すがセリカの魔力で音も漏  
れることもなく、外部は開く事も無い。

「どうしよう…」

ティアラの宝石の部分に自分の顔が写ったのだろうか、まるでテ  
ィアラに語りかけるような口調のメイドは、しばらく黙り込んで何  
か決心を決めたかのようにある方向を手指した。

それは立てかけてある、鏡のような白銀の鎧。

そしてティアラを頭に乗せて、鏡に映るティアラなのだろうか、自分にだろうか『うつとり』としていたが…

何かが足りない。

服は着替えるわけにはいかないので仕方がない事だらう。

顔も、眼鏡も…

まあ仕方が無いだらう。

魔力で気配を消しているセリカも何もせず見守っていると、メイドはとりあえず誰かが来ないのを祈りながら玉座に座る。

「うーん…」

だが、まだ『何か』足りない…。

メイドは考えた後、背筋を伸ばし『いほん』咳き込み、ぼそりと一言。

「私は…魔王…です」

「あら、貴女がこの城の魔王?」

……。

後は想像に任せるとはいえ、悪い事をしたなと思ったのでティアラを上げたのだが、それ以来、あんな調子だったので少し困ったが、その事を考えるのは後にする事にした。

何故ならショロの営む店が見えて来たからだ。

まだ、早い時間だったのか明りが付いていなかつたので、構う事はなく『すうつ』と店の前に着地して翼を畳みながら、中に入ろうと後ろから『ガラガラ』と聞きなれない音が聞こえたので振り向く。

するとキックボードに乗つてやつてきたダロタがやつてきた…。

第十話 待ち構える魔王の様々 その2（前書き）

少し、文字数少ないかな？

ちょいと反省します…

「… おい、シユロ、何かしたか？」

「 ブラドはそんな事を言ったのでドアを開けた先を見ると、魔王が睨みつけてました。」

「ブリヂさん、どうして自分前提で悪い事をしたと決め付けるのですか？」

「ブリヂさん、何かしたんじゃないのですか？」

「冗談を言つた、私がどれくらい慎重に生きてきていると思つてゐるのだ?」

聞いていて情けなくなるだろう。

しかし、それくらい怒らせると非常にマズい人物は明らかにお怒りなさっていた。

「あら、一人とも来たのね。」

殺しひしないから、いつかここへしゃこる

そうして前置詞を『殺す』と表現していて、これらしゃいとこれらですか？

「最年長のブリヂたん、お願こしめや」

「アシシゴトハ、店長と申す。」

そうこうやり取りをして、ブラドはセリカの方に顔を向けると…。

「「ハグハ、何だつ！？  
何も見えんつ！！」

…もがき苦しみだした。

そんな反応見せたら、顔戻せないじゃないですか…

当然逃げる、しかし…

「あつ、あれ？」

氣が付くと店内にはブラドもダロタもいなかつた。

セリカとシユロだけとなつていた。

「シユロ、コレは一体どういつ事か説明してもらいましょうか？」

そう言つてセリカが取り出したのは、シユロが町のくじ引きで当てたキックボードだつた。

自分は余りこういう乗り物が好きではなかつたので、妹にやつと想えていたのだが3歳なので年齢的に危険と判断して、ダロタにプレゼントしたのだ。

「…あの、それが何か？」

「…うちこのやつをどうして私にプレゼントしないの？」

「田に何らかの力を込めて睨まないでくださいよ。

大体セリカさんは空を飛べるのですから、必要ないでしょ？」

「ふうん、じゃあ何、貴方はそう言って一生、私にプレゼントしないの？」

「一生つて何ですか、そんな事はないですよ。  
キックボーデにしても、ダロタの一歩は自分達より、小さいの  
すから不憫だなと思って、いつも働いている社員へのボーナスだと  
思つてくださいよ。

あつ、とうより。

思い出しましたけど、カジノの時にピアスをプレゼントしたじゃ  
ないですか？」

「それだけで魔王である私が満足するとでも思つ？

大体何、ボーナス？

そんな理由で、貴方はダロタにプレゼントして、オークライマー  
を生み出したとでもいうの？」

「まあ、そうなりますね」

意外とネーミングセンスあるなと感心しながら、セリカを改めて  
みると何やら考え込んでいた。

「あの、セリカさん？」

珍しく考えていたので、聞いてみると何やら悪寒が走った。

## 第十話 待ち構える魔王の様々 その3

「お断りします」

「まだ何も言つてないじゃなし」

「いいえ、今回は言わせてもらいます。この店で働くと言いたいのでもう少し」

「やつる

『『お』『断』『つ』『し』『め』『す』』

「えりかへよつて…」

『ボンッ…』と何かが後ろの方で爆発したが、少しは考えてほしかった。

例えばお客様が気兼ねなくやつてきてドアを開けると…

『あら、えりかしゃー』と魔王が店番してこるので。

と、驚くのはまだ予想出来る範囲だつたが、問題はまだある。

例えば、とある客のモンスターが商品を一つ買つてこつた。

『あら、それだけ?』

ヤツカは何となくやつて言つたつもつだらり。

だが、魔王はいつ言ったのではないかと、勝手に解釈するモンスターも少なくないだろ。」

『あなた、それだけ買つためにこの店に来たの?』

店の貢献にはなると思うが、そのモンスターの財布事情は大きな痛手となるだろ。

そして、冷やかしでやつてくるのモンスターも同様であつて…

こんな事態をさけるために断つてはいるのだが、当然の事ながらセリカは理解をしていないのだろ。

「そんな読者が予想できる展開を許すと思つてはいるのですか?」

「じゃあ、どうすればいいのよー?」

また、『ドン』と吹つ飛んだ音と後に風通しがよくなつた気がしたので、振り向くのが怖かつた。

「じゃ、じゃあ、私と勝負しましょ。勝つたら何かプレゼントしますよ」

「いいわよ…」

『パンチ』と『パンプ』が粉々に砕け散つたので、戦う気十分だったが冗談ではない。

とりあえず、人差し指を出した。

「何、一対一で勝負?」

「違います……」

「誰が一番、破壊するか?」

「違いますよ。一週間待つてください。  
せめてセリカさんと対等に戦える準備をさせてください」

「笑わせてくれるわね。  
たつた一週間で、私に勝てると思つているの?  
まあ、いいわ。一週間ね?」

するとセリカの左上の頭上から『ボトッシュ』とブリヂダロタが降  
つてきた。

「今日は店を休みにして、店からの資材を稼ぎにしていいから、  
一週間後の戦いの準備をしてなさい。」

それじゃあね。一週間を楽しみにしてるわ」

そう言つてクスッと笑つて翼を広げて飛び去つた。

「……シユロ、こくらなんで無理じやないのか?」

「んだ、今からセリカの城に行つて謝るだ」

「いえ、大丈夫です。

その為に、少し協力してもらひますか……」

「おいおい、魔王に立ち向かう度胸は認めるが、俺たちまで巻き込まないでくれよ…」

「そこまで危険なマネはさせませんよ。二人とも、少し耳を…」

そう言つてモンスター2匹を集めて、本日は解散した。

そして、月曜日…

シユロは走つていた。

魔王に立ち向かうのは、勇者だけだと思っていた。

だけど…

火曜日…

ダロタは筆を走らせていた。

魔王に立ち向かう、シユロのために…

水曜日…

ブランドは敵国のモンスターに囲まれていた。

シユロの考えた戦いに必要な人物に会うために…

木曜日…

シユロは、ひた走っていた。

自分の作戦を引き立てるために…

金曜日…

ダロタは墨で真っ黒になっていたが、その顔は満足そうだった。

土曜日…

ブライドは冷や汗をかきながら、セリカに『シユロは何たくらんでるの?』と胸倉をつかまれ聞かれていたが、黙っていた。

そうして、田曜日はやってきた。

「シユロ、逃げずによくやつてきたわね」

店の前に立っていたのは、魔王セリカだったが…。

「とにかくシユロ、一つ聞いておきたいのだけど…」

「何ですか?」

「この人だかりは何?」

セリカは一旦、視線を移した先には大勢のモンスターが見物していたのが、セリカは気になっていたのだろうが、これも自分達の狙いでもあつたので…

「気にしないでください」

「がんばれよ、シユロ～、セリカなんかに負けるな～」

そんな声が上がったのを見て、さらにセリカは呆れながら聞いていた。

「どうしてカイリもいるのよ？  
それに… 確か、あれは…」

『招待席』と書かれたテーブルに座っているのは、カイリだったが、それと隣にあと一人は座っていた。

「あのカジノでバー・テンダーを営んでいる。ファウルだ。シユロ、お前の戦い方を見せてもらおうか」

「ファウル…。

あら、もしかしてあなた『魔剣士 ファウル』？

「そうだ、だがもう剣は握っていない。  
だから、その呼び方はやめてくれないか？」

場内のモンスターたちが『おおっ』驚いていたが、それにもつと驚いたのは自分だった。

何故なら町まで走つて、彼を誘つたのは自分ではあるが、そんな事は一つも聞いていないのだ。

「お前が聞かなかつただけだろ？？」

そんな感じで收められてしまったのを見てセリカはこう言つた。

「そういえば、勝負方法は聞いていなかつたわね？」

前にも言つたように、直接対決？

それともここにある家々をどれだけ破壊できるか競うの？」

相変わらず、破壊前提の戦いを望んでいたが、今日は不思議と恐怖はなかつた。

何故なら、自分は勝つためにここにいるのだから…

力強く指を指す。

「あちらを『さらにください』

要望通り、カイリを来させたブラドのため…

「あれは看板？

垂れ幕が掛かつてるわね」

希望通り、一人で『用意』を進めていたダロタのため…

三人は自然と目が合い、頷きあつて…

垂れ幕を外した…

「『れは…』

そしてマイクを持ったブラドが叫んだ…

「第一回 魔王と店主、クイズバトルウゥーー！」

## 第十話 待ち構える魔王の様々 その4

「しかしセリカさん、意外ですね。

まさかホントに、この勝負を受けてくれるなんて…」

「あら、あなたが考えた勝負なのでしょう?

どんな勝負を挑まれてもそのルールに乗っ取った上で勝つのも魔王なのよ」

普段ならセリカの冷静な返答も『魔王』らしい説得力があるが、現在のセリカの頭の上にはカラフルなシルクハットが乗つており…。

…とても説得力がなかつた。

ピンポンッ!!

だがそんな事はあまり気にしていないのか、セリカは、スイッチを押して確かめていた。

「セリカ様、まだ始まつてはいません」

「ブランド、確かめただけよ。

でも、結構反応がいいのね」

「ブランドが地上に出た際、『ハンズ』というトコロで買つてきた  
そうですよ」

その事は『ふうん』とその事に興味が無いのか、セリカは自分に向けてこう聞いた。

「シユロ、確かめなくてもいいの？」

確かに一理あるので、言われた通りにする。

：だがそれが、あまりにも自分が強大な敵と戦っているのだと再認識させてしまった。

ピンポンッ！！

『――』とセリカは自分を見つめていた。

スイッチを一旦、戻してまた確かめるように…。

ピンポン！！

景気の良い音をさせているように見えているが、実は自分がやっているわけではない…。

「ふーん、これならさっちが先にスイッチを押したのか、わかるわね」

自分がスイッチを押す前に反応して、セリカがスイッチを押しているのだ。

言つまでも無く動搖してしまつが、ブラドが自分を引き寄せて励ました。

「大丈夫だ。あれはいつものセリカ様の戦術なんだ。

動搖すると、思つツボだぞ。

反応速度で勝てない事くらい、お前だつて、わかつていたはずだ

そしてダロタも、自分を励ます。

「んだ、今日は、オラ達は勝つためにここにいるだ

そういうで、身長の違つ三人は、円陣を組んで氣合を入れると会場は一段と盛り上がつた。

……。

「続きまして第6問……」

マイクを持つた、ブラドはダロタから差し出されたカードから一枚抜き取り、それを読み始めようとすると……5問目を経過している事に気付いて、読むのを中断して点数を確認した。

「30対20、シユロが一歩、リードして、セリカ様が追う形ですね」

『おお～』と湧き上る観客、魔王相手によく戦えると思つてゐるのだろうか、だが、タネがあつた。

「それでは6問目、ここにいるダロタ、このオーケの年齢換算の仕方は……」

『ピンポン』とセリカが先にスイッチを押す。

「人間の暦で2日で1歳を迎える」

普通の人間では、魔王の反射速度には勝てない。

これは仕方の無い事で、セリカは易々と正解を口にしていた。  
だが…。

『ブー』

「…ですが、ではシユロの年齢は何歳?」

セリカはプラードを睨みつけるが、慌てて首を振りプラカードを見せる。

すると、その通りの事が書かれていたのだろう。

黙つたまま、プラカードを返すのを見送りながら…。

『ピンポン』と回答権の移つたシユロは自分の事だから答える。

「17歳」

一つの正解に着き、10ポイント入るので2つめのリードを保つ事を成功する。

だが、このリードは、巻き返される事になる。

「では、7問目…。

500万回以上…。

「この数字は、何の数字だと言われているか？」

さつきの引っ掛けもなく、この様な曖昧な問題が出ると…。

「はい、セリカ様」

「今まで勇者と呼ばれる人間が、他人の家に勝手に上がり込み。人のタンスや壺を覗き込んだ回数」

「正解」

「こんな感じで、確実にリードを縮めて来るのがだ。

そして…

「第9問、蛍光灯と豆電球、作者が困るのは…」

「豆電球」

「ですが、最近その作者自身の周りで起きた嫌な事は？」

「パソコンのYahooのサイトから『小説家になろう』を検索して入るうとした際、機械的に収集、処理されて自動的に表示される一番下の項目に、上から2番目で載っていた事」

「正解つー！」

以外に接戦だったので、大いに盛り上がるが最終問題で…。

「渋谷のハチ公の周りを二回まわると魔界に帰る事ができた」

ヒーハセリカに、追いつかれてしまい。

同様で次のステージに移る事になった。

「続きまして、このモンスター何言つてるの?」

咆哮あてクイズへ!..

## 第十話 待ち構える魔王の様々 その5

「シユロ、一つ聞いていいかしら?」

クイズもいよいよ終盤に差し掛かり、一旦、休憩に入つて、場内にファウルが用意した酒を振舞つて配るダロタとブラドを見送つているとセリカが自分に聞いてきた。

「私に向をプレゼントしてくれるの?」

「え?、それは…」

「どうせ後でわかる事なんだから、別に隠す事はないでしょう?」

確かに一理あるが、それは一番困る質問だった。

何故なら…

何をあげればいいのかわからなかつたので、ファウルに依頼したからだ。

そう言った途端、言つまでもなく呆れるセリカをみて、ヒーローの疑問が浮かんだ。

「もしセリカさんが、負けたら何をくれるつもりだったのですか?」

「あら、随分ありえない事を言つてくれるのね?」

「言葉を返しますけど、どうせ後でわかる事でしょう？  
だったら良いじゃないですか？」

だが、しばらくセリカは考え込んだ様子だったので、つい『どうしました』と聞いた。

「そんな事考えた事ないわ」

どうやら自分が彼女にプレゼントをあげるかあげないかを、今回の勝負と考えていたらしい。

「でも良いじゃない。

どうせ勝負は、ほら…」

指差す方向には、得点ボードがある。

そこには70対120と、セリカが勝っていた。

「どうするの、次が最後の勝負って聞いているけど、まだ続ける？」

『フフフ』と笑いながら、勝利を確信しているのだろう。

自分からしても、先の対戦でセリカがここまで点数を稼ぐとは思いもよらなかつた。

『咆哮当てクイズ』

人間の言葉の話せない2匹のモンスターが咆哮を上げて、その活劇を自分とセリカはそれらの台詞を当てるクイズをやつている時の

事だ。

セリカ自身の魔力で言葉がわかつてしまつと不味いので、カイリにそれが発動したか否かを判断してもらい。

あくまで公平になるように仕向けたのだが……。

「では問題をお願いします」

『ギョオオオオ！』

『グオオオツ！』

『グウウツ！』

『ガツアツ！』

状況を説明しよう。

黒いサルと赤いサルがカウンターを挟んで会話をしている光景をみて。

ただそれだけで想像できる台詞をフリップに書いた。

『あつ、いらつしゃいつ！』

『マスター、今日も飲みに来たよつ！』

『じやあ、何こするー？』

『いつものヤツ！…』

完璧に当てる事は不可能なので、解答の内容に近ければ得点が入るルールにしたので、このような妥当な解答を書いて点数を稼ぐ事にした…のだが…。

「では、ダロタが訳した解答を見てみましょ！」

『「」めん、来ちゃつた…』

『何しにやつてきた？

お前とは「」つかりだと言つただらつ…』

『そ、そつだけど、そんなの貴方が一方的に…私、納得できないから…、今でも私…あなたの事が！？』

『帰れつ！…』

…「」ちが帰つて欲しいですよ。

こんなクイズ、当然の事ながら当たるワケがないと思つていた。しかし…。

「セリカ様は『とつと帰つて』が半分当たつてますね。

10ポイント！…』

思わずカイリを見るが『ケラケラ』と笑いながら、自分を見て首を振つていたので、魔力を使つているようではなかつた。

だが、セリカは…

『大佐、お願ひですから、パイロットスーツを着てください』

『『服、着たら?』という部分が合ってますね』

といった感じで、かすらせる事で点数を稼いで、こんな点差へと発展してしまったのだった。

「さて、最後の問題となりました……」

そういうてブランドがどこで覚えてきたのだろうか、マイクパフォーマンスを披露して口を開いた。

隣でセリカは勝利を確信していたが、ここで一つ忘れてもらつては困る。

これは自分が考えた勝負なのだ。

始めの勝負で何とかコードを保ち、そして最後までギリギリの戦いを演じつつ引き分けに持ち込むという作戦が最初の作戦だったが、このコードを取られては『最後の策』を使はしかない。

机の脇を掴み、ブランドに見える位置にて手を『トントン』と叩く

…。

「それでは最終問題…最終問題ですが…」

それを見たブランドは『やはり使うしかないか…』と諦めた様な顔をしてようやく出た言葉はまだ躊躇していた。

だが、状況が状況だったのでそれは仕方がない事と理解したのだ

る。

「最終問題はですね。

特別ルールになつております……」

これは最後の策だ……。

「最終問題は得点が何と百倍になります」

ルールは早押しで問題を答えるモノだが、この問題は……。

『シユロの妹の名前は何でしょうか?』

と、あらかじめ知っていた。

そこで『シ』と一文字言葉が出れば……。

どんなに反応速度の速いセリカにしても太刀打ち出来ないだろう。

しかし、この作戦、物凄く『問題』を抱えていた……。

最初にして難関はここにあり、セリカ様を怒らせるには十分すぎていた。

カイリは『ケラケラ』と余程おかしいのだろう。大笑いしているが、意外だったのはセリカだった。

『ふうん、別に良いわよ』と、そっけなく答えたのだ、思わず『いいんですか?』と聞くとブラドを一警、周囲を眺めながらこう答えた。

「これは貴方の考えた勝負であり、これは作戦なのでしょう? 何にしても、魔王である私に立ち向かうというのは変わりないのでから、私は正面から相手をするだけよ」

そして、『だけど、その前に…』と、今度はファウルに聞いた。

「ファウル、貴方に聞いておきたいのだけど、シユロが私に上げるプレゼントって何なの？」

するとファウルはダロタに相槌をして、何やら一枚の紙切れが入った額縁を持って来させた。

「紙切れ、いや、チケットですか？」

「ああ、そうだ。

そのやも『シユロ一日、自由に奴隸券』だ

「…自由の後に、奴隸つて付いてるのですけど、何ですかそれ？」

「そうだな。例えるなら一日奴隸に出来る券だ」

「例えてないじゃないですか…」

でもこれでますます、負けなくなつたのは事実。

深呼吸一つ…。

「では、最終問題…」

絶対に勝てる方程式の中で…。

「セリカ様のお城は何階建て?」

ありえない事が起きていた。

慌てて「ラードを見ると、目を逸らす。

「ねえ、シユロ」

そんな中、悠々と『ピンポン』と押しながら、セリカは言った。

「人間の戦争において確実に城を落とすには、まずは外堀から埋めるらしいわよ?」

「正面からって、言つてたじやないですか?」

しふじつた…。

さすがに魔王と言つたところだから自分は『店長』といつ職業柄、ラードは部下…といつより同じ苦難に立ち向かう仲間と思つていた。

…だが、セリカは『魔王』、ラードとの力関係…といつより上下関係がはつきりしているのだ。

そうして、外堀を埋められた城は、国崩しを待つだけと言つたようになり自分の作戦の崩壊を迎えることになった。

人間というのは不思議なモノで敗けが決まると、自然に肩の力が抜けて足搔く事すらしなくなるというのはホントの様で、自分はセリカの…。

「8階立て……」

といつ回答を、うなだれて聞いていた。

「悪いわね」

微笑みながら、チケットを手にしてシユロに言った。

「じゃあ、シユロ、来週、一日…よひこへね」

次回、シユロ奴隸決定っ!!

「続くのー?」

第十話 待ち構える魔王の様々 その6 完結編（後書き）

さて、次回、シユロ奴隸になります

## 第十一話 シュロの災難

シュロ、奴隸決定つ！！

この噂が魔界全土を揺るがせ、一週間が過ぎようとした時、シュロは…。

「38度7分、シュロが風邪を引くなんて…」

…寝込んでいた。

「何か悪いものを食べたとか心当たりはある？」

『ママ、今日ね。セリカつて魔王の一日奴隸になるんだ』  
寝込む理由はこれだらうと頭に浮かべると実際、頭痛がした。だが、普段は『ママ』と呼ぶわけでもなく、大体こんな理由、誰が信じるだらうか言える訳もない。

「母さん、心配なによ。これくらい大した事ないって…」

「だめよ、風邪を甘く見たら～。今日は休むって、母さんから長老に言つておくから、シュロは寝てなさい」

バタンッ

そんな感じでドアを閉められ、落胆するのは風邪を引いているからだらうか、しばらく天井を見つめる事にした。

考へてみれば風邪などで休む場合、店の方は必ずやれば良いのだ  
うつと話し合つていなかつた。

そんな事に気付いてしまつてこゐると、長老に詰つてきましたと母さん  
が帰つてきたので聞いて見る。

「母さん、誰かに会わなかつた?」

「そりや、近所をくらうこはねえ~」

「そりやなくて、田髪で昼間なのに普通に外を出歩かる中年ヴ  
アンパイアとか、多趣味なオークとか出会わなかつた?」

「何を言つてゐる。そんなのに出歩つわけがないでしょ~。  
…わつと疲れてるのね~。もつむなさ~」

そんな感じで自分の部屋を出て行つた母さんを見送り、結局、ど  
うする事が出来ないのがわかつたので、ワケを話して許してもらお  
うと腹を括る事にした。

わうなるとやる事は一つ、歸る事だ。母は高かつたのでカーテン  
を閉めようと窓に…彼女はいた。

「……」

何も言わぬ、じまらへ容赦なく睨みつけていた魔王は口を開く。

「ふ~ん、シロ。逃げるなんて良い度胸してくるじゃな~…

「すいません、セリカさん、風邪引いてるので、今日は休ませ  
てもらいますか?」

「罰ゲーム当番に、風邪を引くのは人間が良く使う手でしょう。そんなのが魔界で通用するなんて…って、ホントに風邪引いていいのね」

「見た目でわかるのですか?」

「貴方の魔力が徐々にね、風邪独特の薄れ方をしていくのよ」

『なるほど』と頷いていると、後ろの方で声がした。

「シユロ、話し声がするけど誰かいるの〜?」

忘れていた、ここは自宅である。

『しまった』と思いながら、ドアが開かれて入ってきたよ、母さんが。

「どうしたの〜シユロ、誰か来たの?」

慌てて窓の方をみると、セリカは忽然と姿を消していた。

そういうえば姿を消す事が出来ると聞いた事があつたので、内心安心していると『コンコン』と玄関からノックの音がした。

「あら、誰か来たのかしら?」

そのまま、対応しに行つたが次の瞬間だった。

「やあああつーーー！」

腰を抜かした様な悲鳴があがつたので、ドアから覗こみるとそこには魔王が立っていた。

「あ、あのひ、ビヒラ様？」

恐る恐る聞く母に、その魔王はいつ言った。

「はい、いつもシユロ君が世話になっています。ヤリカと申します。

シユロ君が風邪を引いたと聞いたので、私の魔法で治して上げようかと思こましてやつてきました。」

『『』』と母の魔王は我が家にやつてきた……。

第十一話 シュロの災難 その2（前書き）

「ゴールデンウイークは計画的に…

## 第十一話 シュロの災難 その2

「あの子にこんなに綺麗な彼女がいたなんて、あつとも知らなかつたわ～」

「ええ、シュロ君にはいつも世話になつていまして、いつかお礼をしようかと思っていたのですが、中々、機会に恵まれていなくて困つていてトコロ。

シュロ君が風邪を引いて熱を出したと、耳にして突然で悪いと思いましたが、やってきてしまいました」

『お母様』と自分の母親にこんな感じで聞いてくる魔王は、まるでどこぞかのお嬢様のよつに清楚だった。

「シュロ君の様子を伺いたいのですが、上がつても良いでしょつか？」

そして、そんな魔王のとんでもない猫かぶりに騙された母さんは、魔王を容易に玄関を開けて彼女を招き入れたのである。

。

「大丈夫、シュロ君？」

田を細める……。

「ええ、ああ、大丈夫です……よ。もう大分、楽になりましたから……」

「シユロ君、ちゃんと寝てないと駄目よ。

一番、危ないって言つのが、風邪の治りかけなのよ?」

ポツポツ…。

あつ、何故だらうか背中がかゆい。

「セリカさん、いつも呼び捨てじゃな…」

『バチャーーー!』

「いっつーーー!』

ベッドで腰掛けっていたベッドがまるで静電気が発したかのよう

激痛が走る。

「あら、大変、セリカちゃんの言つとおり、寝てなこと駄目よ~

「いや、母さん、騙されてたら…んんんんっ」

電流が腿の裏を走り抜けて、自分を黙らせる。

「どうしたの~、シユロ?』

母さんは知らないだらう、間違いなくコレは『魔王』の仕業だつた…。

「お母様、今から私が魔法でシユロ君の風邪を治して差し上げたいのですが、よろしいでしょうか?』

「あら、セリカちゃん、そんな事も出来るの～？」

「はい、これでも少々、魔法の心得がありますので…」

「じゃあ、やつてもらおうかしりへ。」

そう言つて、セリカは自分の風邪を治すつもりなのだらうか魔法の詠唱を始めたのだが。

「あら?」

田を瞑つていた自分に聞こえて来たのは、セリカのそんな一言だった。

「どうしたのセリカちゃん?」

そのまま黙り込むセリカに母さんは何かに気付いた。

「もしかして…?」

「「」めんなれこ、お母様…」

母さんは明らかに落胆を見せるセリカに励ますよつて言った。

「良いのよ。セリカちゃん、誰にでも失敗くらいあるのだから～じゃあ、ちよつと母さん、お茶用意するから、シロロしつかりね

『バタン』と明るい調子で、自分の部屋のドアを閉めて行つたのであった。

「あの……」

少し静かになつたで、そつと黙つて顔を上げるとセツカは俯いていた。

「……失敗したのですか？」

「何にかしら？」

「だから風邪、治らなかつたじゃないですか？」

「治るわよ？」

『ケロッ』とお签えなさる、Iの魔王は『パチリ』と指を鳴らす。すると自分の風邪独特の頭痛が消えた時、ドアを開けて母さんが入ってきた。

「お茶が入りましたよ~」

そんな母さんが見たのは大きく深呼吸した息子だった。  
「頭痛が消えてる……」

「あら~、シユロ、風邪が治つたの？」

『ありがとセリカちゃん』と、魔王にお礼をいふがそれを制して魔王はにこやかにこつこつ言つた。

「ええ、シユロ君が励ましてくれたお陰です

「まあ、この子つたら…」

セリカに感謝しながら、自分を見つめながら微笑むセリカを見て  
ふと思つた…。

計算だ…。

セリカめ、一回失敗しておいて、二回目に自分のお陰で成功した  
と言つて、最初から母さんの機嫌をとるつもりだったらしい。

セコイ…。

なんてセコイ…。

「母さん、騙されたら… だあああつ…」

人つて、電気を通す生き物なんだなと今回、つくづく思った。

## 第十一話 シュロの災難 その3

かくしてセリカに『村を案内してほしい』と言われ外へ連れ出され、シュロは普段歩く村の風景を眺めた。

通り過ぎていく人が全員、セリカを見た途端に立ち止まっていた。

「…異様だ。

そして、セリカを見た後に何故か自分を睨む男たちは、病み上がりの体に良くなない視線を送り込むのだった。

「あら、顔色悪いわよ？」

「…じゃあ、帰つていいですか？」

「駄目よ。ちゃんと案内しないとお母さまに怒られるわよ？」

『はあ』と氣を落としながら、とぼとぼと歩いていると威勢の良い声が聞こえてきた。

「よおっ、シュロ、お前風邪引いたんじゃねえのかよー？」

シュロが良く買い物の際に世話になつてている雑貨屋だった。

口の悪くて、女房の尻に敷かれているが、気は優しくて人情家だといつ。

そんな店主、ゴードーがタバコを加えながら、シュロの首を腕で締め付けながら言った。

「おいおい、お前は自分で働いてまで学校に行つてんだろ？が、まさかズル休みしゃがつたら承知しねえぞっー？」

『いひつ』とこつわりには、あんまり力の入つてなかつたのではじめく揺さぶつて、開放してくれた。

「お前は特に『働いて』いるんだ。たまにはガス抜きも必要なんだひつな」

「随分と話の分かる方ですね」

「何せシユロとは、寝小便たれてる時からこひと見ているからな」

「まあ、そんな時から？」

「そつそ、これでシユロも女を……」

周囲の空氣もおかしい事も手伝つたのか、まあ、こひなるだひつた。

明らかに動きの止まる『アーティ構つ』となくセリカは自分に聞いた。

「シユロ君、こひらの方は？」

「雑貨屋の『アーティさんです。」

『アーティでよくお菓子を買つてて、一応、世話にもなつている人かな』

「あら、もうだつたの、こつもお菓子をあつがとつぱりぞめや」  
そんな感じでつかひやしへ、清楚にお辞儀をする魔王ビードーは  
『はあ』と気が抜ける身体を支える様に、今度は本氣で首を絞め  
ながら自分に尋ねた。

「おこおこおこおこおこ、シロロ、せつたじゅねえか…」

「何がですか？」

「お前ビリであるな上玉と知り合つたんだよ?」

「『お仕事』の方で世話になつまつして…」

「かああ、お前も一丁前ひざるモンだな。  
それで、ズル休みしてテートヒシャヒシャリ込むのか?」

すると『つまつと待つてな』と言つて、店の奥に潜り込んでしまは  
らへすると、一つの小瓶を出してきた。

「何ですかこれは…」

「そりや、ピンク色の液体の小瓶とくらあ、お前『惚れ薬』に決  
まってんじゅねえか?」

「…いきなり、何でモノを出すのですか?」

「心配するな。お代はいらねえよ。」

食事にでも、一滴たらせば、後はお楽しみ『ウハウハ』つて、魂

胆よ

「言葉が汚いですよ」

「何言つてやがる。男はな『迫る』モンなんだよ。迫つて、迫つて、迫り続ければ『結婚』まで一方通行つてのを知らねえのか？」

「そこで『どうしてこの人と結婚したのだろう』って思われて、今の貴方は尻に敷かれている事に気付いてくださいよ」

「甘い、だからシユロは、セリカに大きな顔をされるんだよ」

「そうだ、男は度胸だぜ？」

「じゃあ、おっさん、その惚れ薬、シユロが使わないのならオレが貰つていいかい？」

「おいおい、これはシユロに始めからくれてやる代物だったんだぞ？」

「いやー、だつたら、いつかシユロの食事にこれを仕込んでオレのモノにしてやるつと思つたんだよ」

そこに横槍を入れるように話に割り込み、立っていたのは胸元が開いた服を着た女性。

「シユロ、オレもお前の村を案内してくれよ」

自分は知つている…。

魔王、カイリだつた。

第十一話 シュロの災難 その4（前書き）

お待たせしました。

## 第十一話 シュロの災難 その4

「『どうして、カイリさんまでいらっしゃるのかしら……？』

『お呼びじゃないのよ』と、にこやかに笑う魔王セリカ。

「カツ、セリカ、そういうお前はこつからそんなしゃべり方をするようになったんだ？」

『キモイんだよ』と、椅子にもたれ掛けながら軽く伸びをするカイリ。

こうなったのは、三人で行き先なく村を案内するのは、また騒ぎになると思ったので『一旦、食事にしませんか？』と持ちかけたからだ。

そんな感じでよく冒険者の集まる酒場『白眉亭』にて、仲良く（？）テーブルを囲まってしまつという結果を迎えていた。

「あら、シユロ君、顔色悪いけど？」

クスッと微笑む彼女は周囲の視線が重い空氣を出しているのをわかっているのだろうか？

「セリカ、ちゃんと風邪を治してやったのか？」

カイリはそう言つて、顔に手を当てたり、額に手を当てたりして自分の体温と比べているのが、窓からの視線が強くしているのを知つてゐるのだろうか？

「細胞が突然回復した身体に困惑しているだけよ」

「どうか、じゃあ仕方ねえな」

そして、この重い展開も『仕方ねえ』で済ませたトコロでセリ力は何かに気が付いた。

「ところで貴方の妹を見かけなかつたのだけれど、どこに行つたの？」

「今日は、いども町内会の集まりで『リリ』はお泊りなんですよ」

「お泊りつて、修行みたいなモノか？」

かあ～、いいねえ、オレの方でもやつてみようかな。手下集めて『お笑い強化合宿』つて感じだ。」

「頭に『お笑い』つて付いた合宿に何をするつもりですか？」

「丸太に跨らせても、急斜面を滑降する特訓とか、コンベヤを高速回転させて口ケたら熱い鉄板の上にダイブするハメになる特訓なんてのははどうだ？」

それで何が鍛えられるのだろうと少し疑問に思つたが、カイリの口口口と弄つていた小瓶が目に入った。

「惚れ薬…ですか？」

「へえ、じつこの興味があるひいて事は、やつぱつシコロも男なんだな。

だけどさ、こんなのは嘘っぱちに決まってるじゃねえか、大体こんなホントにあつたら…」

カイリは『へへっ』と意地が悪そうにニヤニヤと笑いながら、はつきりこいつ言った。

「世界はとつべの昔に誰かに征服されているぜ?」

「また、そんな冗談を明るい調子で言わないでくださいよ」

「あら、これは魔界で知られてる。ホントの事よ?」

『知らなかつたの?』といつセリカの表情に思わずじりやるのか聞いたのは当然だろ?」

「簡単さ。まず城に食材を運ぶ商人を惚れさせる。

そして、その商人に食材の中に惚れ薬を仕込むように魅了する。

当然、これは城に入り込む手段で、後は食事なり飲み水なりに仕込むように細工すれば王様まで、魅了できるつていう話さ」

「じゃあ、どうしてそんな『惚れ薬』なんて販売されているのですか?」

「そりやあ、人間が作った噂話だからわ」

つまり『これを飲んだモノはその人の事を好きになる』というのが商人にとつては金の成る話らしく、告白する勇氣のない男にとつては理由を作るのにはうつてつけの道具だと答えたカイリは背伸び

をした。

すると、胸元の辺りが少し気になつたのか、それを直したその仕草に自分は目のやり場に困つていると構わず答えた。

「まあ、もしホントにあつたら、言つ事を聞く人間なんてきっとつまらねえよ。

人間は自分の言つ事を聞かないその人を許せるから、その人のことを好きになれるモンなんだ」

『なるほど』と奥の深い話に感心していたが、少し気になる事があつた。

「でしたら、カイリさん、『それ』捨ててくださいよ」

気になつていたのは、さつきからカイリは惚れ薬を手放してなかつたという事だ。

## 第十一話 シュロの災難 その5

「まつたく……」

カイリが何を企んでいるのかわからないままだつたが、周囲の視線と二人の魔王、この困難をどう乗り切るうと考へるために一旦、落ち着こうと立ち上がり、『トイレ』へと向かつたのだが……それは間違いだつた。

自分達の席の周りには、大勢の人だかり……。

「どこからやつてきたの？」

「よかつたら、俺と冒険しない？」

「ちよつと通してくれ、食事が運べないじゃないか……」

とよつやく店主がたどり着いた頃、ある一人の冒険者が一人の魔王に聞いた。

「シュロが一人と付き合つてるってホント？」

カチヤン……

……どこかで何かが落ちて割れたような音がした。

それくらい、静寂が辺りを包み込んだ。

セリカ、カイリ、シュロ……と、まるでマラソンをしているのでは

ないかと感じるくらいの視線の往復を味わつて、セリカは『ホン』と小さく咳き込んで言つた。

「はい、シユロ君とは健全にお付き合はせてもらつてます……」

「ああ、シユロとは、もう……な？」

「何をお言になさるかね、この魔王ども？」

「ちよ、ちよっとひーー？」

慌てて、誤解を解こうと口を開けようとするが……。

「やつたじやねえかシユローーー！」

バシッ！

「やりやがつたな、ほんけくしょーーー！」

ドカッ！

周囲に『バシンバシン』と殴られ蹴られの祝福といつぱりのリンクをくらう。

「誤解……みなさん……騙されたら……駄目……」

だが、この早々自分のセリフを遮るよつてセリカはいつにつけた。

「やう誤解なんです。

『』にいるカイリに騙されて、シユロは大変な目に会つてばかり

で…」

「そんなのそれこそ誤解じゃねえか。  
シユロがいつも大変な目に会つてばかりなのは、セリカといふ  
時だらう…」

カイリの言つ事の方が正しいだらう。

しかし、そんな事は周囲にわかるワケもなく、急に口喧嘩を始める一人を見守る事になる最中、カイリが口を開いた。

「じゃあ、シユロに決めてもらおうじやねえか…」

大きく胸元の開いた懐から取り出したのは、小さな小瓶。

「これは自白薬と言つてな。

どんなに口の固いやつでも、平氣で口を割つてしまつ代物だ…」

ピンク色の液体の入つた小瓶に『おお～』と歓声を上げる男達。

惚れ薬じゃないですか…。

しかも、それを頼んでおいたホールに『トクトク』と全部入れて、一人の魔王は口を揃えた。

「「さあ、飲んでつ…！」」

「ちよ、ちよと待つてくださいよつ…！」

「シユロ君、遠慮しなくてもいいわ。正しいのだから…」

「ああ、一度ガツンと言つてやれつて……」

『そうだ、男らしくねえぞ』と外野が軽い野次を飛ばしたが考えてほしい。

いくら『効果が無い』や『嘘だ』と言われても、目の前で『惚れ薬』なる物が全量入った飲み物を飲めるだろ？

「飲めるワケが無いじゃないですかつ！？」

「大丈夫だよ、効果があつても一生面倒みてやるつて」

『おお～』と歓声が上がるが、よく考えてみると……。

「それって、一生奴隸つてワケじゃないですかつ！？」

## 第十一話 シュロの災難 その6

「飲～め、飲～めっ」

「シュロ、男を見せてみる！…」

『そうだ、そうだ』と飲めるワケもない薬が入った飲み物を前にして騒ぎ出す外野。

無理もない、彼等から見ればセリカは清楚で綺麗なお嬢さま、力イリは活発で健康的な女性に見えるのだろう。

あの細腕がどれくらいのモノを握り潰しているのか、この酒場にいる人たちは想像が出来るワケがなかった。

そして、あの猫かぶり…

「あら、どうしたのシュロ君？」

いや、止めておこう…。

だが、この一人の魔王を前にして、今まで『壊されなかつた』記憶がないは確かだつた。

一つ間違えばこの店は吹き飛ぶ…。

考えてみれば自分は、とんでもない場所で綱渡りをしているので

はないのだろうか？

「冗談じゃない、弁償代が全部自分にまわって来そうだ。

その時だった。

「おいおい、年端もいかないガキが女を一人連れて酒場にやつてくるたあ、いい度胸してんじゃねえか」

一人の男が勝手に椅子を持ってきて、セリカ達を挟むように座ってきたので、そういうえば、ここが冒険者の集まる酒場だと言つ事をすっかり忘れていた。

軽く食事をすませて、何をするのかをやつと決めて出るつもりだったのには、冒険者の中に、性質たちの悪い冒険者もいるからだ。

しかし、最初の疑惑は大きくはずれ、この通り『大騒ぎ』となり、すっかり逃げ遅れてしまっていた。

「あら、シユロ君の友達か何か？」

「ああ、友達さ、俺らはこんな綺麗なお嬢ちゃん方と仲良くなりたいから、それまでの友達さ」

「へつ、だつたら知り合いで何でもねえじゃねえかよ」

カイリが先に何が起きたのか理解したのだろうか、続けてセリカも答えた。

「じゃあ、まだ開いてる席があるから。

戻つてくださるかしら?」

セリカなりに自分に迷惑をかけないよつこ氣を使ったのだろうか、丁寧に断るがその男たちは『へラへラ』と笑つて、こう答えた。

「つれねえじやねえか、こんな乳臭いガキなんかより俺たちと付き合つた方がきっとおもしれえよ」

『なあ、相棒?』とカイリの隣に座つている男は自分の腕をカイリに肩に回して答えた。

「そりそり、こんなガキが遊ぶ金なんであると思つ? ああ、言ひ忘れていたけど、オレの名前は…」

「黙りなさい」

セリカはそれだけを呴いた。

その一言だけで『ぞくり』と背筋が伸びたのだろうか、セリカの隣に座つている男が息を飲んだのが自分でもわかつた。

「「」、「めん、オレ、結構口が軽くて、ふと思つた事を言つてしまう癖があるんだよね。」

「怒つたら、すんませ～え…」

「謝る気があるんなら、もっと真面目に謝れよ」

カイリの一言田で完璧に周囲の空気が一瞬にして緊張に包まれた。

自分も身動きが一切とれない。

一言で表せばこの緊張は殺氣なんだろう、初めて魔王と出会った時に感じた。そんな印象がこの酒場に充満していた。

「コイツがな、金の無い事くらい知ってるんだよ。だが、お前みたいに何も知らずにショロの事を悪く言つ事は私は許せねえな…」

「あら、カイリにしては意見が合つわね。同じ意見なのは気にくわないので貴方達、目障りなのよ」

「な、なんだと、俺たちを…」

「てめえらの名前なんて『A』と『B』で十分だろ?」

「あら、カイリしては、良いネーミングね」

「お、おいおい、俺達は男だぞ、い、いくらお嬢さんに『たしなみ』があつても実戦仕込みの俺たちに…」

『ブオーン!-!』

カイリが『B』を軽々と天井近くに放り投げたので、セリカ側に座っている『A』だけだろうか、周囲を睡然とさせた。

それだけの事で、相手が自分より強いと言つのがわかつたのか、

慌てて身構えるがセリカは、そんな『A』をただ見ていた。

「て、てめえっ！！」

最初は『やるのか！？』と意気込んでいたが、セリカはただ見ていた。

それだけだつたが…。

「ひつ」

『A』の本能的な部分が身の危険を感じさせたのだろう。その場に尻餅をついて腰を抜かした。

その『A』に向かつて一言、セリカは言つた。

「帰りなさい」

落ちてきた『B』を放つたまま、あたふたと『A』は逃げ出した。

## 第十一話 シュロの災難 その7（前書き）

順調に仕上げる

オレ、得意げになる

評価氣になる

返信、一ヶ月も遅れてる

オレ、凹む

以上、今日の心境でしたw

## 第十一話 シュロの災難 その7

だが、冷静になると大変な事態になってしまっている。

それは一人が『黙れ』と言った時からなのだが、その次が問題だつた。

カイリは『放り投げて』、セリカは自分より体格の大きな男を『ひい』と恐れをなすくらいで睨みつけて、明らかに女性らしからぬ事の片付け方をしたのだ。

それを自分だけならまだしも、それを周囲がいるの中で披露したため、彼女達のもたらしたの沈黙は、また別の沈黙になつたのは言うまでもなかつた。

『おいおい』と何やら騒がしくなつたので、逃げ出したくなつたのだが…。

「おおお、シユロの彼女達つて、やつぱり強いんだな」

…突然、歓声があがつた。

「そりいえば一人とシユロが出会つたのは、不思議のダンジョンだつたつて、聞いたことがあるぞ」

セリカもカイリも驚いた様子で顔を見合わせているので、どうやら自分の魔力を使って『そう思わせていい』というのはなさそうだったので、心から安心していると、こんな咳きが聞こえた。

「…めやがつて」

その声に何だらうと振り向くつとすると、突然羽交い絞めにされてナイフを突きつけられた。

「お前等、よくもこのオレを馬鹿にしゃがつたなつ…」

良く見ると『B』だつた。

「あら、カイリ、仕留め損ねたの？」

「おいおい、いくら何でもシユロの住んでいる村でそんな事するかよ」

ここに人質がいるといつて、一人の魔王にとつては些細な事なのだろうか、カイリは『B』につきぎりしながら言った。

「お前、あんなに高く放り投げられておいて、怪我は一つもないんだ。

お前は手加減されたのにも気付かねえのか？」

「うるせえよ、だからどうしたってんだよ。なめられて黙つていられるかつ…」

さらにナイフが自分の顔に接近してきたが、カイリはおどけながら答えた。

「誰が人質をとるような男を味見するもんかよ」

「…カイリ、言葉が汚いわよ」

『あはは』と周囲の笑い声が気にくわなかつたのだろうか、とにかく『B』の怒りは頂点に達したのだろう。

「つ……」

頬に軽い痛みが走つた。

「お前な……」

「へへ、こっちには人質がいるというのを忘れるなよ」

おそらく頬を切りつけられたのだろう、セリカもカイリも黙つたのがいい気になつたのか『B』は調子に乗つて言つた。

「謝るんなら、そうだな、そのまま服を脱いでもらおうか……」

へらへらと笑つ『B』の態度に流石にカイリもガマンの限界に來たのだろう……。

「待ちなさい、カイリ」

『一瞬』

その表現が正しいくらいのカイリの『光速拳』が、セリカの一言で『B』の顔前でピタリと止つた。

「な、何なんだよつ、お前等つ……」

それだけでこんな人質をとつても何の意味も持たない事が『B』

にもわかつたので、大声で聞いたのだろうが、カイリはそんな事は構わずセリカに聞いて来た。

「何で止めるんだよ？」

「私に考えがあるからよ」

そういうて、セリカは『B』に捕まつて居る自分に聞いてきた。

「シユロ君、どつちに助けてほしい？」

「いんな時に何をのんきな事を聞いているのですか？」

「私もね、貴方を傷つけた『アレ』を許せないの、だから、貴方はどつちに助けられてほしいかしりつて、貴方に決めてほしいのよ」とすると羽交い絞めしている『アレ』、もとい『B』が恐る恐る聞いて来た。

「お、おい、まさか、あの娘も……」

「はい、カイリ以上か以下かは知りませんが、家屋破壊をするのは普通に田にしますから、外見以上に……ね」

「あら、私は、カイリより上よ?」

男同士の会話に割り込んでほしくなかつたが、この事が『B』にとつてよほど衝撃的だつたらしい。

「お、おい、助けてくれよ」

「だったら、人質なんかとらずに逃げればよかつたじゃないですか」

「相手が魔王並みに強いとは思いもよらなかつたんだ」

一瞬、噴き出しうになつたが、この命令には演技ではないのがわかつた。

第十一話 シュロの災難 その8 完結編（前書き）

完結させました

## 第十一話 シュロの災難 その8 [完結編]

だが、一つ気になる事があつたので、一人に聞いてみた。

「あの、もしどちらかを選ぶとどうなるのですか？」

「それは少し『怒る』けど、ねえ？」

「まあ、今後、大変な事になるな」

自分はナイフを突きつけられ、外野は『やんや、やんや』と騒ぐ。この異様な光景の中で仲の悪いハズの一人が笑いなさつていた。

「お、おい、この一人は仲間じゃなかつたのかよつ！？」

「あら、シユロは私のモノよ？」

『おお～っ』と外野が騒ぎ…といつより、この外野は昼間から飲んでいいるのだろうか？

「へつ、オレだって、お前が欲しいんだよ」

カイリもそう言つて、騒ぎに便乗するのでもう大変な騒ぎになつていてが、セリカは『B』の手にしたナイフが気になつたのだろう。ギリギリ、目で追える速度で『B』に近寄つて、まるで糸くずでも取るようにナイフを抜き取つてこいつ言つた。

「これで、話しやすくなつたでしょう

「何なんだよ、お前らっ！？」

『B』は、もうワケもわからぬまま、そんな絶叫が聞こえたので耳打ちをした。

「貴方はとりあえず、逃げた方が良いですよ？」

「そうしたいけど、さっきあの娘の田を見たら、足が、身体が動かねえんだ」

言われてセリカを見ると、田がほんのりと赤く輝きをみせて微笑んでいた。

「ああ、Bを助けてほしかつたら、どうに助けてほしいのか選べよ」

カイリも自覚はあるのだ。

間違つた文法の使い方をしながら自分に聞いてきたが、考えてみると結局『B』はぶつ飛ばすと言つていた。

だが、セリカは『あら？』と何かに気付いた様子を見せて、突如、Bへの金縛りを解いたのだろうか、自分への羽交い絞めを解いた。

「おい、兄ちゃん、シユロがどんなに苦労してゐるのかわかつてんのか？」

更に背後からそんな声が聞こえたので振り向くと、そこには数名の冒険者達が立っていた。

「姉ちゃん達、武器をとつてくれてありがとよ。  
もつ俺たちに任せてくれないか？」

『「イツに苦労といつのみつちり教え込んでやる』と言つて、  
ズルズルとBを引きずつて店外に出て行く冒険者達を見て、  
カイリは驚いたようにセリカに言つた。

「普段のお前なら、そんな事を言われても『構わないで』何て言  
つて、そのままシユロを追つ詰めていくのに、よくアイツ等の言つ  
事を聞いたな」

「私はシユロのために動いてくれた人達の意思を無駄にす  
るほど、愚かじやないわ」

「へえ、シユロがナイフで傷つけられた時のアイツ等の視線を気  
付いてたようだな」

『まあね』と周囲を見渡しながら、セリカは微笑んでこいつ言つた。

「姉さん、シユロ君の為にあつがとうございました」

さりに盛つ上がりを見せた酒場といつもの会場、といつより気付  
いてほしいのはマズいが気付いてほしに部分がある。

「でもお嬢ちゃん、武器を取り上げるあの武器、すげえな

まずは軽々と武器を取り上げる、普段の動きもある。

「はい、怖かったですけど、シユロ君のためと思つたので頑張り

ました」

だが、それ今まで『シユロ』と呼び捨てにしていたの……。

「どうしたのシユロ君?」

『君』付けに戻つていると、周囲は気付いていないのだろうか? 顔色を悪くしていると、カイリがセリカの変わつたため息をつきながら口に言つた。

「まあ、これは仕方ねえんじゃねえのか?」

『落ち着けよ』と呟つて、飲み物を差し出してきたので、それを口にした……。

……。

セリカとカイリの視線が一斉に自分を突き刺したのを感じた。

その時だった。

自分の手にした飲み物は、『アレ』だったのを理解した瞬間と同時にどうつか……。

カイリのしてやつたりの顔を見送りながら、身体が熱くなつたのを感じた。

「あつ……」

セリカは見た。

「おおおおおおおおおお…」

『数十年』も保存された液体が引き起しした『大惨事』を…

「私の前で吐くなああ…」

ほれ薬は腐っていた…。

第十一話 三人集まれば、巨人合体（前書き）

お待たせいたしました

## 第十一話 三人集まれば、巨人合体

真つ暗な小部屋にて、オークとヴァンパイアがいた。

彼等…というより種族の間で、この組み合わせは『最悪』といえるだろう。

そんなその二人が、机を囲み、そして、座っている。

何が起ころかわからない異様な雰囲気の中、ヴァンパイアは静かに言った。

「今日、シユロは休みらしいぞ？」

それだけ言って、ふと掛けてある時計に目をやると深夜の12時45分だったのを見ているとオークは聞いてきた。

「風邪だべか？」

「セリカ様、直々の伝言だから、多分そうだろうな」

『ふーん』とオークは少しあぐびをすると、ヴァンパイアはまた時計を見る。

12時57分だろうか、このやりとりだけで消費した時間ではなく『沈黙』という独特の消化時間が効いた、この部屋でヴァンパイアが軽い柔軟体操をしながらオークに話しかける。

「そろそろ時間だな。ダロタ？」

『んだ』と返事を軽くして、身の丈ほどの椅子から『まよんつー』と飛び降りて、何やら持ってきたダロタ。

それを見送りながら『んんつ』と咳き込んだヴァンパイアのブラードは、喉が渴いたのだろうかコップ一杯の水を飲んだ。

喉を潤して、また席に戻ったダロタに何も言わずに手を上げて答える。

頷いたダロタは、自分の持ってきた機材のスイッチを『ガチャリ』と押すと辺りに軽快な音楽が流れ出したのを見て、ブラードはマイクに向かって言った。

### 「ブラードとダロタのオールナイトNANIGASHI！」

そこでは『ブラードとダロタ』と言つても、機材調整にダロタがいるので、実質ブラード一人での単独ラジオ放送が行なわれていた。

「いやー、この一週間、皆様いかがお過ごしでしたでしょうか、そして初めて聞いた方々にはですね。

『なんだこれ？』と思われる方もいらっしゃると思われるでしょうから、いつもの如く説明していただきます。

この放送は、今までのお話で起きた疑問点をですね。

ダロタと私、二人でとことん、出来る限り解明する放送でござります。

『魔王、魔族が群雄割拠している魔界でなにやつてんだ?』とい  
う声がところどころ聞こえて来そうですが、まあ、もつ何回か、  
ウチの上司やウチの店長に内緒でやつてこるのでね。

『バレたら、爆発オチだ』ってね…。

一回いつ言つておけば、まあ、この放送局では『爆発オチ』はあ  
りませんからね。

それではお時間まで行つてみましょ~。

それではお時間まで行つてみましょ~。

せつせつ『おたよし』の方を行つてみたいと思います。

ペンネーム『打ち切り魔王 ベルゼバブ』さんからですね。

今晚は、ブラドさん、いつも聞いてます。

ありがとうございます。

私の登場はいつになるのか、不安で一杯なところもありますが、  
れつそく質問に移らせてもらいます。

Q・セリカさんは魔王ですが、ブラドさんの従兄という事もあつ  
て、種族はヴァンパイアでよろしいのでしょうか?

カイリさんの方も知つていればお願ひします。

という事ですが、セリカ様はですね。

ヴァンパイアではありません…。

『じゃあ、何なんだ?』といつ声が聞こえてきましたね。

うん…どういえば良いでしょうかね。

聞こえが悪いのですが、突然変異…といえばよろしいでしょうか。

魔界ではある一定の確率で『高い魔力をもつてして生まれる』といつ事がそんな事が起きるそうです。

そういう人が大人になるとやつぱり『ヴァンパイア』と呼ばれるには掛け離れていくトロロもあるワケですよ。

そして、自分のいるの国の王さまを倒すと『ヴァンパイア』ではなく『魔王』と呼ばれるワケです。

でも『魔王』と名乗るのもね、大変なワケですよ。

例えば、私が策略で魔王になつたとします。

でも結局『実力社会』なワケですよ。

足元からじやなくて、普通に他の魔王に丸呑みされてしまつワケですよ。

そんな理由で、私どもはおいそれと『魔王』と名乗れないワケでもあるんですね。

## 第十一話 三人集まれば、巨人合体 その2

次は、ああ…これも似たような種族系の質問で、少し参つてしま  
いましたね。

ペンネームは『ベルモンド一族』さんからですが…。

Q・ブラドさんは『ヴァンパイア』と言われてますが、昼間でも、  
堂々と歩いてますが大丈夫なのですか？

ええ、まあ、そうですね。

一般的にヴァンパイアは『十字架に触るとヤケドする』や『二  
二クの臭いが嫌い』とか『太陽光を浴びると肺炎になる』なんて言  
われてますが…。

…アレは嘘です。

大体、あんなに弱点があつたら、モンスターとしても大問題です  
からね。

はい、続いてのお便りは、ペンネーム『AKB』さん。

Q・ブラドさんは地上に出る事は多々あるそうですが、明らかに  
シユロと違う地上に出ている気がするのは私だけでしょうか？

はい、アキハバラです。

どににいるのかつてのは…。

ね…。

ちなみに前の質問に戻りますが、昨日も地上の方へ出て、アキハバラでは『やいませんが…。

あの~。

餃子というモノを食べてきました。

その店には、お持ち帰りも出来るやつなんで、今度、みんなにも食べさせてあげたいと思います。

はい、続いてのあなたよりは『RPGマニア』さん。

Q・シユロ、ダロタ、ブラー、セリカ、カイリの五人は『不思議のダンジョン』にてどのようなステータス、及び、特殊能力が使えるのですか？

…という事ですけどね。

あつ『ア』になつてますね。

後で見つけ出して、額を人差し指で『ズブリ』と行つておきます。

えつと、まあシユロの方はですね。

基本的に武器を何でも装備できます。

…主人公にありがちですけど、ただし指には『ワナ作りの指輪』

があつて指輪が装備出来ません。

あとはワナがどの位置にあるのか、その指輪の力で見えるといつ  
能力があるくらいですかね。

後半に役立つスキルですけど、まあ…ショロですから。

続いて、ダロタは基本はショロと変わりありません。

ですがオーラ独特の特性といいましょうか、ショロより攻撃力は  
高いそうです。

巻物とか使えませんけど、休憩時間に日々、ショロとチャンバラ  
をしていた事もあって、基本的な武器は、ほとんど使えます。

そして、私ですが武器なんか装備…というより、使う『氣』あります  
ん、まあ自分の能力である『眼光』という能力でですね。

敵の動きを止めて『チクリ、チクリ』とですね…ええ。

続いて、セリカ様ですが…

「何やってるの?」

「あつ…」

「前から内緒で何をこそこそやつているのかと思つてて、ショロ  
が休みだから来て見れば、何これ?」

「いや、セリカ様…その…前回、出番なかつたじゃないですか、

だから…今回、この放送を設けましてでしてね…

「だからって、2話分も尺をとつて良いと思つてゐるの?」

何も言ひ返せないのか、そのまま小さくなるアリバ、その姿はダメタより小さかった。

「まあいいわ」

しかしそんな意外なセリカの返答をしたので、セリカは驚いたままのブリードに言つた。

「わざと貴方、今回は『爆発オチはない』と言つてたじやない?」

「じゃ、じゃあ、セリカ様!?

「ええ、許さないわ」

やつぱり、その辺はセリカらしかつたが、更にありえない事を口にした。

「どこかコケで、今回はシユロに任せましょつか」

「えつ、シユロですか、今日は風邪を引いて…」

後は任せたというのだろうか、ただセリカは『ふふつ』とそんな笑みを自分に浮かべていた。

そして、そんな自分は…。

「はつ！？」

そんな夢をみていた。

「何といつ夢を…」

変な夢だった。

それは、ただ一人が深夜にラジオ放送をしていたからではない。  
ただセリカが乱入してきて『夢オチをしろ』と命令してきたから  
ではない。

ただ…。

その夢に登場していたダロタ…。

その背中に…。

「チヤックが着いてた」

## 第十一話 三人集まれば、巨人合体 その3

「おはようございます」

週末、いつものように一人に挨拶をして、いつものように営業を始めるショロの姿があった。

そして、本田の営業を済ませると、いつものように……。

「『玄関先の掃除、アンタ、まだだつたみたいだから、やつておいたわ』」

「つものように……。

「『べつ、別に貴方のためにやつたんじゃないんだからつ……』」

……。

「一人して何を悪趣味な事をやつてるんですか?」

「いや、この前、地上でな。

『ツンデレ』というのが流行つていて、そこで、その国の昔の遊びを組み合わせて『ツンデレ百人一首』というのを作つて、メイド喫茶にでも売り込もうと思つてな

『な』のトロロで、自分に背を向けていたダロタとブリヂは笑いあつてゐるが、やっぱり『あんな夢』を見た後だつたのせいもあつたのだね。

めくり…。

気が付くと、自分はダロタの身に纏っていたマントをめくついていた。

「…シユロ、何やつてるだが?」

さすがに失礼だと思ったので、事情を説明すると店内をさらに笑い声を大きくしていると、ブラドは首を振りながら答えた。

「まあ、夢だからな。

私も見た事があるから言えることだが、何でもありなのが夢の良い所なんだろうな」

「ブラドも見た事があるの?」

ようやく笑いが収まったのか、ダロタもあるらしく『ふ〜ふ〜』と鼻を鳴らしていた。

「」の前なんか、何故かレッドラリゴンと戦つていてな。

…まあ、夢だから、どう戦っているかは詳しく覚えていないが、突然、そのドラゴンがブレスを吐いたんだ

『いづ、至近距離でな』と手振りでブレスを表現をしながら、その時どうなったのかと聞くと、ブラドは『夢だからな』と始めて釘を刺して軽く言った。

「『あーーー』と掛け声で、片腕一本で『ブレス』そのものを受け流していたよ」

「どんな夢を見ていたのですか！？」

そう言って、笑おうとした。その時、突如、地響きが起じつた。

「ほう、私のブレスは、そんなに簡単に捻じ曲げられるといつのかね？」

『ズシン』と一際大きく、家屋が揺れると壁を突き破つて、それは出でた。

「始めてまして、キミがシロだね。

私はレクターといひ、まあ、見てのわかる通りだな」

まるで剥製のように顔だけを突き出して、さつも話に出でいたレッドドラゴンはブレードに向かつて聞いてきた。

「それでそこの吸血鬼よ。

空を飛んでて、耳にしたのだがな。

さつも前は『片腕一本でレッドドラゴンのブレスを受け流した』と、耳にしたのだが、それはホントかね？」

「い、いえ、これは夢の話ですから…」

いつもなら、『それは夢の話だ』と軽い調子で言つブレードだが、さすがに相手が『レッドドラゴン』だったので、かしこまりながら

答えてみると、このレクターは頷きながら答えていた。

## 第十一話 三人集まれば、巨人合体 その4

「ふううむ、夢か…」

それだけ言って、大きく息を吸い込み、さつそく『一撃』を食らつた

「実に興味深い…！」

バンッ！――――！

龍とは、硬いウロコを持ち、そのウロコは鉄よりも硬いとされ、どんな魔法も受け付けないとされている。

龍とは、灼熱、毒素、冷氣といった、ブレスを吐く生き物として有名である。

しかし、このドリゴン、名はレクター。

その話し声は…。

「耳が、耳があーーー！」

至近距離でまともにくらつて、のたつた回る『ラード』、その近くにいた二人も耳を押さえていたとおり、まさに『ハウリングボイス』だった。

そして数分が過ぎて、よつやく耳が聞こえたようになった頃、レクターは口を開いた。

「実は私達、龍族は、それを見た事がないのだ」

「『夢』をですか？」

「聞くところによると、この吸血鬼の通り『夢』とは、ありえない事が起きたのではないか？」

そこで人間のキミに聞きたいのだが、どうすれば夢を見れるかね？」

「そんな事、聞かれましても困りますよ。

私達だって、狙つて見れるモノじゃないのですから……」

それを聞いて『ふうむ』と頷いてレクターは質問を変えて聞いてきた。

「じゃあ、どうすれば、見れるようになるかね？」

「少し待つともらえますか……？」

3人を集めて、店内に入つて相談する事にした。

「どうするべ、シユロ?..」

「そんな事を言われましても……」

素直に『無理だ』と言つて、帰らせてもらおうと始めは考えたのだが、レクターは付け加えるよつにこう言つた。

「もし、夢を見る事が出来たら私の『クロノ』をくれてやる」  
「やる、シクロ、ビックビジネスのチャンスがやってきたようだ」

『いつもフリードの財布事情は、かなり切実なものらしい。』

「なると、やる様になつてこくのだらう。」

「まあ、出来る限りの事をやつて、大人しく帰つてもやうしかな  
いですね。」

とにかく、話し合つてみましょ」

『うして外にて『どうすれば夢がみれる?』とこうなつて話し合  
いが行なわれる事になつた。』

「楽しい事を経験したら、その楽しい事を連想した夢を見ると聞  
きますが、レクターさんが、最近楽しいと感じた事はありました?」

「うーん、すまないが、人間と私の寿命は違つからな。」

『楽しい』と感じる事は、もつ食事くらいしか感じなくなつてい  
るのだよ」

『ぐるつ』と喉を鳴らして何故かダロタを見たレクターは『他は  
ないか?』と聞いてきた。

「じゃあ、次は…ああ…」

「どうした？」

「今度は『怖い事を経験すれば』といつモノなんですが…」

「なるほど、確かにそれはないな」

「私達の雇い主を呼べば良いかも知れませんが、おそらく貴方が『怖い』といつのを感じないで戦つてしまつよつた氣がします…」

「だつたら、お前達がやればいいじゃないか？」

『はい？』と三人がワケもわからず、レクターを見ると軽く笑いながら言った。

「『』は『ワナを作る店』なのだから、私のウロコをモノともしない、武器くら』はあるはずだろ？』

「確かに『ドリゴンキラー』といったモノがありますが、まさか…？」

『グルル』と『』の器官を鳴らしているのかわからなによつた音を鳴らしながら、三人はまた話し合つた。

「シロロ、どうするだ？」

「明らかに『やる』空氣になつてますね。

やつぱり、断つた方がよかつたですかね？」

「 分、 それは正解だろうな 」

そして、 ブラドがレクターを見たとき、 明らかに自分達が『 手遅れ 』だとわかった。

「 … で、 誰が行くのだ？」

レッド・ドラゴンはやる気、 満々だった。

## 第十一話 三人集まれば、巨人合体 その5

三人の周囲に緊張が走った。

「…ブラドさん、確か『龍のウロコでビックビジネス』って言つてましたよね？」

「おいおい、シユロ、こいつの場合は店長が…」

「じゃあ、オラは関係ないだな」

『むんず』と掴んでダロタの肩を放さないのは、ブラドだろうかシユロだろうか？

「ダロタ、何、関係ないって、顔をしているのだ？」

「ダロタ、こういう場合、何て言つたか貴方の辞書に書いてあるはずでしょ？」

「勘弁してほしいだよ。

オラだって、食べられたくないだよ」

「大丈夫、ダロタ、相手はレッドドラゴンだ。

真面目な話、手加減くらいはするはずだ

「そうですよ。

その証拠に、レクターさんの皿の前に小鳥が数匹、戯れている  
……

や

『パクリツ』

「……ね」

レクターの『ある動作』にさらに凍つ付いたのは、ダロタ、だけではなかつた。

「……よし、じゅんけんしまじゅんけん」

「公平な勝負に身を任せるとこ'う事か……」

「負けたら、レクターの相手だべよ」

もうして、命がけのじゅんけんが終わつた……。

「よし、よし……」

そこにはオーラクヒト人間が喜び合ひ姿があり、そして、敗者の姿があつた。

「じゅあ、ブリードさん、よろしくお願ひします」

レックリツと向かって命がけアンパイア、ブリードの手にはドライコンが最も嫌う武器と詛われる『ドライコンキラー』が握られていたのだが……。

「いや～、ブリード、武器ついで、装備すれば何となく格好みみたいな

モノつて付くでしょ」<sup>11</sup>。

「何が言いたい？」

「初めてですよ。こんなに武器が、心細く見えたの……」

「だったら、変わつてほしいものだな」

当然、『嫌だ』と答えるこの二つの種族は、ヴァンパイアから見て、どう見えただろうか？

だが、それだけレベルが一回り、二回り、それ以上に違つといふ事だらう。

そんな事を思ったのだろうか、距離を離れると、ブライドも少し緊張していたのだろう。軽く深呼吸して身構えるのを見て、レクターは『すうつ』息を飲んで答えた。

「戦う前に吸血鬼よ。お前の名前を聞いていなかつたな

「ブライドだ。

セリカ様、直属の部下だが、今はワケあって、シュロの店を手伝つてゐる

「ふむ、ではブライドよ。

かかつて来るがいいつ……」

言つた途端にレクターは見事な『ハウリング』を上げた。

しかし、このブラッドは、さすがにセツカ直属の部下と言つた事だけはあるのだらう。

音とこの空塊を横に飛んで避けて、前を向いて答えた。

「レバダフ……」

その瞬間だつた。

走り込んできたレクターの体当たりをモロにくらい、ブラッドの身体を軽く宙に浮かせて、尻尾で『ぱちこんつ』と跳ね飛ばし、空中にいた標的を火の玉で打ち落としていた。

…ブラッドが『レバダ』と言つて、1秒間の出来事だつた。

「…シコロ、やつぱ無理だ」

しばらくして、ブラッドは身体を焦がしながら、まだ、生きていた。

「ふむ、やはつ無理か、となると残りに期待しても無理だらうな。ところど、ブラッドと戦つたな。武器はどうした?」

気が付くと、ブラッドの手には『アーリア・コンキラー』がなかつた。

「やうこえは、尻尾が当たるまで持つていたのだが……」

そう言つて、ブラッドはどこに行つたのだらうと、キョロキョロしていたが、それは意外なところにあつた。

「レクターさん、尻尾といふに…」

「んつ、その辺りには落ちてはいないが?」

「いえ、違います…」

正直、言い辛かった…。

「ああ…」

ブラドはやつた本人だとしても不可抗力だったの、それしか言えない。

そんなトロロニ、ドーラゴンキラーはやつた。

「おおつ、こんなトロロニ…」

おそらく自分の尻尾の振りがあまりにも速すぎたのが原因だらう、  
その剣は鱗の隙間を掻い潜り見事に突き立つていた。

だが、レクターの態度は意外と淡々としていた。

「あ、あの、レクターさん、痛くないのですか?」

「」の程度を『傷』といって、何をドーラゴンといつのかね?」

そう言つて、最初は首を回して、口でドーラゴンキラーを呑めるつ  
もりだったのだろう。

『ズシン、ズシン』と軽く身体を一回転させて、シユロに言った。

「すまないが、抜いてくれないかね？」

## 第十一話 三人集まれば、巨人合体 完結編

そう言わされたので『失礼します』と言つて、レクターの尻尾に深々と刺さつた剣を抜こうとした。

「…あれ？」

「どうしたのかね？」

「それが思つたより、深く刺さつてゐみたいで中々…」

『よいしょ』と腕だけでは無理だと思つたので足を使って踏ん張つていると、流石にドリラ「ロンキラーは『ずぶずぶ』と鈍い音を立て抜け出した。

「も、もう少しで…」

それを言つた頃には、手で抜けそだつたので慎重に慎重を重ねて抜く事が出来たのだった。

ボトリツ…

そう…尻尾を見事に切り落として…。

「うわあああ…！」

とりあえず年長者を見るのは条件反射だらうか、ブラッドも顔が真っ青になつていた。

「お、落ち着け、シユロー！」

「どういたず、謝れつーー？」

言われたとおりに『すんません、すんません』と連呼して謝る。

「おー、シユロくん、少し落ち着きたまえ…」

言われた通りに『すいません、すいません』と連呼して謝る、このお話の主人公をレクターは淡々としていたが、それがとても怖かった。

「でも、尻尾がもげてるじゃなしですかっーー？」

指差した先には『ビチン、ビチンシ』と活きが良く跳ねている尻尾が一本…『ドラゴンの証』が一本、どう考へても許してもらえるものではなかつたが、また『すいません』と、どういえず謝るのを見て、レクターは呆れたように答えた。

「どうも、キリはドラゴンの生態とこののを知らなこよつだな。

心配するな、尻尾といつのま、また生えてくるのだよ」

「そりこえは、『ドラゴンの尻尾は切れても生えてくる』と聞いた事があつただ…」

意外と博学なオーケ、それに感心したのかレクターは『ふむ』と言つて。

「今日は楽しませてもらつたよ。さてこれで私は帰る事にしよう

と、翼を広げながら、そのままだったので、また尻尾の事を謝るとクターは答えた。

「気にあるなど、言つてこる。

私の尻尾は200年以上、斬り取られる事はなかったのだ、きっと取れ易くなつていたと思つ……あつ……」

まるで何かを思つ出したように途中で言つて留まつたが…。

「まあいい、これも一興とこいつ事にしておけ」

だがそれは勝手に完結させて、『それでは』と勢いよく、羽ばたいたので聞く事は出来なかつた。

残された三人の前には、まだ『ビチ、ビチ』と痙攣をしてくる尻尾が残されていたのが問題だつたからだ。

「どうするべ、これ？」

「ウロコは剥いで売りますか？」

「おにおい、シコロよ。問題はそれだけじゃないと思つが？」

肉はどうするんだ？」

「そんなの……」

普段なら『知つませんよ』と言つてしまつて「ロだが、ある一つ

の考えが浮かんだ。

「食べましょう」

「……シコロ、本氣か？」

「……マジですか？」

「……えうひー、シコロせ『レッドアドレッサー』を食した男』として名を残すのは、また別の話である。

だが、問題は別のことになった。

それはシコロが村での出来事であった。

「エウ、シコロー。」

「いや、仕入れに町へと行ったんだがな。そいだ面白い話を聞いては何やらニヤニヤと笑っていた。」

「いや、仕入れに町へと行ったんだがな。そいだ面白い話を聞いてたんだよ」

「へえ、何ですか？」

「こ、こ、最近、ドラゴンを傷つけた者として『魔アーティラリードラゴンスレイヤー』が出たそいつなんだよ」

尚も自分を見て、ニヤニヤと笑っていたので何がおかしいのだろうかと想っていたが……。

「その名前がおかしいんだよ。

何たつてお前と一緒に名前なんだから」

『んなワケねえよな』と明るく笑うゴードー、そんな自分は冷や汗をダラダラ流していた。

当の本人はここにいるのだから…。

とりあえず、じつは言つておいた。

おめでとう…

## 第十二話 魔王に渡してならぬ物 その1

「む、ひ…」

「これはカイリのいる国、そして「これは彼女の城であり、その主で王であるカイリは地上のある本を読んでいて唸っていた。

想像通り彼女は普段『読書』という行為から、掛け離れた魔王である。

その魔王が賞味一時間以上、時には玉座から『ずるり』と落ちそうになつたり、時には普段とは違つ座り方をしたり、身体をくねらせながら『読書』という行為を専んでいた。

「よし…」

本を一通り読み終えたのだろうか、その本を参考にしてよつとカイリは立ち上がり、本にしおりを挟んで玉座の上に置く。

背伸びをしながら、考え込みながら独りつぶやきを呟いた。

「ま、ずは… そ、うだな…」

何やら集中して自分のいる、この部屋を凍りつかせた。

カイリは基本、炎を扱う魔法を扱うのが得意だが、部屋一室くらいは凍りつかせる事が出来るのも『魔王』である事の証明だらう。

数分と掛かつたが、自分の部屋を氷点下を指すほど冷氣が漂つ

部屋へと変化させて、また、その本を参考にしうつじ本を手にしたが、何かに気付いたので配下を呼んだ。

「カ、カイリ様、一体これは何を…？」

『ガコウ』と一回、つつかえて、自分の持ち前の怪力でやつと扉を開けたら、辺り一面が真っ白…。

「」のカイリの側近である『ペーレム』『ウコン』が驚くのも無理も無い。

「まあ、気にすんなよ。

しばりへま」のこるかひび、ウコン、少し頼まれてほしいんだが？」

「何で『じやこ』しうか？」

「ちよつと書物庫に行つて、本を数冊持つてきてほしいんだ」

「は？」

「『は』じゃねえよ。

ちよいとばかり… そうだな、医学の本を数冊持つて来いよ」

読書しないこの魔王が、本を持つてきなさいと語つている。

しかも医学の本を…。

その言動にウコンと、さらにこの扉を守るサイクロプス『サコン』が驚いて顔を見合わせていたので、ウコンが代表して聞いた。

「カイリ様、もしかして、どこかお加減が？」

「うるせえな、文句があるなら、また『合宿』するぞ？」

今度、お前達二人は強制参加でな」

その時、二人の脳裏に移つたのは…。

体力強化と題されたクイズに間違えたら、逆バンジー、打ち上げからのお落雷という光景だろうか？

体力強化と題されたこの魔王相手を縄引きして、負けたら『どこかで安売りしているワナ屋』から大量に仕入れたといつ、地雷原への落下の光景だろうか？

おかげで体力と知力が身には付いたのだが、あんな事が二回あつたら明らかに身体がもたないのは目に見えていた。

「…じゃあ、医学書ですね」

「ああ、頼んだぜ」

そうして、どうせりと積まれた本の山を傍らに極寒と化した、この部屋でカイリは平然と読書を再開する事、更に数分間『なるほど』とようやく要点を得たのか、再度、立ち上がり…。

「あらカイリ、あなた露出の趣味があつたの？」

身に纏つた衣服を脱ぐとするカイリを見て、窓からやつてきたセリカは呆れながら答えた。

「世の魔王の品格を下げているのは、紛れも無くあなたね」

「へつ、セリカ、そんな事をほざくのならお前は玄関から入つて来いよ。

それじゃ『品格』つてのを、下げてねえか?」

第十二話 魔王に渡してならぬ物 その2（前書き）

遅れました！

## 第十二話 魔王に渡してならぬ物 その2

出会うなり一人はあつという間に臨戦態勢に入る。

しかし、普段ならカイリの方からセリカの城に飛び込み、セリカを挑発して、喧嘩になるのだが、今回は珍しく、セリカの方からやつてきた事がカイリは気になつたのか聞いてきた。

「んで、俺んちにやつて来て何の用だ?」

「あなたが読書している何て聞いたからよ。

もう魔界中、あなたが読書している事で大騒ぎよ?」

「俺が読書したら、何か起じるつてのかよ?」

「まあ、天変地異の前触れでしうね」

セリカの悪態に『うるせえ』と言答えて、医学書から、元読んでいた本へと手を移し『ふむふむ』と頷いていたのが、よほどセリカは気になつたのだ。

「あなたをそこまで熱心に読書をさせる本なんて、どんな本なの?」

「あん…、これだよ?」

そう言って、カイリはセリカの前に差し出した本…といつよつ、漫画だった。

「いや～、少女漫畫つてこのだけどよ」

セリカはしおりを外して、そのページを田を通すと何となくカイリが何がやりたかったのかわかった。

「もしかして、あなた風邪を引いたりとしたの？」

「ああ、風邪引いてシユロに見舞いをしてもらひおひと疊つてな…」

「呆れたモノね…」

「うるせえな、これは俺の計画なんだ。お前には関係ねえだろ？」「？」

両手を広げ、更に自分の部屋の温度を下げようと冷氣を強めた。おかげで門番の一名はもつ凍りついていたが、セリカは平然と答えた。

「いいカイリ、あなたは田を閉じて、大きく深呼吸するだけで体力のだいたい八割を回復する事が出来るのよ？」

「ああ、俺だってそんな事は解つてゐる。お前にだつて、2ターン田には完全回復する魔法が自動的に詠唱される事くらいもな？」

「それを踏まえた上で聞くけど、あなたが『風邪』を引くのよ、どれくらい悪性の風邪だと思つてるの？」

さすがにセリカも許可を出さないといつより、伝染病の類ではない限り、自分が『病気』にはならないとカイリは理解したのだろう。

冷氣を止めて諦めた様子だが、明るく笑いながら答えた。

「しゃーねえか、じゃあ、この本セリカにやるよ」

「いらないわよ」

「遠慮すんなよ、意外と参考になるかも知れねえぞ?」

『ケラケラ』と笑いながら、カイリはもうその本には興味をなくしたのか、その部屋を出て行くとそこには、セリカとその本が、この部屋に残されたのであった。

第十二話 魔王に渡してならぬ物 その3（前書き）

遅れています

## 第十二話 魔王に渡してならぬ物 その3

…そして、その週末、シユロはブライダと一緒にやってきた。

「…とこいつケなら、シユロよ。

世界が紛争なんて無くなれば嫌でもインターネットと一緒にモノが普及されるワケだ。

すると『アニメ』とこいつのが、放送されるサイトがビリレジでも現れる。

となると、アニメオタクは確実に増える傾向にあると思つただがな？」

「突然、何を言つてゐるのですか？」

そんなブライドと世間話をしながら、自分の店の前にたどり着くが、その時、『ワナの指輪』

が反応した。

「どうした？」

ブライドもそんな自分の様子が気になつたのか、心配しながら聞いて来たが、この反応は味わつた事があつたので答えた。

「どうやら、ワナが仕掛けられているみたいですね」

「何だと？」

「初めてですよ、こんなに強力な反応…」

「おこおこ、自分の店の中に保管しているワナが束なつているから、そんな反応を起しきるではないのか？」

「ラジオの音いつとおり、店まで数歩すればドアへと手が掛かる距離だ。」

しかし、その一歩を踏めば、痛いくらいの反応を見せしむの指輪がとても気になつた。

「気のせいだらう」

しかし、やつぱり、ブリヂは何の用心も無く歩き始めて、ショロロに振り返つて聞いていた。

「どこの辺に仕掛けられたのだ？」

もう聞いた時だつた。

…そのワナがどこに仕掛けられたのかが解つた。

「ビ笑笑…」

前にレジダーラゴンに跳ねられた時より、ブリヂを地面に水切りしながら吹き飛ばした『それ』は我等の魔王。

「あら、ブリヂだつたの？」

自分からぶつかつておきながら謝る素振りも見せず、身なりを整えていた。

「セ、セリカさん、一体、何を……？」

するとセリカは、机に置いてあった本を片手に聞いてきた。

「ねえ、シユロ、これってどういう事なの？」

差し出した本は『漫画』だったが、書いてあったのは……。

パンを加えた主人公……まあ、ヒロインが『遅刻、遅刻』と走って、曲がり角に差し掛かると誰かとぶつかるという典型的な『出会い場面』が演出されているページである。

そして、セリカは『その次』を指して聞いてきた。

「とりあえず、ぶつかつて喧嘩になるのはわかるけど……。

『見たわね』って、この子は何を『見られた』から怒ってるの?..

「そ、それは……」

最近、『I/I』の部分つて、描写されない漫画が多いですよね?

## 第十二話 魔王に渡してならぬ物 その4

その本を読みながら、少し返答に困っているとセリカは『まあいわ』と言つて本を次のページを開いたのが見えた。

その瞬間が、その本を…預言書とえていた。

「ふんぬつ…！」

そう、次の展開は必ずといって良いほど、男はビンタされるのだ。  
自分の場合は…魔王相手にだ。

セリカなりに手加減しているのが幸いしたのだろう。辛うじて見えた『ビンタ』を踏ん張るようにしゃがんで避けた。

「良く避けたわね？」

「そりやそりやすよ、死にたくありませんから」

「あら、これでも手加減してるのよ、死にはしないわ」

「セリカさん、そういう事は田を見て言つてください。

そんなにしゃがんだ体勢を軽く宙に浮かせるほどビンタに、殺傷能力がないと言いたいのですか？」

その時、ぐらりと自分達の商品を積んだ棚が崩れた。といつよつ、絶対に殺傷能力があつたと思つ…。

「シユロ、大丈夫？」

「ええ、まあ…セリカさんは？」

「見るまでもないでしょう、そんな事より…」

セリカが棚を軽々と持ち上げてくれたので、何とか下敷きを免れ、セリカも大丈夫のようだった。だが、そんな彼女が心配していたよう『ワナ』が床に溶け込んで見えなくなってしまった。

「これは、大変な事になつてますね…」

「あら、私には見えないけど？」

指輪の力のおかげで溶け込んだワナが見えているので、とりあえず自分の近くにあるワナをホコリを払うように手で床を撫でると、一通りのワナが出てきた。

「ここまで来ると、気持ち悪いわ。

「この家屋は、もう危ないから吹き飛ばしてあげましょうか？」

「いちいち、そんな事で吹き飛ばさないでください。ブランドの財布の中味が泣きますよ？」

まあ、大丈夫ですよ。これから回収しますから、セリカさん、踏むと危ないので床を浮いてもらえませんか？」

「あら、私に命令するの？」

「こんな状況を作った本人が口答えしないでください」

『まったく』と少し呆れていると、ブラドが戻ってきた。

「セリカさま、酷いじゃないですか？」

「ブラドさん、入ってきたら駄目ですしねー。」

「シユロ、こんな時に何を言つてゐるのだ？」

ポチッ！！

何故、このような状態になつたのか事情を知らないブラドは『どうした？』と事情を聞くために店内に入つて、見事に押されるスイッチ…。

そのスイッチは上から水を降らせて食べ物を駄目にしてしまつワナだつた。

「……」

そんな水をモロに被つたのは魔王だつた。

こんな状況を作つたのは自分にあるから黙つているのか、それとも、ブラドが踏んだワナのせいで黙つて怒る手前なのだろうか、どちらにせよ、この沈黙がとても怖かつた。

「…とつあえず、着替えてくるわ」

覚悟を決めようかと思つたとき、何とかセリカは納得してくれた  
よつだつたので、プラドと頷きあいとりあえず、繰り返さないよう  
に撤去作業を始める事にした。

「それで、今日、ダロタは？」

「ああ、今日は田植え休みだ」

「リアルですね」

その時、『バタン』と勢い良くカイリが、突如來訪して來た。

「シユロ、遊ぼうぜっー！」

当然、事情も知らない事も手伝い、物の見事に『スイッチ』を踏んだ。

木の矢が飛んできて惨事を招くと思われたが…。

「シユロ、うつぶせになつて何をやつてんだ？」

矢じりのない矢を『むんず』と右手に受け止めた流石に魔王と思っていたが、まだ油断は出来なかつた。

彼女の『普段の動作』がとても危険だからだ。

「力、カイリさん、それをください」

『あん?』と意味深げに聞こえたのだろうか、顔をしかめながらこちらへ歩み寄ろうとしたが…。

「カ、カイリ様、出来れば宙を浮いて、やつへつと『ひひへやつ』  
てきてください」

「くつ、何だよ、まるで『レーリ』が地雷原です』みてえな言い方じ  
やねえか…」

『俺に命令すんな』と言いたいのだらつか？

『レーリ』の通りなのですよ』と言おうとしたが、その前に  
カイリが『ムツ』としながら『ラヂ』に鋭く切り良く投げた。

「のわああああーー。」

『思い切り投げた』のだ。

当然、捕れるわけもなく、ブレードは避けた。

そして、まあ、『レーリ』の約束通りと黙りこなしておいた。

床に落ちたばらばらになつた木の矢がワナを発動させるスイッチ  
を押して、しばらくした頃…。

「す、すまねえ、シユロ…」

「いや、私もね…。さつきり言わないからこんな事になつたと思  
つたのですよ…。そして、カイリさん、もう少し緊迫した状態だと  
いう雰囲気へり…。察してほしかったですね」

「あ…ああ、確かにそこは毎回…『氣をつけねえ』と『けねえな、な  
んて、思つてたんだけど…』シユロ…」

「カイリさん、もう、良いいじゃないですか…」

「だがな、シユロ…」

だが、プライドは自分より年上なのだろうか、もう少し注意しようとおつとしたのだろう。

「もう恥じじゃないですか…」

家の惨状は、もう酷いモノだと黙って、命があつただけマシだと思い、自分にはもう力が残されてなかつたので、『軽く』カイリを説教しておく程度にした。

「シユロ、終わつたかしり?」

すると今度は、セリカが入つて來た。

当然、この20分のやりとりで全部撤去し終える訳もなく、セリカも『シユロ』に気付いた。

「シユロ、焦げ臭いわよ?」

そう黙つて、入つて來ようとするので、慌てて止めた。

「セリカさん、だからって『まだ』なんですから、入つて來ないでくださいよ」

だが、セリカはよほど入りたいのか一歩踏み出そうとする。

さすがにこれ以上は、危険だつただろう、魔王相手に……。

「ステイーー！」

そんな具合に止めたが、セリカは構わず片足を上げる。

「ステイーー！」

片足を指で指して『下ろせ』とは言わず、彼女と頷きあいながら指摘する。

その指摘どおりセリカは、一旦、足を下ろすが、また、上げようとしたのが長年、従者をやつていたブラドが気付いたのだろう。

「ホームーー！」

…ブラドさん、それは『帰れ』って意味ですよ。

「…！」

そう考えるのが早いが、見事に家屋ごと吹き飛ばした魔王。

飛んでいく瓦礫を見送りながら、自分も吹っ飛んでいると背中の辺りで誰かとぶつかった。

『プロ、プロ、プロとその誰かと転がり、誰かが何となく理解できた頃。

「いてて、セリカのヤツ、気をつけろってんだよ…」

一緒に転がったカイリは自分の後ろでそう言つて、ボヤいていた。

「シユロ、怪我は無いか？」

おそれなくカイリのおかげなのだから、自分には怪我はなく礼を言つたために振り向いた。

「おかげせまで、怪我は……」

言つ途中で、思考がある一 点を注目しながら一 时停止した。

「あ……」

そのおかげでカイリもさうして氣づいてしまひ。

「……」

声にもならない声を上げて、いつも纏う赤いオーラと、それ以上に真っ赤になる魔王……。

そして隣に落ちてきた、『預言書』があのページ開いていた。

何が起きたのかわかつた僕の取る行動は一つだった……。

翌週……。

「シユロ……」

正直、ブランドの顔を見る事は出来なかつたが、ブランドは『何故か』顔を張らせながら一枚の紙を自分に差し出していた。

「慰謝料ですか...」

第十二話 魔王に渡してならぬ物 完結編（後書き）

今回は短くしてみました。

感想お待ちしております。.

## 第十四話 カツパに用心

本日休業…。

シユロがいつもの様に、そこにやって来ると店の前に立つて立派な看板が出迎えていた。

何も聞いていないシユロにとって、それはおかしいと思つて、少し警戒してしまうが良く見ると玄関の辺りに張り紙があつた。

「ええと本日、店を開く日ではあります、ワケあつて休業とさせていただきます…？」

疑問に思ひながら窓に耳を澄ませるとダロタヒラドの声が聞こえたので、とりあえず入つてみる事にした。

「あれ、本日はどうして休業なんですか？」

「おお、シユロ、やつてきたか。

いやな、本日はこの壺の補充をそろそろしておいた方がいいと思つてな」

そういうて布拉ドが見上げる視線の先には自分達が良くワナを作りに使つている魔道の壺があつた。

ちなみにセリカにも許可はとつてあるらしく、ハシゴを上り先にいたダロタを横切り壺を覗き込むと、確かに布拉ドの言つた通り何を煮込んでいるのか解らない何が減つていた。

「コレの補充、ですか？」

すると『ブラドは普段、別の部屋から『よいしょ』と大量の薬草の類を取り出してブラドはいつた。

「まあ、説明しながらやる事にしょつ、まあ」これらを煮込んでくれ…」

… そして、数個に分けられた鍋に薬草を煮て、力作業担当のダロタがかき混ぜている壺に少しづつ放り込む作業をしている事を一時間弱、次は何をするのかと聞くとブラドは解説書を読みながら答えた。

「ええと、次は壺自体の火力を徐々に上げて、また一時間煮込む、そして『げつふ』が出るのを待つそうだ」

「げつふ？」

「煮込み続けると盛り上がつてくる大きな『泡』の事を言つりしないぞ」

「あぶく泡ですか、だつたら、弾けたら危なくないですか？」

「いや、材料とかの関係で弾ける事なく大きく盛り上がり、そのまま弾けずに戻るそうだ。逆に弾けたら失敗だ」

答える途中でダロタも梯子を降りて來たので一旦、休憩を取つて戻る頃には独特の匂いをさせながら、げつふが出る雰囲気があつた。

「そろそろ、だらうな

少し自信がないのだろうかブラドが解説書を見よつとすると壺が少し揺れて、それは起こつた。

「おおつー？」

一瞬、天井に着くのじゃないのかと心配したが、すれすれで止まつたのを見ながらブラドは答えた。

「これは予想以上に凄いな…」

ブラドが驚くのも無理も無い、だがゆっくりと徐々にげつぷが壺に入つていぐのを見送つていると何かが見えた。

「あれ？」

「どうした、シユロ?」

「今、何か影みたいなの見えただよ」

ダロタも見えたのだろうか、火を止めて三人して梯子を上り壺を覗き込んだ。

補充したてだからだろうか、うつすらと壺の中の様子が見えたのでそこを三人はそこを凝視してみる。

「やつぱり何か…」

答える途中、それは顔を出した。

「…何見とんねん？」

それはこいつのセリフとばかりに…。

「カツバ？」

それが返答の代わりに、一いちをあきらめくちや睨みつけていた。

## 第十四話 カッパに心用 その2

「なあ、兄ちゃん何か用か?」

しかしそんな事を構わず、自分の家の壇の中から顔を出してカッパは聞いてきた。

「あつ、いえ、…そちらこそ何やつてるんですか?」

「カッパが水浴びしたらあかんのか?」

『見ればわかるだろ』と言いたいのだろうか、問題は大有りだった。

「ここは私達の店なのですよ?」

「ああん、そんなんわかつとるわ。大体な、アンタらが悪いんやろ」

「何がですか?」

「ここは昔、小さな湖畔だつたんや、それなのに埋め立てて、他の種族の事も考へんで店建ておつてから…。」

お前等な、そんなにワシ等の事憎いんか?」

「ブリさん、それはホントの話なんですか?」

もしホントの話だと悪いのはこっちの方だったので、ブラドに聞

「ううとやると答える前に壇の前に立ちながら言った。

「シユロ…、良く考えてみる。

いくらセリ力様に何度も店を破壊されようとも、私でもある程度、立地条件を考えて家屋を購入しているのだぞ、それにこゝは街中だ。ちなみにこゝは数年前まで湖畔などなかつた…」

「それって、つまり…」

とりあえず答えを言つ前にブラドは年長者という事で、カッパに腕を引っ張つた。

「な、なにすんねんっ！？」

「決まつてゐる、お前を取り出すため、だつ！…」

「う、うるさいわいっ…！」

大体、乾いていたトコロに良い感じで水があつたら入りたがるの  
は本能やろおが！？

ブラドは懸命に引っ張るが、さすがカッパといえば良いのだろう  
か細身の身体で懸命に泳ぎ、ブラドの力に対等に逆らつっていた。

「お前、やううと不法侵入しましたと言つたな。余計に悪い事く  
らこゝ気付いて、そんな事ほぞけつ…！」

それに、お前が浸かつてるのは、お湯だろつがつ…！」

「痛つ、皿掴んで引っ張るなやつ！…」

みんな火事や、火事やでつ！…」

「残念だつたなカツパよ、魔界はそんな事では助けなど来るわけがないだろう！大人しく！…！」

「お前ら、後悔しても知らんぞ！？」

「ワシがこのまま壺の中に入つとつたらな、良いことあるんだつ！…」

幸運を呼ぶモンスターのマジックポットって聞いた事あるやろ！…？」

「ほう、それじゃあ、お前は進化するといつのか…？」

「…嘘やけど」

「ふざけるなつ！…聞いた事がなかつたが、一応聞いた俺に謝れつ！…ダロタ、『イツを突けつ！…』

心境は一緒なのだろう今度はダロタも戦列に加わり、ひのきで出来た棒で『ガシガシ』と突く…。

「あたた、田を突くなや！…もう、ええ加減にせえつ！…」

ザバツ！…

「もう、ええわつ、こんなトコロ、おれるかつ！…」

誰しも『お前が勝手にやつてきたのだらつ』と心の声が聞こえたが、カツパは悪びれる様子も無く早々と梯子を降りて…。

「ボケエーー！」

ガシツ！

捨て台詞一つ、細い足で壺を蹴りつけて帰つて行つた。

「アイツ、最悪だな…」

そうブラドが素直に感想を言った時、グラグラと揺れていった壺が『じりん』と物の見事に中身をぶちまけていた。

「ホント、最悪ですね」

幸い悪臭はしなかつたので、とりあえず、梯子を降りると思つた以上に流れ出たらしく、その液体は向かいの家の方まで流れていた。

## 第十四話 カッパに心配心 その3

さすがに魔界でもその状況は気になつたのか、数々のモンスターがこちらをのぞきこんでいたが…。

そこに、少女が一人立つていた。

「お兄ちゃん、何があつたの？」

「えつ、ああ、『メン掛けつた？』

衣服が汚れていたので明らかに壺の中身を被つたのだとわかり、一言謝つて、ブラドに事情を話す、すると彼女を様子をじつと見ていた。

「どうしました、ブラドさん？」

「いや、何でもない」

だが、ブラドはその少女をまじまじと見つめたら失礼だと齧わなかたのは少女のほうだった。

「ブラド、人をそんなにまじまじと見つめたら失礼だと齧わなかつた？」

「あれ、ブラドさんを知つていると話の事は知り合いなんですか？」

そう聞くが『どこかで見たよつた…』と云つて、考え込んでま

だつた。

「ねえ、お兄ちゃん、とりあえずシャワー浴びたい」

断る理由もないのに、ダロタに案内せるとその少女は振り向いて答えた。

「覗いたら、駄目だからね」

「覗きませんよ、あっ、そうだ」

「なあに、お兄ちゃん？」

「貴女の名前を聞いてませんでした」

するとその少女は『金色の髪』をなびかせたトコロで『ブラドが気付いた』。

「ああっ！…セリカ様っ！？」

「なあに、ブラド、大きな名前で私の名前を呼んだりして？」

頷いた代わりに『シャワー浴びていろ』聞、服を洗つておいてねと答える、小さなセリカ…。

「カツパは、とんでもない事をしてくれました

そんな素直な感想に3人は頷くが、呴くだけで現状を打破できるとは思えないが、結局『ピー』という洗濯機独特の終了の合図を聞くまで打開策が浮かばなかつた。

「セリカさん、洗濯物渴きましたよ」

ドアをノックしてそういうと、『にゅつ』とドアから白い手が伸びてきたので『ちょうどい』という意味なのだろう、手渡すとそそくさと元の位置に戻ると、着替え終わつた普段より小さい魔王が入つてきて、机の開いてる席に座つてこつ言つた。

「ねえ、3人とも、普段からこつなの。こんなので、お店をやつていけるの?」

一言で言おう、不愉快である…。

『ペッジ』

たまらずブラドが手をTの字にして、タイムアウトをとる。

「どうしましょつ?」

「どうあるつて、セリカ様に大人しく帰つてもうつしかないだろ?…」

「いくらセリカさんでも、ここは魔界ですよ。それは危くないですか?」

「いや、大丈夫だ、小さくなつても本来の魔力は今も昔も強大なのは変わつてないからな。

城の連中も馬鹿ではない、事情を話しておけば理解くらいはするだろう。逆にここにおいている方が危険だ」

「どうごつ事ですか？」

「いい機会だから、セリカ様の昔のあだ名を教えてやってやる。」

『幼き故の破壊神』

それが、あそこに座っている彼女のあだ名だった。

## 第十四話 カッパに用心 その4

「どううワケでだ、シユロ、あのセリカ様に城へ帰るよつに説得しておいてくれ」

「えつ、ビリーヴ事ですか？」

「別に逃げるというわけではないぞ、私はこれから城に事情を話しに行って、元に戻す方法をだな……」

明らかに『逃げる気マンマン』だったので、ブラドの服の裾を掴みながら答えた。

「逃げないでくださいよ……」

「ふつ、シヨロ、私は女にそいやつて止められるのは私の夢だつたが、お前は男だ、残念だつたな」

離されまいと踏ん張るがこれでも上級モンスターである、そんなブラドにとつては無意味なのだろう。

軽々とシユロの顔を突つ張つて、引き離しに掛かるが、一人はモノの見事に吹つ飛んでいた。

「オラが、その役を引き受けたからブラドは元に戻す方法を考えとくだ~」

そう言ながら、返答を待たず一人を跳ね飛ばしたダロタは、キックボードを懸命に扱いで出て行つた。

「なあ、シユロ。オーラつてあんなに素早かつたか？」

「ブライドさんは知らないのですか、ダロタは力持ちですけど、小脇に抱きかかる事の出来るくらい軽量なんですよ…」

「ふん、軽くて力強い…か、まるでビックの宣伝文句だな…」

そうして、二人は魔王のいるテーブルへと戻つて、城へ戻つてもうようやく説得を開始しようとしたのだが、シユロは日に日に思う事があった。

「なあに、お兄ちゃん？」

どうして魔王という人種は、見つめられるだけでもこんなに威圧感があるのだろう？

おかげで少し恐縮してしまって事情を話す。

「つまり、ホントの私は貴方の一つ上で、今は8歳の子供に戻つている…って事？」

「はい、ですから、身の安全の為に城に戻つていただけないかと

…

「いやよ、お兄ちゃんを疑つてはいるわけではないけど、『戻つている』というのなら、どうして私には今までの記憶がないの？」

「セ、セリカ様、おそらく文字通り『戻つた』という事なのだと私は思いますよ」

「ブリドさん、何かわかつたのですか？」

本を読みながらブリド聞くが、だが、ブリドは首を振つて答えた。

「駄目だ、この壺に入つていた、薬草の効果、調合での起こうる作用。それを全部調べたが、子供になるなんて効果を記している記述なんて乗つてないな」

「ふーん、だつたら、どうして私にその中味が掛かつたのか教えてよ。もしかしたら、それが原因かもしれないでしょ?」

「カツパが壺を蹴りつけたから?」

「…カツパの蹴りにそんな効果があつたら、間違いなく上級モンスターの仲間入りだぞ?」

「だつたら、原因なんてわからずじまいって事じやない?」

『ブリド、覚悟はいい?』と、幼いセリカはいつものよつに周囲の空氣を歪ませたがブリドは慌てて答えた。

「セ、セリカ様、私が何とかしてみせます。」心配しないでぐだぐだ

そう言つて、早々と別室に飛び込んでいった。

「逃げたわね…」

しかし、そのおかげで一人きりになつてしまい、自然と氣まぐく

なっているのは流石に不味いと考えたのでセリカに聞いて見た。

「そういえば、魔力は『そのまま』なのでしたら、意外と自分で何とか出来るのでは？」

「うん、ちょっと待つて…」

そう言って椅子から降りると自分の魔力を高めているのか、周囲の空気がセリカに集まつていつた、家をガタガタと揺らし始めたが、セリカはしばらくするとそれをやめて黙つていた。

「大丈夫ですか…？」

「大丈夫…だけど…駄目だったみたい…」

## 第十四話 カツパにじこ用心 完結編

まあ、結果は子供のままだったが、セリカは不思議と気にしない様子で聞いてきた。

「ところで、そこのお菓子を食べていー？」

そういうたので、お菓子の袋を開けて『ザーバーバー』と音を立たせながら、一一つの皿に盛り付けていると、この小さなセリカ、何が気になっていたのか、ずっとこっちを見ていた。

「どうしたのですか？」

「随分と慣れてるのね？」

「ああ、私には妹が居ましてね……」

そういうえば、小さなセリカには自分の家族構成を教えてない事になつてゐる事に気付いたので盛り付けながら、説明しているとセリカは、盛り付けてある量が多い方を見ていた。

「まあ、そのおかげもありましてか、じーじーのに慣れてしまつたのですよ……」

そういうて、量の多い方を差し出すのは『いつものクセ』だったが、セリカはそれには恥ずかしかつたのだろう。

『ふーん』と言いながら顔を背けて頬を赤らめていたので、自分の妹に言い聞かすようにこいつ言った。

「とりあえず、セリカさんは、それ食べてくださいね」

「あら、何するの？」

「掃除です。臭いはありませんが、いい加減、店の掃除を始めないとまずいでしょう？」

「そんなのブラドにやらせばいいじゃない」

「ソレいう根本は今の彼女と変わりないのだろうと思つたが、ブラドを呼びに行こうとしたセリカを呼び止めながら答えた。

「駄目ですよ、ブラドさんは、あれでも原因を突き止めようとしているのですから…」

しかし、そう言つたのはいいが、ロッカーからモップを取り出してから少し頭を搔いた。

「この壺が横たわったままだからだ。

カツパに蹴飛ばされ、中味がこぼれたとはいえ、この壺は自分の体格、身長より大きいかつた。

試しに自分が踏ん張つて持ち上げようとすると上がらない。

「この位置でいいの？」

それを見たセリカも、下の方に潜り込み、まるで大玉を転がすように立て直して、そう聞いきたので、男のシユロは格好もつかない。

「どうして顔を押さえているの？」

もし、ウチの妹がこんなのだつたら、間違いなく旅に出ていただ  
れい。

その後、セリカは自分も手伝つと言つたおかげで、掃除は思つた  
より早く終わり、バケツにモップを突つ込む頃にはブリードが戻つて  
きた。

何かわかつたのか聞いつとしだが、ブリードはそのままジヨッキを  
手にして宙に浮き、しばらくすると中身をなみなみ注いだジヨッキ  
を手にして、黒くなつた液体を見ながらブリードは答えた。

「シロロ、この本によれば、古来より魔女と云のは、この魔道  
の壺で煮込まれた液体で体調を管理していたそつだ」

「……と云ふ事は？」

答える代わりにブリードは、その液体を差し出した。

「どうぞ、セリカ様」

「待ちなさいよ」

世には、良薬口に一ガシとあるが、本当に不味いのは誰でも嫌だ  
れい。

「心配あつません、全部、薬草で構成されておりま……つ……」

「いつこうところは、現在のセリカと代わりないのか、いつものようにイヤ付いて聞いてきた。

「もつと別の方法はないの？」

「セリカ様、言い終わる前に私の手を見事に弾き飛ばして、天井に穴を開けないでください。

「はい、どうぞ…」

「どこから取り出しあきたのよ？」

「こんな事もあらうかと、あらかじめ一杯ついでおいたのです。

「これでも何度も『気に入らない』といつ理由だけで、毎度毎度、吹き飛ばされておりますからね」

「ふうん、ブランド『毎度毎度』といつ事は、未来の私はいつも、そんなの感じなの？」

「ええ、そうですとも、私はセリカ様の幼少の頃より、仕えておりますが、握りつぶされるやう、吹き飛ばされるやうで、こいつは破壊するしか脳がないのかと思つてしまふやうですよ」

「ふうん…」

ブランドは笑っていたから見えていないのだろう、幼少のセリカに[写つてゐる影が普段のセリカの姿に、みるみる内に変わつていったからだ。

「一応言つておくけど、シユロ、私は魔王なのよ~。」

姿は少女のままのセリカは、何故か自分がセリカと出会つて一年前の事を話したので全て理解した。

戻つていたのだ。」

さすがにブラドは、その事に気付いた頃、顔が強張つて叫んだ。

「げ、セリカ!!」

「あら、その叫び方も懐かしいわね」

クスクスと笑いながら、少女のセリカはブラドの足を両手でつかみ、一回転、二回転、そして壺に向けて放り投げた。

『ふう』と蓋をきつちりロックしたのを確認して、火を付けていると、その昔の事が懐かしかつたのかセリカはまだ微笑んでいた。

「長い付き合いなんですか？」

「そうね、もう一、二年くらいになるのじゃない？」

ブラドに聞いたが『バンバン』と壺を叩くだけだったので、つまらなかつたのか火力を強めてセリカは昔を思い出していた。

ヴァンパイアという種族の中で一番、強いヤツはブラド…。

そんな噂が自分の国にも広まつた時だろうか、セリカは偶然にもブラドと出会つていた。

当時のブラドは数名の仲間も引き連れており、セリカを少し見下していたがセリカは恐れず答えた。

「あなた、私に仕えなさい」

ブラド達は、あっけにとられ、セリカを思に切り見下す頃には

セリカの拳が音速を超えて、顔を米印にめり込ませていた。

その日より、ブラドの『地獄』のよひな日々が続いたのだが…。

これはまた別のお話…。

ただ、今のブラドは顔が残念な事になっていた事だけを、伝えておこう。

## 第十五話 学校行事のセリカ その1（前書き）

今回は少しばかり、投稿ペースを前に戻します

## 第十五話 学校行事のセリカ その1

営業を終え、シユロ、ダロタ、ブラドの三人は一旦、いつもの休息に入る頃、一人を見つめるシユロがいた。

「ダロタ、古来より、人間が『団子』という食べ物を違う種族に差し出す時、それには決まって劇物…、いや、毒が入っていることが多い」

そこで『なんだつ』と正座した顎くダロタを見ていると、そこには自分が本日のお菓子と持つて来た団子を挟んで、ブラドがそんな事を言つていた、実際、毒など入つてない。

「だからこそ、ここは私が毒見を…」

つまり、ブラドの出任せである。

だが、ダロタもそんな事で騙されるほど愚かでもなく。

すかさず自分の団子を取られまいと、黙つて近付いてきたブラドの顔を『ふにつ』と抑えてくるのを見つけると、ブラドはじつとこちらを見た。

「どうした、シユロ…？」

ブラドが少し心配して聞くにはそんな自分が、どんな顔をしていたのかわかったのだろう。

「何だか、とても不機嫌そうだな。さつきの開店中だった時も、そんな感じだつたが何かあったのか？」

シユロがこのまま黙るのにはワケがある。

だが、コレはさすがに話すのは、戸惑っていた。

事は数時間前の事…。

いや、数週間前くらいから、事件は始まっていたのだろう。

それは週末、いつものようにシユロが仕事の為に不思議のダンジョンへと向かっていた時である。

「よし、シユロ、今日も元気かい？」

そういって、ダンジョン探索を生業としている冒険者がシユロを呼び止めたので、振り向いて挨拶をすると、やはり、その冒険者も同じ様にダンジョンへと足を運ぶと世間話も少々あるもので…。

「お前、そんな軽装で大丈夫なのか、長老に棍棒くらい頼んだ方がいいぞ?」

「そりは言いたいのですが、長老が言つては武器を持たせたら深く潜つてしまいそつだから、持つて行つて良い物は、帰還の石に薬草一つつて決められてまして…」

「まったく、ドジ踏んで儲けがパーになつても知らねえぞ?」

「一回ありましたよ。だから、薬草を一つだけ持つて行つて良い

事になつてゐるんですよ?」

笑いあいながら、一緒にダンジョンに入り、さつそく別々に別れ探索を開始するのは、シユロの儲けをある程度、残しておく心使いらしい。

自分はその際、拾いながら、魔界へと行く手段を明らかにするわけにはいかないので、どうしているかと云つと。

どうすることも無く、ただ、アイテムを拾つて、先に階層へ行かせて、ブライドなりセリカと合流するワケだが…。

「おい、シユロ、お前に珍しいものを見せてやるからひょっと来てみろよ」

その冒険者は1階では、さすがに大したキズを負う事もないのか、余裕を持った表情で自分を手招きしてきたので、なんだらうと言つて見るとそこには、お店が開かれていた。

「凄いだろ、ガーネイルつていうモンスターが経営している店だ」

話には聞いた事があるが、自分が今までダンジョン探索をしていた階層では、まず目にする事が無かつたので、中に入ると入つてすぐ傍にそのモンスターがいたので少し驚いていると、

「いらっしゃいませ…」

そのモンスターは驚かれるのは慣れていたのか、構うことなく礼儀正しく、紳士を思わせるような態度で顔を上げて…。

事件はやいで起つた。

「おや、シユロさん、こつもお世話になつておつましく…」

そう言つて、再度、いやいやしつて頭を下げる。

「はー?」

そのガーゴイルは、店にやつてゐる常連であつた。

そして、そんな事があつたブランドヒダロタに話したのだが、

「なんだ、別に良いじやないか、一応、そのガーゴイルには事情なり話して、その場を凌いだのだらう?」

「ええ、まあ、そなんですけど、前なんか数人のホビットに『シユロだ、シユロだ』と絡まれた事があるんですよ?」

「それこそ微笑ましい事じやないか、私からしてみれば、お前が何に迷惑してゐるのか理解が出来んぞ?」

『なあ、ダロタ』と相づちを求めたので、ダロタも『んだ』と頷いたので、2匹には理解できないのだろう。

だが、今回ばかり、それが起ると困るので、プリントを差し出しながら相談に乗つてもらうこととした。

「ええと、社会体験学習のお知らせ…」

ダロタ、ブランド、そして、セリカを加えて…。

## 第十五話 学校行事のセリカ その2

そして、そのプリントを一通り読んで、セリカは聞いてきた。

「つまりシユロ、貴方は学校行事である社会体験学習に参加するから、他のモンスターが気軽に挨拶して来ないようにしてほしいの？」

「はい、そうですが」

「だったら、参加しなければいいじゃない？」

「それは」もつともですが、そんな事をしたらいきつと母さんが『息子は学校行事にも参加できないなんて』って泣くと思こますので

「…」

『ふうん』と頷いてセリカは、一度会つた事のある自分の母を思い浮かべているのだろうか『お母様らしいわね』と頷いて答えた。

「わかつたわ、じゃあ、私に任せて頑戴」

そう答えて、そのまま迎えた。

「シユロ～、危ないと思つたらけやんと逃げるのよ～」

今にも泣き出しそうな声で見送る母を見て、参加してよかつたなと思うのは失礼だが、学校ではなく不思議のダンジョンに集合していると、催し物が始まる最初の儀式。

開催宣言というか、学校長の演説が終わり協賛者である長老の話が始まり出してと担任のジラル先生が、自分の肘を小突いて耳打ちをしてきた。

「シユロ、一応、探索の方は冒険者も同伴させていの事になつて  
いるが、今日は10階まで頼むぞ……」

「頼むといわれましても……」

「そう不安そうな顔をするな、この学校で探索経験者はお前だけ  
だから、担任として言つているだけだと思つて聞いていればいい」

笑いながらポンポンと肩を叩かれるが、自分の不安はそれだけではない。

なぜなら……。

「10階までといいますけど、正直、5階までしか探索した事が  
ないのですよ?」

「はは、冗談はよせ。お前は10階まで探索した事があるとよく  
飲みに行く酒場の冒険者から聞いていたから。

オレは、職員会議で『シユロは10階まで探索している』と言つて、今回探索するのは10階だと決まったのだぞ?」

「ジラル先生、お酒が入つた会話は話には尾びれが付くところの有名な話だと思いませんか……?」

「……」

「先生？」

「…ま、まあ、頑張れ」

ポンポンと叩かれた肩がバシバシと叩かれ出してたので、少し痛かつたが…。

「さて、老人の話はここまでにして、ビービー皆様、この村にある不思議のダンジョンがどの様なモノであるかを身をもつて体験してみてください」

長老がこちらを見て「一コリと笑うのは氣のせいだらうか、校長より早く話を終わらせていた。

するとジラル先生が自分の組の班分けを始めた。

さすがにクラスでの班分けなので知らない顔同士が鉢合わせる事もなく、

「よう、シユロ。今田はお互い頑張るわぜ」

ゲンタ、クライトと幸い一人の友達同士が同じ班となり手を振りながら集まってきた。

一応、ここで忘れてはいるかもしないので、シユロの事情をおさらいしておこう。

シユロがこの不思議のダンジョンで探索をしていることを知っているのは道具屋と長老と冒険者だけである。

そして、何故、ジラル先生や学校の先生達は知っていたのかといふと、長老が話を通しておいた事にあるらしい。

そういうわけで今まで学校のネタをやらなかつた理由はそこにあるつたりしたというは…。

…あつ、言ひちゃ駄目でしたっけ？

まあ、そんなワケで生徒達には内緒だといふのは、保護者伝いに自分の母親に知られないようにするための学校側の考へで、生徒達には自分は働いて学費を稼いでいるといつ事で通つてゐるらしい。

そう思い浮かべていると、やはり学校側にも迷惑掛けているなと思つてしまつたが、ゲンタが小突いて自分を視線の先へと誘つて答えた。

「おい、シロ、あの中でどれが俺達と同じ班になると想つ?」

そこでは今から抽選をしてくるのか、冒険者達はくじ引きをしていた。

その会話の中に…。

「9番、9番だったよな」

そんなセリフを聞き拾つたクライドが眼鏡を掛け直して考え込んだ。

「あれ…、9番つて、僕達の班の事だよな、どうして?」

「んつ、今、『シユロ』って名前出なかつたか？」

多分、聞き間違いではないだろ?」

「どうして、お前のいる班に入りたがるんだうな?」

不思議そうな顔をして聞いてきたゲンタには悪いが、その前に…。

「おおお〜〜〜」

歓声が上がつた。

生徒達は『歓声』の意味が解らず、きょとんとしていたが…自分にはわかつた。

「おい、シユロ、俺達の同行者つて物凄く美人だぜ?」

嬉々としてゲンタが答えるが、その人物は構わず近寄ってきた。

「あら、シユロ君の班だつたの?」

「言つまでもない。とてもワザとじりじり挨拶にきたのはセリカだつた。」

## 第十五話 学校行事のセリカ その3

「裏切り者…」

「そうだね、裏切り者だ…」

ダンジョンを探索する最中、一人が敵意を向けるのはモンスターではなくシユロだった。

「シユロ君、僕らの同盟はそんなに安いモノなのかい？」

ゲンタ、クライトは始めて聞く『同盟』といつ言葉にセリカは微笑みながら答えた。

「あら、同盟なんて、手を結ぶといつても、どちらかの力が強まれば、はかなく破られてしまうのは常識だと思わない？」

そんな魔王らしい一言を一人は理解できるとは思えなかつたが…。

「そうですね、セリカさん」

なんだろう、この疎外感。

「さすが、シユロ君のお友達ね。理解できてうれしいわ

セリカの微笑みに、一人は照れるように笑いあつてたが、自分は探索開始から、波乱を呼ぶのではないのかハラハラしていた。

だがこの『魔王効果』実はこの後、役に立つのである。

「あつ、スライムだ！！」

その時、クライトが思わず叫んだとおり、先制を許してしまつと思われた時、この魔王は…。

「あ？？」

スライムの方を向くと、びっくりしたのは、ビックリだらうか？

「……」

自分が黙つていたとおり、嫌な沈黙が流れた。

特に、このスライムには『歯向かうとは、いい度胸してゐるわねと重圧が襲い掛かつて來たのだろう。

逃げ出したスライムをみて、もはや何も言つまい…。

そんな状態で、モンスターたちは自分に話しかけてくる事もなく、三階を探索をしていると、探索未経験者の一人は、慣れてきたのか緊張が解れた証拠に、ゲンタはさすがに今までに気付いて聞いてきた。

「なあさつきからセリカさんつて、全然、戦つてないけど、本当に冒険者なのかよ？」

ゲンタの指摘するように、セリカは戦闘に参加していなかつたのだ。

「そういえば、魔物は弱いモノから狙つと昔から言われてるけ

ど、僕達は棍棒を最初から武器として持つているのに対して。

何も持つてないセリカさんに全然、向かって来ないね？」

そりや、後が怖いからだと思つが、一応、誤魔化すのは言つまでもない。

「それはセリカさんの周りには、敵が寄つてこないよ! 魔法が掛けられているのでは?」

「実際、セリカがそんな事をすれば、自分達の身がどうなるのだろうかわからないが、ゲンタは『なるほど』と言つて納得した。

「どうりで、腕細いワケだ」

「でも、その細腕で大人一人持ち上げたりしますけどね…。」

「セリカさんって、どんな魔法を使つてくるのかな。それで怒つたら、魔法でおしおきしてきそうだよね?」

「ええ、そうですとも、怒らせたら地図を書き換えが起るくらいの破壊魔法を扱つてましたよ先々週…。」

そんな嬉々とした一人には、そんな事はわからないのだろう。

「一人苦しんでいると、その時だつた…。」

小石につまづいて、ゲンタは地面に顔を擦つた。

「痛つてええ!!」

ゲンタ自身、大した事は無さそうだったが、それは自分で自分の

顔が見れないからである。

「だ、大丈夫ですか？」

自分からしてみれば、ゲンタは頬から血が流れ、服を赤く染めていたので、自分だけではなくライトも心配していた。

「帰つて手当をした方が…」

「大した事じゃねえって、そんな事で帰るワケにはいかねえだろ？」

そう言つが、擦りむいた赤い血がボトボトと地面に落ちる音がこつちまで聞こえてきそうなくらい血が出ていた。

「見せてみなさい」

「ちよ、ちよつと…」

手で払おうとするが、それはスルリと避けられて、顎を片手で上げてキズを確認するとセリカは何やら囁え出した。

「はい、これで大丈夫よ」

あつけなさを感じるくらいの出来事だったので、思わずゲンタの方はどうやら痛みがなくなつたようだつた。

「ありがとう、セリカさん。

今度から気を付ける

「あら、元気が良いのは、男の子らしいっていいじゃない。」

まあ、今度から気を付けなさい」

するとゲンタは田を輝かせて、元気に答えた。

「はい、セリカさんつ」

## 第十五話 学校行事のセリカ その4

その頃、カイリのいる国では…。

「けつ…」

悪態を付きながら、自國に攻め込んできた魔王と戦っていた。勝負は圧倒的にカイリが優勢だが、当のカイリの顔には焦りあつた。

「いい加減に…しゃがれっ！…」

後先考えない自身の魔力を全開にして戦う様は、カイリらしさをみせて、その一軍勢を先ほどの一撃で塵へと変えた時、更なる伝令が届いた。

「カイリ様、今度はわが國の南の方角から別の魔王が攻め込んできました」

「ああ、またかよつ、今田は七回田だぞ？」

「一体どうなつてやがると、サコンを睨みつけたがわかるワケがない。」

群雄割拠している、ここ魔界において隣国の魔王が他の国に攻め込んでくるといつのは良くある。

ただカイリとて普通の魔王ではなく、一応、魔界では知られているほどの戦闘能力を有している魔王なのだ。

その魔王相手に、下つ端魔王どもが我をひと皿国に攻めてくる事、やつとも言つたとおつ七回目…。

まるで、もぐら叩きのような雰囲気を思わせたが、東西南北、東南北北とさつきから自分の国を行つたり来たりとしていたら、普段、明るいカイリもさすがにイラついているのなか、サコンが聞いてきた。

「消耗戦のつもりなのでしょうか？」

サコンと、いや、カイリという魔王の事を知らないモンスターは魔界にはいない。

「サコン、俺を誰だと思つて聞いてんだよ？」

彼女にはそんな事ほど意味がない、こうしている間もみるみる内に傷が塞がり、大きく息を吸い込んで伸びをしていると、もつ魔力は全快しているのだから…。

おかげでサコンはまた睨まれたと勘違いさせてしまつたが、カイリにはそんな事構つ事無くイライラして、軍勢に声を上げた。

「お前等、私の週末を奪つて、ただですむと思つなかーーー！」

その上、シユロたちはといつと…。

「なあ、みんな、ここひで、弁当にじよひぜ」

ダンジョン未踏者の一人が隅々まで探索をしていたためか、5階

で毎時を迎えて、休憩をとつていた。

「あら、シユロ君、そんなトコロで何をやつてゐるの？」

「次の階つて、いよいよ6階ですから、どんな感じなんだらつて思つまして…」

「そういうえば、貴方つてここまでしか来た事がなかつたのよね。気になるの？」

まあ、そんな感じだと頷いていると、ライトとゲンタの会話が耳に届いた

「なあ、ダンジョンつて昔、怖かつたけど意外と大した事がなくてよかつたな？」

「そうですね、一時は週末を潰してまでやる事がと思いましたけど、これなら大丈夫そつです」

一人の会話の中に『田曜日』とキーワードが打ち込まれたとき、セリカに聞いて見た。

「そういうえば、カイリさんは？」

そう、Jの人はこんな楽しいイベントを逃すわけがないからだ。

「ああ、カイリなら今頃、自分の国に他の魔王が軍勢で攻めて来たらしいから、今日はその対応に当たつてるわ」

「対応ですか…」

「あら、カイリの事が心配なの？」

「それは心配ですよ……」

「まあ、立ち向かう魔王たちには悪いけど、カイリはあれでも私と普通に張りあえるんだから、心配するだけ無駄よ。

……私はただその魔王達に、貴方がダンジョンを探索するまでの時聞稼ぎに利用するつもりで、そそのかしただけよ」

「えっ、最後なんて？」

セリカは『なんでもないわ』と微笑みながらそう言って、そのまま後ろを向いたゲンタ達の近くに『ふわり』と降り立つて驚かせていた。

## 第十五話 学校行事のセリカ その5

『籠絡』といつ言葉を『存知だ』つか?

辞書によると、人を巧みに手懐けて、自分の思い通りに操る事を指すが…。

「セリカさん、きれいな指輪を拾いました」

そう言つて、セリカに捧げているゲンタは他から見ると意味は違うが…。

「綺麗な指輪ね、次は何かしら?」

『次』と言つたセリカの要望に答えるよつてそれを探しに行つたゲンタのこの状態を籠絡といえるのだろう。

そして、現在7階…。

いつの間にやらクライアントも…。

「セリカさん、さつき痺れ針のワナがあつたから、僕が潰しておきました」

微笑むセリカは、また『次』を期待されゲンタと同じよつて『籠絡』していた。

そんな自分は何をしてたのかどうと、その潰されたワナをまじ

まじとつていると、だんだんとわかつて来る『感覚』に呑んでしまう。

「これ、作るのに大変だったのに…」

ちなみに、これを作るのに掛かる時間は約二時間、大量生産しているのにも関わらず自分の作っているものだと理解してしまつのは、製作者ゆえなのだろう。

だが、クライトは悪気がない。

それだけ、今も自分の作品が壊されていくのだと思つと心は自然に沈んで行くのは言うまでもなかつた。

「でも、ダンジョン探索でワナが壊れたり壊されたりするのは、仕方ない事でしょう。」

貴方だつて、それで商いが成り立つてているのだから、割り切つた方が利口よ?」

するとクスクスと笑いながらセリカは指輪を見せて聞いてきた。

「ところでシユロ、さつきゲンタにコレが何の指輪なのか聞かれたのだけど、さつきからはめて見て確かめているのだけど、魔力も上がらないし、効果が全くわからないのよ」

「ああ、それはただの指輪ですよ」

「そうなの、こんな綺麗な装飾が施されているのに効果がないなんて残念ね。」

まあいいわ、ゲンタに聞かれて困っていたのよ。つまく説明して  
おくわ

そう言つて、セリカはゲンタのいる場所を見ているのか、何も無い壁をじっと見つめて探し当てたのだろう。

そこへ向かおうと歩き出したのを見て叫んだ。

「そーは……」

言つのが早いのか、飛び出すよつこ駆け寄つて落とし穴に落ちかけたセリカを抱きとめていた。

「シユロ、大丈夫？」

「な、何とか…」

「馬鹿ね。そんなに心配しなくとも私は飛べるのよ。落ちた後、開いた穴から上がってくれればいいだけじょ？」

「それはいい考えですけど、多分、その落とし穴、自分の作ったモノなので…」

重くはないがようやく抱きかかえて引っ張り上げると、その落とし穴はモノの見事に消えた。

「すぐに消えるところのもの考えものですね…」

「ふふ、そうね…。」

でも、辺りのモンスターも強くなってきたるようだから、二人にそろそろ纏まつて行動するよつて言つておかないといけないわね

そう言つて、なぜか笑つてゐるセリカを見ていると自分がどんな状態なのかに気付いた。

「やつ、やつやつ、離れまじょうかーー？」

密着状態だつたので、流石に顔が真つ赤になつてしまい、引き離そうとするセリカはくすくす笑いながら、いつも通り離れてくれなかつた。

その時である。

「ゲンタくん、やつぱり彼は裏切り者だよ」

背後からそんな声が聞こえた。

「許せねえヤツだ」

「二人とも、コレにはワケが…」

「抱き合つておいて、どんな言い訳するのかな、ゲンタくん？」

『許せない』といった空気が自然に出来上がる中、ゲンタ達は答えた。

「勝負だーー！」

## 第十五話 学校行事のセリカ その6

「うおお、負けるか！！」

「ほ、僕だつて……」

その後、ゲンタとクライトのおかげで8階と9階とあつとこう間に踏破する事になったのだが、シユロは最初からこの勝負に乗り気ではなかつたので、一応の注意をした。

「二人とも、そんなに無茶しないでくださいよ」

「無茶じやねえよ、もしかして、シユロびびつてんな？」

そんなワケではないが、実際モンスターも強くなつてるので、またゲンタが無茶をするのではないかと思つたのだが……。

「まるで保護者ね」

と、また自分の前に立ちふさがつたモンスターを一睨みして返して微笑むセリカが冷やかすとおり、心境はまさにその通りだつた。

「でも、いいじやないの」

「どうじですか？」

「せつしき聞いたんだけど、この先を行けば10階に行く階段があるわうなのよ。

せりかのつこでに、自分の仲間や顔を見るなりに驚いて逃げるから、10階まで来たあなた達の同級生はいないといったわよ？」

セリかは答えた。セリかは答えた。セリかは答えた。  
「さあ、あなた達の事はしてあげるから、もうやめにたい」と、セリかは答えた。

しかし、誰も行った事がなことこの事に少し顔をしかめているとセリかは答えた。

「せりかあがむへりこの事はしてあげるから、もうやめにたい」と、セリかは答えた。

何を心配やうな顔をしてくるのよ？」

「それだと少し困ります……」

「あら、どうして？」

少し考え込んで「これはセリかにも言つておこた方が良い」と判断したので言おうとするがゲンタが割り込んできた。

「おこ、何また抜け駆けしようとしたんだよ？」

小声でセリかに話しかけた姿勢が、ビックやけの誤解を招くような姿勢だったらしい。

「ち、違いますよー。」

おかげで慌てて離れてしまい、ゲンタは一通り怪しつんだ後、明る

く答えた。

「まあいいや、それより、10階に行く階段を見つけましたよ」

「あら、やすがね、ほら、シユロ君も頑張らないと負けちゃうわよ?」

どうやら勝負の基準がわからない戦いに巻き込まれてしまつたようだが、階段を上る際に白々しくセリカに聞いてみた。

「ヒーリィで、セリカさん……」

急に前の一人が睨みつけてきたので、少し戸惑いながら聞いてみた。

「『』のダンジョンって、10階おきに強いモンスターが陣取つてゐつて、ホントですか?」

「何だ、ホントにシユロは意氣地なしなんだな。大丈夫だつて、今まで大した事ないんだから、強いつていつてもどうせ図鑑でよく見る程度のモンスターだろ?」

『 そうですよ』とクライトも、余裕が出て来たのか、笑顔がだつたが意外に対照的だつたのは、セリカだつた。

そんな表情にも構わず『大丈夫ですよ』と笑顔で、その10階を駆け出した二人を見送りながら、セリカは思い出したように言った。

「そりゃ、10階にいるのつて……不味いわね……」

「不味いって…何が？」

「ねえ、シユロ、ここのダンジョンって、踏破防止のために定期的にモンスターを入れ替えているのを知ってる？」

「はい、それがこのダンジョンで冒険者たちの売りだと聞いてますか？」

「それで、10階おきには強いモンスターが、陣取つてることになつているよ。」

「一応、ダンジョンにいるモンスター達には、今回、あなた達の事を言つておいたんだけど…」

ホントに困つた事になつてているのが、一旦、躊躇して自分を見たのでわかつた。

「その中で、張り切つた人がいたのよ…」

「…もしかして、ブラドさんですか？」

首を振つたので、違うのだろう。一応、礼儀にもここでダロタも名前を挙げるが、首を振るので、しばらく考えたのち、どうしても頭に浮かぶのはセリカの危険な相手だった。

「カイリさんですか？」

「魔王は、こんな所で油なんか売つてるワケないでしょ？」

自分を棚に上げておいて何を言つが、この魔王。

しかし『解答』は、二人が帰つてくる事でわかつた。

「図鑑じゃない、図鑑じゃない、神話、神話が……」

「れれれれ……」

クライトは何を言いたいのか『それ』が答えを導き出した。

「なかなか、騒がしいと思ったら、これは随分と小さい冒険者達だな……」

現れたのはレッドドリゴンのレクターだった。

トンでもない人が張り切つていた。

「え、じつよひー。」

「じつあつたって、戦ひしかないだひー。」

最初はゲンタは勇ましく前に出ていた。

「ほほ、勇ましい、君が相手かね？」

『ズシン、ズシン』と歩み寄り、普段、地響きなど味わう事がないゲンタにとつては恐怖の何事でもなく……。

慌てて集団の中に入つてこぐ、そして……。

「え、じつよひ、セリカさん？」

クライトは怯えきつて、意見を求める事はしなかつたが、正しい判断だらう。同じ年の自分に判断を求めるより、年上のセリカに判断を求めた。

しかし、それは間違いだとゲンタは気付いていないのだひ。

「やうね、シロ君の判断に任せるとわ

「じゃあ、逃げましょひ

やつぱつ、そつなつたので即答である。

「いいえ、シユロ君、貴方には、まだアレがあるじゃない」  
目が笑っていた。

だがゲンタにとっては、それで光明を得たのだろう。

「おい、シユロ何とか出来るのかよ？」

クライトもそれにすがる様に自分を見たが、当然あるワケがない。  
それよりかこの二人に押されて、とうとう歩みを止めたレクターの前に出てしまっていた。

「おお、君が相手かね？」

心なしかレクターの目が輝いたように思えたのは、レクターの狙いが自分だという事がわかつているからだらうか？

構う事無くレクターは、臨戦態勢をとった。

翼を広げ、視界一杯に広がった身体を更に大きくさせ、威嚇して、自分の目の前で雄叫びを上げる姿は、神々しさすら感じた。

「大丈夫ですよね？」

そう言つてセリ力を見たが、思い浮かべるのはダロタ食べられそうになつた光景か、それとも家が新しく生えた尻尾に壁が吹き飛んだ光景か、そんな現実を経過したレッドドラゴンは…。

「あつ、逃げた…」

クライトがそれを呟くべらり、思い切りよく、左側に次のフロアに行く通路があったので、そこへ逃げた。

…のだが。

それは地獄であるところ。

追う者、追われる者。

図式として、逃亡者といつモノは恐怖を感じるモノである。

そう後方には、地響きが追つて来ている。

おかげで振り返る事が出来なかつたが、走るショロには勝機はまだあつた。

距離にして5、4、3、2、1m…。

『ドカッ』といつ一際大きな振動と共に細い通路で、いつぞやのよつに首だけを出した状態になつたが、どうもレクターは抜けなくなつたらじく足掻いていた。

「やるではないか…」

おかげで、その咳きを幾分か余裕を持つて聞くことが出来たが、その余裕はあつかなく消えた。

「ふむ、外したか、やはり首が曲がらんと調節が難しいな

火の玉を吐いて軽々と壁が溶解したからだ。フロア内に煙が充満する中『ある一定の方向』に煙が流れて行くので、嫌な予感がして次のフロアへの通路に走り込む。

熱かった…とても熱かった…。

後ろから迫る、炎の壁、辛うじて逃げられたのは奇跡だった。

「あら、シユロ…」苦労ね

気がついたらクスクスと笑っていた。どうやら、この階層を一周してきたりしい。

「あれ…みんなは…？」

「もう先に帰らせたわ。シユロもさつと帰ればよかつたのに」「だつたら、どうしてあんな事を言つたのですか？」

「ふふ、それは面白そうだからよ」

しかし、うんざり出来なかつた。何故ならレクターが狙いを定めていたのが見えたからだ。

セリカは気が付いていない、しかし、身体が勝手に動いた。

セリカを庇い、視界いっぱいに広がる炎…。

そして…。

「あつ、気が付いた？」

辺りを見渡して、ようやく近くの宿屋のベットの上だと気がつくが、今までの経緯がまったくわかつてなかつた。

「えつと…？」

「ブレスをまともに浴びて、貴方だけ気絶した状態でダンジョンの入り口に転送されたの。赤龍王もやりすぎたつて、謝つてたわよ？」

「赤龍王？」

「あのレッドリラゴンの事、魔王をも圧倒する攻撃力を誇つてゐるから、そんなあだ名がついているのみ、知らなかつたの？」

「知るわけないですよ」

「でも、馬鹿ね。いちおう戯れで放つ程度のブレスなんかじつて事ないのに。」

ほつとつて逃げればこんな事にならなかつたと思うわ。おかげでゲンタ達も心配してたわよ？」

「そりこつて訳にはこきませんよ」

「ふふ、そうね、それが貴方のいい所ですもの…」

微笑を浮かべるセリカに『少し』ムツとしていると、セリカも『

少し』考えた様子で聞いてきた。

「仕方ないじゃないですか、危ないとわかつてれば誰でもそうするでしょう?」

真剣に『言つたつもりだが、セリカにとつてはそれがおかしかったのだろう。

とつとつ笑い出して、謝りながら答えた。

「『めんなさい、そうね、誰でもよね

何がおかしかったのかわからないが、起き上がろうとするとき人差し指で額を押さえられて起き上がることができなかつた。

「駄目よ、怪我人は寝てないと。

私だつて、貴方の容態を知つて、取り乱したお母様の相手をしていて、下手な魔王を相手するより、大変だつたわよ

そういうセリカが珍しく疲れた様子を見せたのが、とてもおかしかつたので、自分は珍しく『言つ』つた。

「そうですね、じゃあ、『言つ』とおつて行きます

当然、次の朝…。

「シユロが、女と一緒に一夜を宿屋で明かした

そんな噂が村中に広まつてしまつたのは、『言つまでもない。

## 第十六話 グーたら義兄と暗黒義妹 その1

「ブランド、覚悟はいい?」

「反論も許さず、空を飛んで行きなさる、ブランド。」

そんな見慣れた光景を見ながら、セリカは『ふん』ヒブランド状に空いた天井を一瞥して、不機嫌なまま、一旦帰るといって、空へと翔けて上がっていくる、忘れ物でもしたのだろうか?

「シユロ、遊ぼうぜ!—」

いや、カイリが窓から入ってきた。

「カイリさん、玄関から入ってきてくださいよ」

「細かい事はいいじゃねえか、それより、さつき偉い勢いで何か飛んできただけど、またアッシュ、セリカに怒られたのかよ?」

原因は、ただ自分が持ってきたお菓子を先に食べたからという、何とも単純な理由でセリカ様がお怒りになつたからだと言つていい。

「何だよ、そんな顔して?」

しかし、カイリは構つ事無くさつきセリカが座つていて口に座り、そのお菓子をぽりぽりと頬張り何かを思い出すよつて答えた。

「ああ、そういうえばブランドと、セリカつてさ……」

それはダロタがお茶を差し出して来たので、一皿会話を止める事になつたのが、この『静寂』を生んだのだろうか？

それとも…。

「従兄妹同士なんだよな？」

この問い合わせ、周囲を静かにさせたのだろうか？

カイリも少し考え込みながら言った。

「嫌な、人の系図なんて知らないけどよ…。

」の前、こんな手に入れてさ

そう言って、カイリはどこからか、自分の背丈ほどある巻物を『よしよ』と取り出して、机をどけるように指示したので、どけていふとカイリはそれを丁寧に広げていた。

「これは家系図？」

「まあ、そんなモンだ。

ほら…」

そう言って、指を差すので魔界の文字で『セリカ』と書かれているのを何とか確認出来ると、その隣の少し下だろうか、母方のヴァンパイアの種族の辺りに確かに『ブラド』と書かれていた。

「けけ、アイツ、家計図でも下なんだな？」

「そんなの選べないでしょ、でも、『あなたのビリード手に入れたのですか?』

「ああ、セリカん家の宝物庫」

「犯罪じゃないですか、ケロッ」と答えないでください」

『はいはい』と反省する気など無いのだらう。

「それにしても、あいつ等が従兄妹らしことひひ向て見たことがねえよな」

「そんな事は無いのでは?」

「へえ、何かあんのか?」

しかし、これには意外と反論が出来た。

「『の前なんか…』

それはブランドが苦しんでいる事に遡る。

自分はそのブランドが苦しんでいるところを知ったのは、セリカがある事をやつていたからである。

自分に気付いたセリカは『しつ』と口元に指を当て、静かにやつて来いといつのか手招きをしていたので、招かれるままにセリカと同じように『すたつふ おんりー』とぶら下がった看板の付いたドアに耳を澄ませていた。

「お、おのれ…」

セリカには苦しみを隠そつともせず、ブライドの声がしていた。

少し心配になつたが、セリカは手を自分の肩において、言葉が頭に響いた。

『動かないで…』

『で、ですけど、ブライドさんが心配ですよ…』

『もうなんだけどね…』

そのままブライドアをじつと見つめ、眼に魔力でも込めているのだろうか、眼の黒点が赤くなり焦点を絞るが、何回か確認しているのだろう。

『この部屋に居るのが、ブライド一人だけなのよ』

## 第十六話 グーたら義兄と暗黒義妹 その2

苦しんでいる表情で、部屋一人で『おのれ』と唸つて『ヴァンパイアは、さらに独り言なのだろうか？』

「また如月か、お前に告られたくなかったな～」

「この意味深発言に食いついたのは、魔王セリカ。

ドアに耳を当てて、続きを聞き入っていたのだが…。

「俺の狙いは藤崎だというのにな…」

またまた意味深発言、この発言に、窓から覗くとしたが袖を引つ張られて出来なかつたので耳打ちをした。

「あの、ブラジさんって、もしかしてモテるのですか？」

「そんなの聞いた事はないけど…行くわよ？」

「ちよつと、セリカさん、いくらなんでも不味いでしょう？」

「あら、私はただどんな人に告白されたのか気になつただけよ？」

確かに自分でも年頃というのもあり、気になつたので、ドアを開けようとする手に力を込めると、さらに彼女は呟いた。

「それに私を差し置いて、抜け駆け…ふざけないでよ」

あつ、駄田だ、このドアは地獄門だ。

開けたらラストバトルといつ展開は何とか避けよつとしたのだが、魔王は構わずドアを開ける。

あるとやうには…。

『卒業してからも、ずっと貴方に会えるなら…』

地上から持つてきたゲームをやつて『ブリードが確かに『生田』』  
されていた。

「何やつてんのよ？」

それを見た間髪入れずにブラドを踏みつけるといつ事があったの  
を話してるとカイリは笑い出した。

「そんなのやつせのと変わらねえじやねえか！？』

「まあ、その田はそれで事は、終わったのですがね。

その次の週なんですが、今度は…』

セリカが唸つていた。

「なかなか、やるわね…』

「すいません、セリカ様…』

「いえ、ブリード、貴方に落ち度はなかつたわ……」

たつた数回のイベントで、告白に行くなんて、なんのこの娘  
?」

ドアを開けると、ブリードが先週もつていた恋愛シミュレーション  
と一緒にやつっていたのである。

『ホ、ホントですか?』

先週と同じ光景……。

ただ一つの違いである、魔王が呟いた。

「しかも、そりは問題はこの『藤崎』つて娘よ。

『私は、勇氣を出したいと願つて』

何て思わせびらせておいて、告白して来ないなんて何様のつもり

?」

「私に言われても困りますよ。

このゲームの難しきは『告白される事』にあるのですから。

ちなみに作者も『如月』に阻まれ続けて、完全攻略出来なくて……、

『あの時の課長の凄いこと』が、メインヒロインの藤崎しおりを  
避けて、他の娘を攻略しようとしたりしたところである。

なんて言つて、よつやく『よつづ』でEロを見れたそうですね？」

そういうて、『「わるわこわね…』』としづしづと電源を切るというのをカイリに話していると、当然か、カイリは机をバシバシと叩きながら笑っていた。

「そ、そりいえば、あの一人に関して、俺もこんな事があつたな」

第十六話 ぐーたら義兄と暗黒義妹 その2（後書き）

少しマニアックすぎるかな？

## 第十六話 グーたら義兄と暗黒義妹 その3

ブラドとセリカの従兄妹話に華を咲かせていると…。

「…ああああ…！」

真上でも飛んでいたのだろうか、吹き飛ばされたブラドが『どかん』と軽く爆発を起こしながら落ちてきた。

「しつかし、コイツ、タフだよな？」

自分たちにとつてはいつもの光景だったが、その大きな音が何だろつと集まってきた。

下級モンスター達をカイリは『おら、どけ』と人払いをして、気を失つたままのブラドをつま先で小突いて答えた。

「いくら、ヴァンパイアが魔力の高い種族でも、セリカの一撃をこんな感じでまともに受けて平氣なんだからよ」

「平氣じやないでしょ、氣絶してますよ~」

「いやいや、さつきのセリカの魔法は上に向けて打つちやいるが、島を一つ無くすくらいの魔法だぜ？」

普通は消滅モノの攻撃をまともに受けて、これで済むつてのは考えられないだろ」

「『や』はさすがにセリカに手加減したのでは？」

「くつ、あのセリカに手加減が出来ると思つか？」

確かに最初のよつてお菓子を先に食べよつとしてセリカに吹つ飛ばされたり。

ブランドが大体口クな事をせず、セリカが吹つ飛ばされたりなど。  
そして、カイリがイライラするからといつて紅茶を差し出したブランドにハツ当たりしたりなど…。

いや、最後はカイリだったが、今まで、従兄妹話に華を咲かせていた性もあって、今までを思い出すことに苦にはならなかつた。

「…よく生きてますよね？」

「まあ、その辺だけが従兄妹らしいところや、うしいけどよ。

そういえば、ショロにも妹がいるんだつけ？」

「はい、リリって言こますけど、カイリさんは兄弟はいるのですか？」

「いんや、俺んトコは親がいないからな。ただ珍しいのさ」

悪い事を聞いたなと思ったがカイリは『ほん』と肩を叩いて笑いながら答えた。

「気にすんなよ、魔界じやあ、よくある事だからな」

氣を使わせてしまつたのだろうか、何か話を切り替えようとしたが、困つたがそこにセリカがやって来た。

「あら、カイリ、貴女はいつから勝手に人様の家から、こんなのも持つて来るようになつたの。

「ひとつと、帰りなさい」

「けつ、随分と言葉使いがへんな魔王様だな。

別に構わないだろう、前に他の国の魔王どもをそそのかして、オレントロに差し向けたんだ。

「これくらい見逃せよ」

「あら、何の事かしら、それは貴女の思い込みじゃない？」

「どうだか、一段落付いた途端、お前のトロロの軍は、まるで計算していたかのようにその周囲の国に攻め込んだじゃねえか？

しかも、支配をじやなくて降伏を求めるようにするんだから性質が悪いぜ」

あくまでとぼけるつもりだったセリカは、さすがにバツが悪いのか翼を広げて大きく踏み込んで答えた。

「…氣のせいよ」

そして、飛び立つた。

…アラジを踏み鳴らして。

「ん？」

すると同時にからだらうか、カイリが顔をしかめたのは雨が振つてきたからだつた。

そして、家に戻ると今度はダロタが上を見上げていた。

「ああ、雨漏りしますね」

「おい、そんなモン持つて何するんだ？」

「ただの修理ですよ」

梯子を使って屋根裏に昇ると、カイリもついて來た。

「何か？」

「嫌だ、見てるだけだよ」

何が物珍しいのか、無防備な態勢でカイリが「こちらをずっと見ていたので、目のやり場が自然と作業の方に集中したが途中で手が止まつた。

「ダロタ、少し無理つぽいから、プラドを呼んで来て」

下の階にて『あんぐり』と口を開けていたダロタにやう言つと、

しばらくして倒れていたはずの「ラド」がやってきた。

「ああ、『りや、ワラを詰めるだけじや駄目だな』

さつきまでとんでもない高さから落ちたというのに、さらに踏み潰されていたというのに平然としているのだから、さすがのタフネスである。

「しかし、セリカの世話だけでなく、シユロのこいつた事も手伝わないといけないだから、お前も大変だな？」

「大変ですが、それが私とセリカ様の従兄妹としてのあり方だろうな。

まあ、毎度打ち上げられたり、吹き飛ばされたりもしますが、セリカ様とて、これでストレスの解消にでもなれば幸いだろう？』

意外と大人な意見にカイリと『おお』と声を揃えていたが…。

いや、違う、あれは汗かそれとも…？

「思わなければならんだけ…？」

セリカ様に事あるごとにわがままに答えたときもあるが、更に口答えでもしたら、こんな塩梅だ…？」

両手を広げて何を表していたか、その『塩梅』に田を移していたが、ラドは嘆くように答えた。

「一応、魔王に仕えているがな、私だつて出世したいとか思つて

ころのだ。

やがて、いつかはとかな…ど、うした、シロロヘ。

「… もうまつぱりアドアセリハでなくてはこかませよね」

「はは、照れるじやないか」

「もうだな、見直したぜ、別の国の魔王として応援してやるよ」

しかしカイリは少し後ろを見ていた。

それが気になつたのかブライドは何かを言おうとしたが、肩を掴んで、にっこり笑いなせるのは我等が魔王…。

「ブライド、にっこりしゃー…」

「あはは、お断りします」

「来なセー…」

しばらぐして『あれ~』とブライドの声が聞こえたが、気にする」となくカイリは答えた。

「でも、いい加減にしておけよ。一応、血族なんだから」

「あら、私はこれでもブライドはしつかつと誠意をしてこぬつむつよ」

「今まで、見てましたけどいい飛び道具にしてるじゃないですか

か?」

「あら、失礼ね。

じゃあ、ブリードのどの辺が評価できるか言えぱいの?」

雨避け代わりに自分の周りに展開していた、魔力の幕をさりに広げ、雨漏りを防ぐとセリカは考えることなく答えた。

「ブリードって、不思議と顔が広いのよ。

「の前、ほかの国の魔王がやつてきたんだけど、普通に挨拶してたくらいね。

シユロだって、初対面のモンスターが挨拶してた所見たことがあるでしょ?」

そう言われてみれば、思い当たる節があつたので、ちやんと見ているのだなと関心しよつと思つた、そのときである。

カイリが袖を引っ張つて耳打ちをした。

「ブリードはセリカに、毎度、毎度、知らない奴がいないくらい吹つ飛ばされているだけだよ。

それこそ恒例行事並みにな

当然、セリカは『何?』と聞いてきたが、何でもないですと答えたが、ただ思つたのは、この力関係は一生代わることがないだろうとこう事であった。



## 第十七話 営業時間終わつの二人

エリは、もう何件目になつたであらうかシユロの『ワナ屋』、もう営業時間も過ぎ、店内は『新製品、考案会議』とホワイトボードに大きく書いており、ブランドとダロタとで会議が行われていた。

そして、ブランドがどのようなワナが作れるのか本を読んでいると、良い案を思いついたようにシユロに見せながら答えた。

「なあ、シユロ、この踏むとスキップ出来ない、この『スタッフロールの罠』なんてのはどうだ？」

「どんなワナですか？」

「うむ、本を読む限りだと…。

踏むとその通りスタッフロールが流れ、スキップ出来ない事でプレイヤーを疲弊させます。

なお、このスタッフロールは本エンディングにも適用されるので、プレイヤーを更なる疲労感を襲わせる事が出来るそうだ」

「ブランドさん、冒険者を攻撃しないと駄目でしょう」

「そうか、さすがにクソゲーになるのは避けたいな。じゃあ、次はダロタだな」

そう言って、ワケのわからない会話を織り交ぜつつ、今度はダロタに本を手渡すが、このオークもオークらしく、変なモノを引き当

てる。

「足を踏み入れると大量の敵が現れるモンスター・ハウスがあるなら、いんのはどうだか？」

「ダロタ、これはただの牢屋じゃないですか？」

「その中に、レベルの違うモンスターを入れておくだべ。

当然攻撃する事もされる事がないだが、冒険者がその階のどこにあるスイッチを踏むと牢屋から解放されて、そのモンスターに追つかけまわされるといつ黒はどうだべ？」

「なるほど、これなら着実に歩みを進めていく冒険者の足並みを崩せるというモノだな。

しかし、ダロタ、それには少し問題があるな。

まず、レベルの違うモンスターとあるが、誰に頼むつもりだ？」

考え込む三人の中に、ある一人の魔王の顔が思い浮かんだが…。

「…それはないわな」

「ま、魔王ですかね、国務とかある事ですから、やめときましょ」

あるレッジドリフトンの事も思い浮かべたりもしたが、あれはやりすぎるとこう、ある意味さつきの「名との共通項があつたので、さすがに冒険者が近寄るのを禁止になるのはさすがに不味かろうとこ

Gとなつていた。

「そろそろ、おやつの時間だべ」

そして、この会議の『結局、決まらない』という、いつもの光景に戻ろうとした時、ノックが響いた。

「はい？」

「シユロ、久しぶりだな」

見ると魔剣士のファウルだった。

「今日は珍しいのが手に入つたけど、俺のところじや置けないから、お前の店にでも置かせてもらおうかと思ってたのだが、会議とは意外と真面目にやつてるのだな？」

「意外つて、失礼ですね。

ですけど確かに、決まらないのは相変わらずですね

「まあ、新作と大怪我は隣り合わせだから、慎重になつて当然だ  
るわ。

…で『新製品、考案会議』ねえ

「ファウルさん、何がありますか？」

「おいおい、部外者も何か言つていいのか？」

最初は遠慮しきみだつたファウルだが、会議に混ざり話を進める  
ファウルはようやく、意見をするようになった。

## 第十七話 営業時間終わりの二人 その2

「シユロ、わざわざ新しいワナを考えるのではなく、モンスターに技を覚えさせるといつのはどうだらうか？」

例えば水棲族が多くいるダンジョンには、水辺の通路が目立つだらう？

そこでだ、こんな技を覚えさせて見てはどうだ？」

そういうて、ファウルは外に案内して、そこの近くにあるチャンバラ用の一本の木刀を取り出して『身構えてみろ』とシユロに差し出してきたので、受け取つて身構える…その瞬間である。

「あつ」

間合いを詰め『コツン』と木刀同士が触れ合つた瞬間、自分持つていた木刀は、あつという間に頭上高く舞い上がる。

そして、数秒後にはファウルが受け止めるであらう木刀を差しながら答えた。

『『刃崩し』というのだがな、この技を覚えさせて、冒険者の武器を跳ね飛ばして、水の中に落とす敵といつのを作つてみたらどうだ。』

水の中なら、攻撃される可能性の低さを利用して攻撃する水棲族の特徴を利用した。改良攻撃手段だ』

「すいませんがファウルさん、それはもう出した提案なのですが、後々無理だと結論がすでにでてしましてね」

「なんだと、結構いい案を出したと思ったのだが?」

「まあ、大変、言い難いのですが、そもそもこの『刃崩し』でしたつけ?」

『この技を装備を飛ばす敵がいるとブラッドさんに紹介してもらつて、その技を繰り出すモンスターに

『この技をするには、見上げる形になつている水棲族には難しいのでは?』

と云われたので実際、『いやつら…』

ダロタと木箱をある程度つんで、今度はブラッドがそれに乗つて構えるとファウルが気づいたように云つた。

「なるほど『間合』か…」

「そりなんですよ、当然、槍とかでその差を埋まるモノだと思いますが…」

「今度は…」

「まだ、問題があるのか?」

「水に住まうモンスターの水棲族って、下半身が泳ぐのに特化してまして、地上でそれを行うのは不可能らしこといいうのが判明しま

してね

「なるほど、根本的に無理だったという事か」

「それで最終的には、いつやってます箱を片付けて……」

「ふむ、ブラドが足元近くなったな」

「それを、ダロタが持ち上げて……」

ポイッ。

元々、空を飛べるブラドが着地したといひで、振り返つて答えた。

「こんな感じでオークが、冒険者を水の中に放り投げるところに至ったのですが、オークは水場が嫌いらしいので……」

「駄目だったというわけか、といひより、まず箱ごと、ヴァンパイアを持ち上げた、ダロタをすくこと思え。

しかしながら、シユロ。

「はい、何でじょうか?」

「さつき、オークは水場が嫌いだと言つていたが、前にダロタがモリを持って魚をとつて、いたトコロを見たことがあるぞ?」

「ああ、ダロタは基本的に好奇心旺盛ですから、昔、ブラドさんには頼んで、鉄巨人で作ったダイバースーツを着込んで潜つていたうちには潜れるよつになつたそうですよ」

そんな調子でダロタに田をやると『ぶしゅつ』と鼻から空気を出しながら、ガツッポーズしていた。

## 第十七話 営業時間終わつの二人 その3

「じゃあ、シユロよ。

「の踏むと、持ち物が消えるワナといひのはどうだ？

これは凄いな、持ち物が無かつた場合、突然メモリーカードをチエックし始めて他のセーブデータを消し始めるらしい」

「ウイルスじゃないですか」

これを最後に提案が出なくなつたので、ソリで今回の会議はやめる事にして、ダロタと外に出た。

「よし

そして先ほどの木刀を『ぶんつ』と振り下ろし、それをダロタが受け止めて反撃する。

『ぶん、ぶん』と一撃は空振り、一つはシユロの身体に当たる様にスイングするが、それをシユロは空振りせりふて避けた『ゆづくり』と突きを放つ。

当然、それを避けるダロタ……。

そして、むき出しになつた頭をシユロは。

「ほつ……」

さりに差し出し『ポコリ』と一撃を食らい、ダロタと笑いあっていふとファウルはため息混じりに聞いてきた。

「緊張感ないな…。

「そういえば、シユロよ、魔力の方はどうなんだ?」

「魔力ですか?」

「いつもお前は魔導の壺を利用してワナを作っているから、今現在のお前自身の魔力はどれくらいあるのかと思つてな」

「そういわれてみれば、シユロよ、魔導の壺を通して魔力を消費しているとはい、そろそろ魔法の一つは出来るのではないか?」

そう言いながら、ブラドは木の杭を取り出し、それに布を巻きつけて縛つて。

「まあ、やつてみる」

地面に杭を突き刺して、そういうの半分緊張しながら放つその魔法。

「へへへ…」

その結果はヴァンパイアと魔剣士を笑わせていた。

「…失礼ですよ、出来たじやないですか?」

「そ、そしだがな、フア、ファウル、何だ、ありや、火の玉がバ

「うん」としてつたぞ？」

「あれほど軌道の読みずらい火の玉つてのも珍しいな」

「どうやら魔力の使い方である順序を違えるとそんなるらしく、自分の三回放つた火の玉は、どんなにやつても地面に着弾して、さらにランダムに跳ねて目標にあたつていった。」

その際『火の玉』が目標に当たつたわけではなく、地面を跳ねる「」とで火も消えかけ『芯』が見えたところで目標に当たるのだから笑いのネタになるのは言つまでもなかつた。

「あの火の玉つて芯があつたんだな」

「ブリヂさん、いい加減笑うのはやめてくださいよ。どうにかして治りませんか？」

「治すつて言つてもな、あまり、初めて魔力を消費してるヤツにはあまりおすすめとかしたくないが…」

うーん。

「じゃあ、詠唱をしてみればどうだ？」

「詠唱つて、あのよく物語に出てくる魔法使いが『ぶつぶつ』つてするアレですか？」

「そんなの読んだ事ないですし、いまいち信じられませんよ？」

「じゃあ、見本を見せればいいのだな？」

そう呟つてファウルが前に出て『離れていろ』と叫われたので、離れていたのだが…。

「もう少し離れる」

せりに離れるところのうので、ファウルは静かに田を睨り詠唱を始めた。

「この世は、お金で出来ている。

・時には銅、時には紙…。

そして、睨つていた田が開かれて目標に向けて剣を振りぬいていた。

剣自体、詠唱中、あつたのか、手にしていたのかもわからない。その放たれた一閃は見事に目標を切り捨てていた。

「ブリードせん…」

「…なんだ?」

しかし、これだけははつきりした。

「！」までの威力はほしくないです」

「うん、打倒だな」

ファウルの放った一撃は後ろにある店の屋根をも切り落としてい

た。

ホウキを両手に振り下ろせんと身構え、蛇と対峙するダロタ…。

…を尻日に、屋根を補修を手伝つてゐるファウルは顔をしかめていた。

「しかし、せつかく魔界に來てゐるのだから、技くらい覚えてみたらどうだ？」

『千手觀音』『阿修羅』『黃龍』、といった神の名を冠する技くらい出来れば人、いや、國に自慢できるぞ？」

「ファウルさん、一介の村人がそんな事が出来ると思ひますか？」

「ふむ、なら、レベルを下げて『アレクサンダー』『カメハメハ』『靈銃』<sup>レガン</sup>と言つた、王の名を冠する技を覚えるトロロから始めてみるか？」

「ブラドさん、最後のヤツは、何かが間違つてゐるような気がしますが氣のせいですかね？」

「氣のせいだ」

そして、ブラドは切り崩された屋根の一角をロープで引っ張りあげるといつたモンスターらしい一面を見せながら、何かに気づいたように呟つた。

「おお、そういえば、ファウルよ。

お前の持つてきた、置かせてほしい商品とはなんなのだ？」

釘を打ちつけながら柱をくつつけようとはするのは、モンスターらしさのかけらもないのだが、その内の一人、ファウルは答えた。

「ああ、ワナだから、置かせてもらおうと思つたまま、机の上にあいたままだつた」

「危ないな」

「心配するな、爆発するようなワナではない……どうした、二人とも？」

するとそこには確かに何かしらのワナがあつたのだが、ファウルが気になつたのは、二人がニヤニヤとしていた事だった。

「……爆発しない罠がここにある」

「じゃあ、ブラドさん、行つてまいります」

「一体、何をするつもりだ？」

今から何をするのかがわからないファウルを尻目に、ブラドはストップウォッチを片手に握つてシユロと田配せしたまま……。

「ただいまのダロタ君の記録、3分12秒」

戦いを終えたダロタは『押したら駄目』と書かれた紙に『ぶひつ』と息を吹きかけて、ファウルの罠に見事に引っかかっていた。

「回じ文面での戦いでしたが、残念ながら、ブリヂさんとの2分の壁は破れませんでしたね」

「へへ、じひかとじひは早く王座を譲りたいのだがな…どうした、ダロタ？」

「」の眼は故障しているべ？」

『ぶにゅ』ともう一度、スイッチを押して見せたのでホントに動かないのか。

「なんだ、つまらん、ファウルよ。壊れた商品を持つてくるな」しかし、ファウルは顔をしかめはするものの、周囲を見回したまま普通に答えた。

「いや、作動していると思ひつただがな…。

「プラズ、空間が固定されだしたのを感じないか？」

「そうこわれて見れば、そうだな…」

「な、なんだか身体が動かなくなりましたが…、ファウルさん、だ、大丈夫なんですか…？」

「心配するな、怪我をするよつたなワナではない」

「じゃあ、ファウルよ、一体なんのワナなのだ？」

「ああ…」

不思議のダンジョンというお仕事

第十七話 営業時間終わりの二人

監督・編集

高速左フック

出演

シユロ

ブランド

ダロタ

ファウル

音楽・協力

特になし

完

…。

「うわああああーー！」

ファウル、貴様、なんつーモンをーー！」

「珍しいだらけ、『スタッフホールの罠』だそうだ」

「ファウルさん、それは先ほどの会議でも「出した」とこいつよ、いない時でしたね」

「まつたく、『氣をつけてほし』モノだ、スタッフホールなんか流すと最終回だと誤解する読者もいるのだぞ？」

「ブリードさん、何を……？」

『『言つていいですか？』』と言つ途中で、また身体が動かなくなつていたので、ファウルは『氣づいたように』言つた。

「そういうえば、ダロタが『もつと一度』押していたからな……」

「ダロター……」

不思議のダンジョンとこづお仕事

第十七話 営業時間終わつの二人

監督・編集

高速左フック

出演

ショウ  
ブラン

ダロタ

ファウル

音楽・協力  
特になし

Special Thanks

ロー機能

完

……。

「何か増えてるつ！？」

「みんな、すまねえだ」

「いや、知らなかつたのなら、ダロタの性じやないですよ」

「私からも謝るつ、まさか、うつとおしい隈だとは思いもよらなかつたのでな」

「そう言つて……。」

「ぱちぱち……」

「おい、ファウル何をやつていい？」

「大丈夫だ、いくらい何でも二回目はないだろ……」

「ファウルよ、お前は、とても大事な事を忘れている…

作者は…

病み上がりだ

不思議のダンジョンといふお仕事

第十七話 営業時間終わりの三人

監督・編集

高速左フック

出演

シユロ

ブランド

ダロタ

ファウル

音楽・協力

特になし

コピー機能

Special Thanks

完

f  
o  
r

y  
o  
u  
:

## 第十八話 意外な事を忘れていた魔王とショロ

「」は薄暗い部屋だった。

何もない部屋…といつのは、『人がいた部屋』といつ性質上、好ましくないかもしれない。

だが、この部屋には、大きな机に4つの椅子といつ何の変哲もない家具と、その上にある手を大きく広げて掴めば、何とか抱えられそうな機材。

前に来たときはこんな物はなかつたので、どこから持ち込んで来たのだろうかと疑問に思い、突つきもしたが何も起こらない。

結果としてはショロにとつて、わかつてゐる事は、ブラドに今日は何をするのかだけとなつてしまつたので、大人しく席に座り正面を向くとブラドがあり、右側の席に座つていたダロタが頃合いを見計らつてスイッチを押して、ブラドは言つた。

「ブラドヒダロタのオールナイトNANIGASHI!-!-」

手渡されたヘッドホンから軽快な音楽と、それに乗りながら「」は。

「はい、みなさま、いかがお過い」しだつたでしょつか、まさか、一回田があるとは誰も思わないでしょつ。

ですが、私達、基本しづといですから、まさかの一回田です。

それで今回、ゲストを呼ぼうと思いまして来てます。

ええと、私の働かせてもらっているワナ屋の店長、ショロです  
「どうも、始めてまして、3人しかいない室内ですから、拍手  
が薄いですね？」

「まあ、そこは気にしないでやつた方がいいのだろう。

これで爆発オチも夢オチもなくなつたわけだからな……」

「何か言いましたか？」

「これで進行が、楽になつたという事だ。ダロタは、音響とかや  
らないと駄目らしいからな。

というワケでよろしくお願いします。

では、早速、お便りの方からいってみましょ。う。

ペンネーム、地上のモンスター、ボブさんからいただきました。

こんばんわ、私は地上のデパートの地下で出稼ぎに出ているモン  
スターですが、ただいま、その私の働いているデパートが売店が大  
変な事になつております。

支配人曰く、今、流行の『フケーキ』らしい、このまま行くと閉  
店の危機だそうです。

打開策としては、アニメを題材にした商品を今後の戦略するという方針らしいのですが、その支配人が普段からアニメを見る機会がないため、自分から見てもあまり利益効果がないように感じられます。

「そこでいつもアニメを見ているプロダさん」、何かいい提案はないでしょうか？

「…といつ事で、珍しく、まともなお便りだな」

「あ、これが、今後使われる、デザインですかね？」

「なるほど、包装紙にもアニメのキャラクターをね…」。

「…といつよつ、サンプルでも持つてきていきののか？」

「そんな事よつ、何か意見あればとこつ話ですよ~」。

「う~ん、悪いが、まあ無理だらうな。思ひほど利益を上げられんだろ」

「はつきつ、言こましたね？」

「いや、実際、ここにアニメのキャラを書く」と金儲けが出来たつて話など聞いた事がないからな…」

「じゃあ、どうすれば？」

「そもそも商品などに頼らひこするのが駄目だと思つた」

「でも、商品を売らないと店は利益が得られないワケでしょう?」

「だからだ、だから、いつその事、その『デパート』というのか?」

その建物、そのモノを利用してしまえばいい

「どういった事でしょうか?」

「いや、昔、見た映画でな。怪獣が建物を破壊して、その建物が有名になつた点に着目したのだが。

『聖地巡礼』という言葉があるので、それを利用してだ、アニメの中で主人公がよく買い物に行く場所、その風景を、『デパート』とやらがモチーフになればいいという事だ」

「そんなにうまくいきますかね?」

「ふつ、シユロよ。アニメを馬鹿にしてはならんよ。

もし、人気の高いアニメでしかも恋愛モノだとしよ。

公園のベンチでキスシーンなんかした場所が実際にあつてみる、『聖地』になる時代だ。

他の国の人間が真似をする事、間違いなしだぞ?」

「海外の人ですか!?」

「OTAKUが辞書にも載つてない』時世だからな、何もそこには住んでいる人間をターゲットにする理由など、どこにもないだろ?」

それに地下「デパ」などの光景を、地下鉄に変えたりすれば、いろいろとバリエーションがあつて面白いだろ？

意外ともうすでにやつてゐる企業とかあつたりしたりしてな。

まあいい。

次のお便りに書つてみますか…」

## 第十八話 意外な事を忘れていた魔王ヒシュロ その2

「ペニーネーム、隣国のお姫様の『ヒーレムさん』からいただきました。

いつもカイリ様がお世話をなっています、カイリ様があなた方の店へ足を運ぶという事が私たちの国の平穏の時間となって、感謝ばかりしております。

さて、今回、私達の城に宅配に来た際にも氣になつた事がありましたので、お便りさせていただきました。

…ありがとうございます。

ええと、人間が魔界で商売をやつているという事は、毎回、話のネタになるのですが、そこで一つ気になつたのです。

シユロという人間が店長を勤めているという事はわかります。

そして、ヴァンパイアとオーラークが仲良く働いているというのも知っています、ですが、店の名前は何というのか、未だにわからないので、この際、教えてください。

という事ですが…あれ、決まってなかつたか?」

そういうて、ブラドは収録中にも関わらず外へのドアを開けようとしました。

その時である。

「あら、『ラド、私の許可なく、何また勝手をしてるの?』

「セ、セリカ様! ?」

「お前よ、前回、俺ら登場がなかつたからつて、少し、自由にやらすぎじゃねえのか?」

「人の魔王の鋭い一撃が決まり…。

「…突然ですがつて、まあ、この放送をお聞きしていた人は何が起きたか想像ついた事でしきうが、お時間とさせていただきます。

…はい、それでは、また次の機会にお会いいたしましょう」

「やうきりやがつた…」

「み、見上げた根性ね…」

ミーラフ男と化したヴァンパイアは、自らの使命をまつとつして力尽きた。

「でもよ、わつきの事じやねえけどよ。決まつてなかつたのか?」

『えつほ、えつほ』と機材を片付けるダロタを見ていると、カイリは中に戻つて来て確認していたのだろう。

先ほど『ラドの席に行儀悪く座り、ひっくり返つてなかつた『商い中』看板をテコピンの空振りで返して聞いてきた。

「後回しにしていたという訳ではないのですが…

「あら、今までそれでよく商売が成り立っていたわね」

つい、その魔王を見た。

確かに、お店という建物は名前が無いといつ事はどんな店なのかわからないため、商いという行為に致命的である。

しかし、よく思い出してほしい。

この魔王とあの魔王に、何回、家屋が吹きとばされた事か…。

週一での商売ではあるが、よくももつて3回田で解体する家屋なのだ。

いままで何回、引越しをした事だらう…。

だが、それが思わず効果も生み出していた。

どうも生き物といつものは、引っ越しして来るのが気になる感じ。

『いじでじんな商売を、するのかね?』といつ質問があるならば、日常的な接客で引越しをやつているモンスターは自分達との何の関係はないが答えなければならぬだろう。

『ああ、ワナを作つて売る店だ、ほら、あの噂の人間のやつてる…』などと…。

旅芸人は舞台設計も宣伝だといつ。まさにその心境である。

おかげで、名前を決めるのは後回しになってしまったのは書つまでも無い。

## 第十八話 意外な事を忘れていた魔王とショロ セの3

「でもよ、確かにこつまでも『あれ、これ』で呼ばれるのは、よくないわな。今日決めちまつたらどうだよ?」

「名前ですか…」

「そうね、この際ショロに決めてもらいましょう」

「そつは言いますけど…結構難しいですね」

「確かにあまつ氣負いすぎなんって言つても、厳しいわな」

「カイリさん、何か良い方法はありませんかね?」

「じゃあ、基本的な方法でやってみるか、特産物やモンスターの住処を見てさ。

ヤシの実とれるからヤシの村とか、ドラゴンが住むから龍の住処とかさ」

「じゃあ、この特産物って何ですか?」

「「」は確かに…オークギターだな」

そういうえば、ダロタがウクレレを片手に意氣揚々と下手くそに引あまくつていた事があった。

今にしてみれば雑音ではあったが、そんな理由があったのかと思  
いながら、名前を考えてみた。

「オーラギター、オーラ、ギター、ギター……」

「シユロ、少なくとも、『』は楽器屋じゃないでしょ？』

「じゃあ、特産…モンスターは？」

「特産モンスターって何よ？」

「ええと、ああ……」

「確か…ああ…貧乏神だつたな？」

「じつも、貧乏神です」

「いつの間にや、貧乏神なのだつて、それは自分たちの中心に現  
れた。

「貧乏神って言つても、人間達が勝手に神様つて呼んでるだけだ  
から、そつ呼ばれているだけでするので気にしないでください。

「へへ」

「可愛くねえ……」

「ちよつと、連れてこないでよ……」

「勝手に入り込んできたんだよ、でもセリカよ……」

そんなに怖がらなくてもいいんじゃねえのか？」

「私のビームが怖がつていいってことなのよ？」

しかし、セリカは両手を広げて明らかに消し飛ばそうとしているのだから、カイリの見解はビーム見ても正しかった。

「あのセリカさん、この名のない店を吹き飛ばす氣ですか？」

「シユロ、私はこれに大変な目にあつているのよ…。

ただ席を割り込みしただけなのに、ブラドが取付かれて…」

「ビーム、ブラドさんが？」

「それは私が盾にしたからよ」

どつやうじの魔王の装備項目『盾』には『ブリヂ』と記されてい るようだ。

だが聞くところによると、それが原因でセリカの国は一時期、大 貧困に襲われたらしく。

その呪いから逃れるために、セリカはブラドを放浪の旅に行けと 命じたらしく…。

「セリカさん、原因作つておいて、ひどくないですか？」

「あら、私は魔王よ？」

「関係ありませんよ。

ですけど、今までブラドさんって、人間の自分が見ても金運が悪いじゃないですか？」

「この事は、まだ……」

「ああ、心配なく、元々彼は、金運が無かったのですよ」

貧乏神にして、ひどい言われようである。

## 第十八話 意外な事を忘れていた魔王ヒシコロ その4

「で、じつして貧乏神さんが！」ヒコロヘ。

「ブリヂさん、つて、貧乏の世界では有名ですから、一応拝みにやつしておたのですよ。

いやー、それがこわいの貧乏神の世界も不景氣ですね

「『貧乏神の不景気』という事は、今は景気がいいといつ事なですか？」

「いやいや、何といつか…。

何も『お金がない』というのが、私達の『景気』に関わる事ではありませんので…」

じゃあ、じつこいつ事か聞きづらかったが、カイリは答えた。

「ま、まあ、貧乏神に拝まれるつてんだから、よほどの金運なんだろうな。

だけどよ、ビンボ。

人ん家に勝手に上がり込んだじゃいけねえだろ？」

勝手に名づけられ『出でけ、出でけ』と言われたが、相手が魔王のためか大して氣にもせぬ、貧乏神はお札の束を差し出した。

「何だ、『レ?』」

「これに名前を書いて、炎や火に投げ込んでください。」

それで燃えてなくなるのは、不吉な名前でして、逆に残れば運気を呼び込む名前であるとこりお札でして…」

「いいの、貧乏神がそんなの渡しても?」

「いえいえ、不景氣ですからね。」

仲間内でも地上の『政治家』という人間にとつていてるやうなんですが、おかしい事にどうも景氣がよくならなくて…」

「無駄にお金を使いすぎで、余計、不景氣になるのでは?」

政治家のお金のムダ使いは不景氣の一因ですよ?」

「あ?」

「『あ?』じゃないですよ…、今さら気付いたのですか?」

「なるほど、いい勉強させていただきました。」

やはり誠実に一般のかたに憑りついて頑張るほうが良さそうですね

もしかして、自分はとんでもない事を言ってしまったのだらうか?

「「」それで地上には、不幸な人が増えるわね…」

「ああ、間違いねえな…」

魔王の冷やかしが、冷やかしに聞こえなかった。

「やはつ」のお札を差し上げて正解のよつですね…

「おつ、帰るのか?」

「ええ、今日は『ブリヂさんを拝めただけでもいいとします…』

やつ書いたわ」と帰つていつた。

「おれね、どつするシロ口、使ってみるか?」

カイリが聞く中、セリカは早速お札に『ブリヂ』と名前を書き、火をつけた。

すると、勢い良く燃え上がつたので、何か理解したよつと言つ。

「どつも呪殺をするお札じゃなよつね」

相変わらず、失礼な事をしていたセリカではあつたが、とりあえずみんなで使ってみる事にしてみた。

## 第十八話 意外な事を忘れていた魔王とシユロ 完結編

「シユロ、何だ、この小さな…焚き火？」

「」うやつて灰皿で作ったのですが、これに名前を書いたお札をくべてください」

「へへ、いい子は真似すんなつてヤツだな。

面白やつじやねえか、とりあえず…」

ホントは魔王が本気出せば、あのお札でも簡単に燃やせそうだつたので、それを防ぐためではあつたが、カイリは面白げに『とりや』と投げ入れるので、勢い良く炎があがりはするがそのまま空中で綺麗になくなるので。

「あら、不採用ね」

セリカにも好評だつた。

「けつ、だつたら、そんなセリカはどうなんだよ？」

「あら、私？」

そういうえば前に『オークライダー』と名づけたネーミングセンスがあつたのを思い出したので、自分も少しばかり期待してセリカを見る。しかし彼女は一向にペンを走らせようとしなかつた。

「『え』うじたのですか？」

「…見られる結構、緊張するわね」

少し時間をくれと『う』じだらう。

「…何だよ、その纖細や。」

まあいいや、シロロは『う』じたのか？

「えつ、私もやるのですか？」

「当然じやねえか、お前は店長なんだから」

そう言われ、札とペンを渡された自分は『う』じて考へた後、考へ付いたのは。

「『『村のワナ屋さん』ね』

「すいません、在り来たりで…」

「いや、ベーシックこそ基本だよ。とりあえず今は数が基本なんだ、放り込んでみろよ」

カイリの『え』うじ事も最もな事もあり、言われた通りに放り込んだのだが…。

「燃えたわね」

「まあ、しゃあねえよ。今は、数が基本だ。」

セリカも見てねえで手伝えよ

「私に命令しないでよ

そう言つてしばらく、三人で名前を書き続けた。

シユロはベーシックに、セリカもベーシックに、カイリは自己中心的に…。

「おい、セリカ、どうして普通に考えんだよ?」

「カイリだつて、何よ、そのセンス?」

ちなみにセリカの書いたのは『魔王の休憩所』という。

あながち間違つてなくて、何か意見があるかと聞かれれば言い返しも出来ず少し困つたが、先にカイリの考えた名前が目に付いたらしい。

「別にいいじゃねえか、こういうのは誰かの名前が入つてれば興味を引くんだよ」

『魔王カイリも驚いた 激安のワナ屋』

何か古いキャッチコピーをつけたような名前に仕上がつていたが、一人とも渾身の出来だったのか。

「じゃあ、公平に行きましょ」

ダロタを呼びつけ、札を火にくべるよつとしてダロタの手から一枚の札が投げ入れられた。

自分は正直、あの二つの店名が採用されるのは、嫌だつたので心中で祈る。

「これも駄目なの？」

二人とも少し不機嫌にはなるが公平に行つたためか、再度、名前を考えていた。

ちなみに少し考えてみたのだが…。

『魔王力カイリも驚いた 激安のワナ屋 魔王の休憩所』

「あら、シユロ何か考え付いたの？」

これは心の中にしまつておこなつと思つた。

…その時である。

『ガターンッ』といづ音と共にダロタが椅子から落ちた。

「おいおい大丈夫か？」

怪我がないようだが、一応の確認するよつにカイリは心配をする。ダロタは『んだ』と返答して数枚、落ちたお札を拾う。

「ああ、こりや駄目だな」

お札を見たカイリは、それを炎の中に投げ入れた。

「落ちた反動とこぼれたインクでダロタの手形がくつきつてたから、燃やすしかねえだろ?」

そう言われ、ダロタも自分の手のひらに付いたインクで真っ黒になつた自分の手の平に気づくが、先にセリカに言われた。

「やつさて、シャワー浴びてきなさい」

ぐすくすと笑う中、カイリはあぐびをして札を整えながら言つた。

「しつかし、なかなか決まらねえモンだな」

飽きたのだろうか、白紙の札を丸めて、火の中に放り込む。当然、テーブルに着く前に燃え上がり、続けて放り込む。

「ちょっと、勿体無いじゃないの」

セリカの静止を普段は聞かないカイリ、しかし、カイリは珍しく手が止まり札すらもセリカに手渡した。

そして、そのまま炎の中に手を近づける。

「カイリさん、危ないで…」

自分は途中で何かに気づき、カイリが炎の中に手を突っ込むのを見ていた。

何故なら、その札は燃えていなかつたのだから…

そして、おもむろにカイリは丸めた札を広げる。

するとそこには、見事にくつ毛りとした…。

ダロタの手形があつた。

それを見た三人は、一斉に言った。

「この話はなかつた事にしよう」

店の名前、未だに決まらず…。

## 第十九話 魔王の噂になる魔王 その1

「信じられないわ……」

冒頭より不機嫌なセリカは、そのままブラッドに命令した。

「ブラッド、今から即死魔法を唱えられるモンスターを呼んできなさい……！」

ワケがわからぬままブラッドは、理由を聞いたとするが、不機嫌な魔王に逆らってはならないのは伝承通りと言つても過言ではないだろ？

一時間もしない内に、三十名以上の魔法に精通してそうなモンスターが店の前にやってきた。

「お呼びでしょうか、セリカ様？」

「堅苦しい挨拶はいいわ」

そう言つて、セリカは自分の本題を言つた。

「私に即死魔法を唱えてちょうだい」

集まつたモンスターが困惑しながら全員自分を見たが当然、自分もワケがわからないので首を振つていると。

ドンッ！！

「早くしなやこ」

冷静に地面をめり込むくらいに踏みつけるので、せりかと一緒に並んでセリカに魔法を唱えていくのであったのだが、ここでも気に入る事がある。

「ですが、セリカさんには効かないのでは？」

状況を見守るしかない自分達は、もう何人目になるだろうか頭の良さそうなモンスターの即死魔法を吸収する魔王の姿をみてブラドンは答える。

「おいおいラスボスにそんなのが効いたら、RPGとして成立しないだろ？」「

「えっ、なんですか？」

一応の用心として耳栓をしていたので、詳しく聞こえなかつたが、ブラドの指摘通り、自分達がダロタの大きな鼻に余つた栓を詰めて、どこまでも飛ばせるか試しているとセリカは気が済んだのか。

「もういいわ、帰りなさい」

そう言つ頃には、自分にもセリカが何をしたいのか何となくわかつた感じがしたので聞いてみた。

「死にたいのですか？」

「違うわよ。

誤解を受けるじゃない、ちょっと試して見ただけよ。

ねえ、シユロ、一つ聞かたいのだけど、いい?」

「私は死にたくありませんよ?」

「だから、違うわよ。

さつきの魔法つて、私に、いや、魔王に効いてこると悪いつへ。」

当然、セリカは生きているのでいつも答えた。

「まあ、効いてませんよ」

「そうよね、そうよねーー?」

先に言つておひや。

「まさか、それで死んだ魔王がいたのですか?」

この質問は先ほどの返答でテンションの上がったセリカに対し[冗談混じりで言つた事だ]。

「……」

じつとつと睨みつけなさる魔王がそこにいた。

「眞ひじやくけど、カイリが相手をしたのよ……」

誰が相手をしようつと関係のない話だらうが、セリカにとつて重要

なのかもしないので黙つて聞く所。

カイリの城にいつものように冷やかしに行つた時、その魔王も攻めて来た…というより、喧嘩を売つてきたのである。

「の表現を使う理由には、三つある。

まずカイリは自ら攻めて戦争を起こすような魔王ではないので、それほど恨まれる魔王ではないという事。もう一つは、自分より弱いヤツは基本的に相手をしない魔王であり、強い魔王から認められているという事だ。

今回は後者が重要な理由が大きく占めていたのだが、この身の程を知らぬ魔王は『挑発』を仕掛けた。

これが最後の理由である。

「うなるとカイリは止められない。

「てめえこそ、ウロコがあるくせに『翼』じゃなくて『羽』飛んでんじゃねえ、龍のかムシなのがどっちなのかはつきりしろよ?」

その際である。

カイリは『みつともねえんだよ』と、効くはずのない即死魔法を唱え、その魔王に放り投げたのである。

「そ、それで、まさか?」

「ようやく事の重大さがわかったようね。

私も驚いたわよ……」

## 第十九話 魔王の噂になる魔王 その2

さすがにその後、何であれ魔王が倒されたというワケで、他の魔王たちの開いた会合にカイリ、そしてセリカが出向いたワケなのだが…。

「わすがカイリというワケか…、あの魔王シドは強さを誇示するクセがある愚かさが招いた結末とはいえ、あれで相応しい最後だつたのかも知れぬな」

「して、聞いてみてもいいか、どんな最後かを」

「いや…その…」

カイリは言い難そうに頭を搔くのが、その倒した戦法を隠しているのと間違えたのか、まだこの影に潜んだ魔王たちは気づいていないのだろう。

「別に隠したとこりど、どういふんとこりうのかね？」

「そりゃ、そうだけどよ…」

カイリはじつと集まつた、机を囲んで座つてゐる魔王の面々を見回した。

その中にはセリカもいたのだが、『まあ、仕方ないのじゃないの?』と顔が曇つてゐたので、自分と同じような表情をしてゐるのだろうかと思えてならなかつたが言つしかないのだろう。

「即死魔法を唱えたら、一撃で…」

「何だつて？」

「だから、即死魔法を唱えたら一撃で倒せた

『きょとん』

この場の空気の音を表現すれば、これが最も相応しいだろう。さすがに他の魔王がこう聞いてきた。

「ふざけているのか？」

「ふざけてねえよ」

カイリは、その魔王に例を見せるように同じ魔法を唱えた。

当然、今度は眼前でかき消える、この事が余計にふざけていると思われたのか、殺氣を含ませた視線がカイリを襲つた。

普通の視線ではない、普通の人間やそこいらのモンスターは死に至るほどの視線。しかし、そんな視線を物ともせずカイリはどう言えば、信じてもらえるか困つていた。

そんな中を助けたのはセリカだった。

「悪いけど、立会人として言わせてもらひうけど、カイリの言つている事は本当よ」

戦いの場に立会っていた人物がこう答えるのだ普通なら信じるだらうが…。

「なんという事だ…」

「ラスボスとしてどうよ」

まるでどこかで聞いたようなざわめきが起こつたが、一人の魔王が空いた席を見て『何か』に気付いたように言つた。

「魔王シドつて、もしかして魔王じやないのでは?」

「馬鹿な、あの魔力の高さはありえんだろ?」

「赤龍王 レクターのように強い魔力を持っていて、なおかつ何百年も生きて原型が解らなくなつたモンスターとでもいいたいのか?」

さらにざわめき出し、『何だと私を疑うのか、いいだろ?即死魔法を掛けてみるがいい』と最後には即死魔法の掛け合いが起つた。としたので、セリカはカイリに言つた。

「私、帰るから、後はよろしくね」

「おいおい、ほつといて帰んなよ」

「あら、元はといえばカイリ、貴女が原因じやない。そのままじや、魔王の品格が問われるわ、貴女が始末しなさい」

そう言つて、飛んで来た死の魔法の欠片を払いのけ、セリカは飛

び去ったのだが、彼女も内心納得できなかつたのだろう。

帰る内にイライラして、先ほどに至つたのであつた。

「ああ、面倒くさかつた！！」

そして、カイリも空から落下に近い速度で降りてきた。

## 第十九話 魔王の噂になる魔王 やのう

そりして落ち着いたカイリがおやつのスナックを口に放り込んだので、思い出よつに聞いてみた。

「そりこえ、物語や本などで出てくる魔王つて、どうしてその即死魔法を勇者相手に唱えないのじょうかね？」

「そりやあ、話を面白くするため…と言つたけどよ。

これには少しワケがあつてな…。

シロロ、ビリヒ魔王は地上を自分の物にしようとやつて来ると思つ?」

「それは…」

『魔界を支配するだけでは、物足りなくなつた』とよく聞いたりした物語の定説を言おうと思つたのだが、改めて一人を見た。

一人は魔王なのだ。

「あれ、どうしてでしょうね?」

そして『魔界は群雄割拠している』と昔、ブラドからも話を聞いたことがあつたせいか、途中で戸惑いながら自分の言つたその台詞に笑いながら答えた。

「結局、魔王と言つても、強いヤツじゃねえとやつてけねえから

な。

だから、弱いヤツが『まずは地上から攻めよ』って考えるのも

「確実に勇者が聞いたら泣くような事を言わないでください。

でも、それじゃあ、即死魔法を使わない理由にはならないでしょ  
う?』

「確かにそうだが本題はそこからなんだ。

当然、その魔王は自分より弱いヤツを相手にするワケだ。

すると段々、相手に對してなめて掛かるようになるのや。

お前から借りた本を例を挙げれば、魔王は勇者に炎を浴びせて  
ただろう?・

普通なら、あんな手間の掛かるような事をしねえよ

「それはカイリさんが言つたように、作者が話を面白くするため  
なので、所詮、『お話』だからじゃないのですか?』

「いや、今でこそ神話やら、物語になくなつてはいるけど、あれは  
ホントにあつた話だぜ」

『そりなんですか!?』

自分の驚く様がよほど一人の魔王にとつて面白いのか、一人とも  
笑いを堪えてカイリは言った。

「『J』あらとしては、どう解釈されているのか、知りたかつただけなんだがな。

実質、これはいい証拠だと思ひぜ。

灼熱の炎で痛ぶつて、最後には仲間の助けが入つて逆転されてるつてトコロも、この魔王が根性のねえ証拠だよ」

「じゃあ、『本場』はどうなんですか?」

「まず開始1コソマで、即死魔法をばら撒く」

「あら、容赦ないのね?」

「うるせえな、これはこの前、お前がモンスターの大群に囲まれたときにやつた事だぜ?」

『つてか、誰でもやる事じゃねえか、オレントコの隣の魔王だつてやつてたぞ?』と、さすが魔王規格、殺傷する数字も天文学的となつていた。

だが、それだけ魔界は広いのだらうと思つてると、カイリは何か思い出した。

「そりいえば即死魔法と言えば、セリカの『強者の波動』だな

「何ですかそれ?」

「魔法で強くなつた敵をいてつくような波動で打ち消すつていう、

オレ達がよくやるワザなんだけど。

セリカの場合は、魔法が掛かってないと無条件で…

手で、首を『くつ』とやるので意味はわかった。

「勝手にあなた達が名付けただけじゃない。

私は装備品で強くなつたと勘違いしているのが、嫌いなだけよ」

「へへ、ういとおじがるなよ。

それを魔王に名付けられているから、お前は十分強い証拠なんじ  
やねえか」

「うるさこわね。確實性がないから私はあんまり嬉しくないだけ  
よ

「アレを耐えるヤツがいるのか、どんなヤツだ！？」

「…ブランドよ、かううじて生きてこたりするの…

「あ、相変わらず、不死身ですね」

## 第十九話 魔王の噂になる魔王 完結編

「まあ魔王が好む武器、剣とか杖とかいろいろありますけど、変わった武器を装備した魔王つているのですかね？」

「変わった武器ねえ…。

「武器とさちよつと違つかも知れねえが、北の魔王のウルファングじゃねえか？」

「また新しい魔王の名前が出たが、セリカは『ウルファング』と言亥いて、合点が言ったのか、

「ああ、確かにアレなら、変わってるわね」

「そんなに変わってるのですか？」

「そうだな、伝説の金属つてヤツで出来た鉄球をこんな感じで…」

『パンツ』と軽く手拍子して何をするのか何となくわからせた上で言った。

「潰して盾にしたり、伸ばして剣にするようなヤツなのさ。

普通の剣で戦うのならどうかって事はねえが、まあオリハルコンだから斬れるのなんの。この前なんか敵がやって来た時に、自分の城ごとぶつた斬つてやがったよ」

「そりゃあ、あのが原因で城を持つのやめたって言つたわね

「攻め込まれた事より、コレクションが壊れた事がショックだつたらしいからな」

「コレクション、何か集めていたのですか？」

「いやー、アイシ陶芸が趣味でや。自分で作った壺やらを、城内で保存してたらしいぜ」

「ですけど、城が壊れたのは色々と不味いのでは？」

「良い所を言つてくれたな。そんなんだよ、おかげで荒れるわ荒れるわ、無法も無法だよ。

まあ北の地なんて寒すぎて誰も住み着こいつ何て思わねえがな」

『ケラケラ』とカイリが笑う中、空中で火の玉が踊り、何かの紋章を作り上げた。

「これがヤツシトの紋章さ」

そう言つて、それが自分にとつて笑う事となつた。

「そんなにおかしいの？」

笑いながら、お菓子の盛つた小皿を、一旦、大皿に移しひっくり返す。

するとセリカも笑い出すなか、コップに入った飲み物を飲み干して。

…ひっくり返す。

「どうりで魔王に関して、詳しい人だと思いましたがまさか、あの人があが魔王だと思いませんでしたよ」

ところでカイリさんつて、弱点つてあるのですか？」

「そういうえば聞いたことないわね、聞きたいわ？」

「んなモン、あるわけねえだろ！？」

ケラケラと明るく笑う中、カイリは店に出て行くとセリカは言った。

「逃げたわね…」

何を呟いたのかわからないが、次の週、ブラドは挨拶もさながら何かを取り替えていた。

「何をしてるのですか？」

「先週ほどかな、カイリが大陸を破壊したそつだ」

そういうて、新しい地図を張り替えていた。

## 第一十話 紅のダロタ その1

「なんだ、あのズンドコダンス？」

最初に気付いたブラドの言ひよつにそれはズンドコだった。

ズンズンドコドコ、ズンズンドコド…

そんなリズムが聞こえてきそつた奇妙な踊りを鏡の前で踊るオーグに、ブラドは聞いてみた。

「ダロタよ。お前は何をやつているのだ？」

『ブヒッ』と鼻息一つしてブラドに本を見せた。

「ブタでも踊れる不思議な踊り…かつこ入門編。

何だ、ダロタ、こんなのを覚えたいのか？」

『んだ』と頷きながら、ダロタは練習を再開するのだが…。

「ダ、ダロタ、しかしながら、それは不思議な踊りじゃないぞ？」

慌てるように静止に入るが、人間の自分から見てもそうだと思えた。

それは魔界で店を開いているからであるが、人形ののようなモンスターが時折見せてくれたからだ。

そこでダロタも考えたのだろう。

冒険者の前に立ちはだかつた時、この踊りを踊る事で魔力を奪う事で攻撃の幅を広げる事を。

このダロタ、意外に勤勉なので、これまた人間ながらに一時的に関心はしたのだが…。

やつぱりブリヂの言つようこそ、ズンド「ダンスであった。

「じゃあ、ブリヂがやつてみてほし」べ

怪訝そうにダロタは意外と難しいからやつてみる、といつ意味だ  
れい。

ダロタは本を見せながら、ぶにぶこと指を指して、トコロをや  
れと言つていた。

「参つたな、踊りなんかやつた事ないからな  
…」

さすがにブリヂは困つた表情を見せたが、その本を見ながら腕を  
くねらせ、しばりくしたのむ。

「じゃあ、行くぞ？」

そんな感じで、全身をクネクネと動かし始めた。

さすがに従来通り、不思議の踊りのよつに何かが奪われる感覚は  
なかつた。

しかし『何の踊りの真似をしているのか?』と聞かれると『この人は不思議な踊りの真似をやつてます』と答えられるほど出来だつた。

「 い、うだべか? 」

そう言つて『クネクネ』と踊りだそとじこるのだらう。

「見事なズンドコですね」

「 酷いベよ、じゃあ、今度はシユロがやつてみるがいいベ? 」

さすがに嫌な顔をしたダロタは今度は自分を指名した。

当然、先ほどのブリードのような踊りを見せると、今度はブリードも頷いた。

「それで正解だよな?」

頷きあつ、人間とヴァンパイア、そして、ブヒッと鼻息を吹いて負けずにダロタも踊りだすのだが……。

「やべえ、シユロ、だんだんクセになつてきた

真面目に踊つてゐるダロタに悪いが、それはもう面白い踊りになつていた。

それはもう、後からやつてきた魔王一人も笑うほどだ。

「シユロ、ダロタに何を覚えさせているのよ?」

「豚が、豚が舞っている！！」

カイリはまだ收まらないのか、笑い転げていた。

## 第一十話 紅のダロタ その2

馬鹿にするつもりはない、だが、その踊りは…。

ズンドコだつた…。

「そういう不機嫌になるな、ダロタ、お前にには無理だ」

そういうながら笑うヴァンパイアをみて、オークは不機嫌にもなるだろ？

そもそも、このダロタ、時折、格闘じっこをしている時にムーンサルトプレスを必殺技にしてくるくらいに意外と運動能力の高い、そんなモンスターだというのは、自分でもわかる。

しかし、この2頭身モンスターはリズム感がないのかそれとも、そう解釈しているのであらうか、踊りとなると、あんな調子なのである。

そして、ブライドはダロタがいろいろな本を取り出してきたのか、もともと知っていたらしく。

「どうせなら、別の踊りを覚えてみたりどうだ？」

『よしにせ』とお店に前の住人の本なのだろうか、机の上に並べまくして大量の本を持って来た。

「ちよつとい、ブライド、そんなにちらかせないでよ」

「これはすげえな、呪い、怨恨増幅、癒しに、加速に封印、ええと、まだあるのか流星招来、普段は興味なかつたが、踊りつてこんなにあるんだな」

そう言つて今度はカイリ踊りだす。とはいへ、見本を見ながらといつワケで本を片手なのだが、もともと身体を動かすのが得意だからとても上手に踊つていた。

「へへ、どうだシユロ、回復の舞いだつてさ」

そして、ブリードや自分と違い、魔力を感じるのだが…。

「ちよつと、カイリ、怪我もしてないのにそんな踊りを踊つても意味が無いでしょ？」

「なんだよ、一応、オレはあんまりシユロの身体に影響をうけないのを選んで踊つただけじゃねえか」

不機嫌になりながらも、カイリは踊りを中断したのだが、一いつ言つた。

「でも、踊りなんて本番じゃあ、やっぱり役立たないな

「本番つて、戦闘の事ですか？」

「まあ、そうなるが、戦争レベルならまだ役立つかも知れねえけど、即効性がないからな。

徐々に回復するのはいいかも知れねえが、そこまで敵が待つてくればしねえよ。

それだったら、いつその事、全回復をするような魔法を唱えた方が早い時の方が多いんだよ」

なるほどと、頷く中、またもやダロタが踊ろうとするが、今度はセリカに止められるのをみて、カイリはこやりとしていた。

「でも、踊りを踊らせたら……、これ面白そうだな」

そんな事を弦く、その様はまさに『魔王』、『面白』おもちゃを見つけたような……。

カイリ自身、そう思っていたのだろう。

それは翌週のことである。

「な、何ですかこれは……？」

「シユ、シユロ、すまん」

魔王は謝ってきた。

「さあからしてカイリがなにせらり催し物をしていたのだろうのはわかるが、会場は自分の店だつたりするので、見に行こうとしたとき、上から声がした。

「これはシユロ様、本田はこのような催し物にいじに招待いただきありがとうございます」

「ええと、ウロコをもじたつて、一体何が？」

「こやはや、本田は『ダンスコンテスト』でござりこましゅう。

「」のよつな、催し物と聞きましては我ら3兄弟が黙つてはおつませんぞ？」

すると、土で作られたゴーレムのウロコ、石で作られたゴーレムと、金で作られたゴーレムを呼び出した。

これほど、一発でわかる兄弟も珍しげだらう。

礼儀正しく頭を下げるのをみて、未だに状況を理解できないのでカイリに聞いた。

「何をしたのですか？」

するとやはり会場になつているのか、自分の店の方から歓声があがるので、とりあえず近寄ると…。

魔法を扱つ、まるでおじこちゃんのよつたモンスター達が…。

「はああああ、やつ…」

集団でブレイクダンスを踊つていた。

そんな状況、困惑しない方がおかしい、セリカにしても自分を見つけて一警するも腕組みをしたまま、何もしないままいるほどなのだから。

だが、何とかしないといけないとカイリはさすがに思つたのだろう。

今度は大猿達がラインダンスを踊りだす中、答えた。

「昔から、モンスターの隠れた趣味として、踊りを踊る組織というのがあったらしくてさ。どうやら、噂は本当だつたらしくてな」

「噂…ですか…」

さらに先ほどゴーレム3兄弟が舞台上に上がるが、先ほど魔法使いが舞台に何やら魔法を掛けていた。

「ええ、ただいま舞台を強化してありますので、しばらくお待ちください」

ブランドが説明に入る。どうやら、彼はMCを勤めていたようだ。

すると、しばらくして軽快なリズムがなり響き、先ほどゴーレム3兄弟が踊りだす。

「ほつといったのですか？」

「あくまで尊だったからな。魔王がいちいち尊に振り回されてたら、身体がもたねえよ。

俺はただ、これが気になつたから、やつてみたかっただけなんだよ

やうじつてカイリは何も無い空間から見ただけでも、百科事典と解るような重みのある本を開いて見せた。

「収穫祭ですか？」

「まあ、俺が興味を引いたのは『祭り』ってところなんだけどさ。

あのズンド<sup>ム</sup>踊りがあつただろ<sup>ム</sup>。

いい機会だと思つてさ、やってみよつと思つただけなんだけど……

「どうしてこんなダンス大会になつたのですか？」

お祭りって言つのは、今後の健康や安全、収穫に豊漁を祈るためにとかいろいろ意味があるのでですが？」

「そだつたのか、俺はてつきり、踊りを踊つて競い合つてモノだと勘違いしてた

ケラケラと笑うなか、あのゴーレム3兄弟は歓声を浴びていた。

そのゴーレムはゼログラビティをしていたのだから。その大きな身体を傾ける3兄弟を見て、圧巻だったのはいうまでもない。

「どうするのですか、カイリさん。

」のままでは、収集つかなくなりますよ？」

## 第一十話 紅のダロタ 完結編

「まあ、仕方ねえわな」

頭を搔きながら、カイリは背伸びをして指を回すと出てきたのは、彼女より大きな火球だった。

「ちょっとカイリさん、駄目ですよ」

「大丈夫だよ、消し飛ぶ程度に済ませておくからよ」

そんな問題じやないのだが、炎の球体がさらに小さくして、カイリは『よいしょ』と放り投げる。

不思議とゆつくり飛んでいく火の玉、その軌道を見送っていたのだが……。

…先に気付いたのはセリカだった。

「いつ！？」

セリカが自分を抱きかかえて飛び上がったというのを知ったのは、数秒後だったがその時の自分は痛みを感じただけだった。

そして、次の瞬間、カイリの放った火球がカイリの元に戻つてきただのである。

次の瞬間はもう、爆音しかしなかつた。

それほど高く飛び上がった性もあつたが…。

「なあ、セリカ『跳ね返つてくる』へり一言、言つてくれねえか?」

さすがは魔王である、じの字の大地と化した大地を『少し焦げたぞ』程度で済ませていた。

「で、なんだありや?」

カイリの指差す方向は、言つまでもなくダンス会場だがそこには何かに守られるように光の壁がそびえ立つていた。

「△分、踊りで出来たのでしょ?」

ほり、カイリが前に言つてたじやない『戦争レベルならまだ役立つかも知れないけど、即効性がないから役立たない』って

「まさか時間が経つて十分に効果が潤つて出来た、バリアだつて言つてえのか?」

気分任せにもう一度、炎をぶつけるカイリ、当然跳ね返つてくるのだが、今度は打ち返す。

「ほら、いらんなさい。」

おじいちゃん達の踊りが激しくなつたでしょ?」

魔王の打ち出す炎を、跳ね返すのだからよほどの事のなのだろう。

年を取った魔法使いのブレイクダンスが激しくなっていた。

「ふ、ふざけやがつて…」

もつ一度、炎を打ち出すといつあるのだが…。

「なんだよ、セリカ？」

「無駄よ、カイリ」

「ただがじじーに、負けてられつかよ?」

「無駄だつて言つてるのよ。貴女の部下を見なさい」

「サコン、なんだブリードも踊つてるじやねえか?」

「頭の痛くなるような話になるけど、あれ、貴女が前に踊つた踊りに似てない?」

「まさか『回復の舞い』か?」

「それだけじゃないわよ『加速の舞い』で動作が速くなつた上で踊つてるのだから、回復効果は一倍よ」

「間違いなく、明日は筋肉痛間違いなしだで、おじいちゃんにいたつては、生死に関わりそうですね。」

「どうするのですか、結局、収集付かないじゃないですか?」

「手は用意してあるわよ

そう言つて、セリカは手を叩いて…。

「踊りには踊りよ」

ダロタに踊りを命じた。

ズンドコ、ズンドコ…。

…。

「ダロタ、貴方がつか世界を制するわよ…」

踊りに集中していた集団ですら、笑いの集団に変え、そこに漬け込むようにセリカの魔力が炸裂する。

そんな環境の中、笑い転げるカイリを見てダロタは言った。

「そのたびにオラの、何かが失われていくような気がするだ…」

意氣消沈するオーラクに魔王は言つた。

「いい心がけね」

勝利者などいない、得するものなどいないと思われた今回の戦い

…。

しかし…。

「おお、シユロおかえり」

数日後、ベテランの冒険者と出会いつゝ、その冒険者は不機嫌そつにしていた。

「どうしたのですか？」

「いやな、やつを探索に出たんだけじゃ。変な踊りを踊るオーケたちに出会つてな。

笑い転げて、やられてしまつたんだ」

オーケ達は新たな特技を覚えていた。

## 第一十一話 今日はアラド抜き その1

「ねえ、シユロ、これ何?」

セリカが箱から取り出したのは、『く』の字形の物体。

「ブームランですよ」

「なんだってっ! ?」

すると驚いたのはカイリである。そして、興味深くセリカの手にしたブームランを見つめて聞いてきた。

「これって、投げたら戻ってくるって武器なんだろ?」

「あら、何か魔力が働いているの?」

「いや、そんなん必要なくて戻ってくるらしいぜ?」

「嘘! ?」

信じられない表情で、セリカもブームランを凝視した。

となると、当然。。

「ぶつかって戻ってくるなんて凄いじゃない、ねえ、やってみて

よ

ますます、魔王の期待が高まるが、しかし、この武器の現実を知

る人間、シユロは残念そうな顔をしたのだが、やつてみたら理解するだらうと、外に出て、周りの安全を確認して投げてみて…。

受け取るまでは行かないが、自分の近くに落ちると…。

魔王一人の落胆の顔は、見て取れる。

「シユロ、ふざけて…ねえわな」

「結局、『ぶつける』武器ですからね。当たれば、やっぱり落ちるようになりますよ」

セリカも落ちたブーメランに付いた土を丁寧に払うが、それを冷ややかに見つめていた。

「一応予断ですが、学校で習いましたけど、これが『投げる』という動作で、最も飛び武器とされてるそうですよ？」

「なるほど、確かに見たところ飛距離があつたもんな、当たりそうな部分に刃物付けて、毒とか塗つて狩りとかしてたんだらうな」

「あら、取り揃ねたら危なくないの？」

「だから『戻つてくる』つてのを排除して、飛距離だけを重視すればすればいいだろ？」

受け取ったカイリは、今度は自分もとばかりブーメランを投げる。

最初は自分の投げたように地面に落ちたのだが、さすがは魔王といえるのだろうか、徐々にコツを掴んで手元に戻るように放り投げ

ていた。

それを見たセリカは聞いてきた。

「でも、そんな武器を狩りに使うような人なんて見た事ないのだけど？」

「それは『矢の方が腕力を使わないので前に飛びますからね』

ダロタが弦を引つ張り『ブンッ』と軽い音を立てて弓矢を飛ばしていた。

そうして、カイリも飽きたのかブーメランを手渡しながら言った。

「悪く言つつもりはねえが、投げて手元に戻る武器なんて、そんな便利な武器なんかねえってこつたな」

そうケラケラと笑うが、このカイリ…。

セリカとの食べようと思つた果物を取られた事が原因の喧嘩の際に、空に飛んだセリカに向かつて槍を放り投げた事がある。

セリカは避けたのだが…。

「ちつ、逃げられたか…」

舌打ちをしたカイリは自分が投げた槍と同じ方向を見たが、しばらくすると…。

『ズドン』と大きな音を立ててカイリの後方から槍が突き立つた

のである。

そのまま槍を引き抜き『返す』と言つて、カイリは追いかけていくのだから、手元に戻る武器なんて必要ないのではないかとふと思ひもした。

## 第一十一話 今日はアラド抜き セの2

今度はブーメランを興味深そうに見たのはダロタである。そして、それを手にした瞬間…。

「おっ、新種のオーク発見だ」

カイリはケラケラと笑って、へたくそに投げているダロタに『手首使って投げる』とレクチャーしているとセリカは今度はどこから取り出して来たのやらまた何やら取り出してきた。

「これもブーメランの一種?」

「これは『けん』と呼ばれるモノらしいくて、さっきのブーメランのように投げて使う時もあるそうですが、近接戦闘に特化した武器だそうですよ?」

そう言つとセリカは『ふーん』とその武器を眺め、もう一つ取り出してクルクルと構えて聞いてきた。

「似合つかしら?」

両手に圈を構えたセリカのその構えは、自分でもカイリとは別の優雅さと強さを持つのが解るが、正直に思つた…。

「似合わないです」

「あら、私に向かつてそういう事を言うのかしら?」

「そう嫌悪しないでください。

多分、貸してくれたら、言つた意味がわかると思いますよ」

そう言つて、シユロはセリカから、その武器を両手に受け取りセリカのように優雅に構える。

するとセリカは笑い出した。

「似合わないわね……」

「好みはあると思うのですがね……」

そう言つて使つた事がないながらに『ヒュン、ヒュン』と振り回すが、セリカは普通に近寄つて聞合いに入つて……。

普通に抜き取るのだから、男として格好がつかないモノだが、セリカはダロタが投げてブームランを見ていった。

「ねえ、シユロ、これに磁石をつけて戻るようにならたら、これら重みもありそうだし『戻る』という問題を解決しないかしら?」

『『やいばのブームラン理論』ですね』

「何それ、そんな理論聞いたことないわよ、説明しなさい」

「前に店にやつてきたモンスターから聞いた話なんですが、やいばのブームランを投げた時、取る時に自分も斬れてしまつていう事ですよ。

モンスターなら取れるって、人間の勝手な想像のせいで手にキズを負う事が耐えなかつたと良く愚痴を言つてましたよ」

「あら、情けない話ね。

取れないなら、自分に返つてくる途中で『止めて』しまえばいいじゃない」

「中には魔法を唱えられないモンスターもいるのですから、セリカさんと規格を一緒にしないでください。

でも、セリカさんなら、ぴったりな武器なのかもしぬせんね

「悪い冗談を言わないでほしいわね。

私に挑みかかつてくる人なんて、よほどの身の程知らずか、あそこでオークと遊んでいる魔王くらいなモノよ。

カイリなら当たり前だけど、身の程知らずでも『灼熱』を要する  
のは普通よ。

この程度の武器なら使う前に解けるわよ。

ショロはどう、これをワナに使ってみない。ブーメランのワナなんてまれなんだから、面白い話思つけど?」

「そう言つて見ると、ブーメランをつワナなんて聞いたこと  
がありませんでしたね」

少しばかり興味が沸いたのがわかつたのか、セリカは笑みをこぼしていた。

## 第一十一話 今日はアラド抜き その3

「てなワケで第一回、シユロを助ける新作会議いー」

カイリが景氣良く店の机をバシバシ叩き。

「ちよつと、カイリつるさいわよ」

といつものように、セリカがたしなめワナ作りにおける…。

『ブーメランをしてワナを作つてみよ』と会議をしていた。

モノの数分である…。

「な、なんてこつた…」

「何でこんなに役立たないのよ…」

ここにいる人間は絶望した一人の魔王を見ていた。

『とにかく弓矢と違う、使い方にしよ』

そんなカイリの頭の一言から、出だしは快調だったのだが…。

「じゃあ、手軽にブーメランでワナを押すといのはどう?」

ダロタが椅子の上に立つて、ホワイトボードに書き込み、カイリも負けじと考えをだす。

「やつを聞いたよつて、痺れ薬なんて塗りつけてさ。人にぶつけ  
るなんてどうよ？」

「あら、カイリ、貴女『弓矢とは違う使い方をしよう』なんて、  
言つておいてそんなの『矢とかわらないじゃない？』

「なら、ブーメランの回転を利用して、薬をばら撒くなんてのは  
？」

それでセリカも妥協して、ダロタに書かせて、わきあいあこと会  
議は続けていたのだが…。

「んつ、どうしたシユロ？」

カイリが気になるくらゝ、自分の顔が曇つていたのだろう。

「一人に悪いのですが、ほとんび他のワナで代用できましてね」

「心配するなよ、だから、こいつ使ってホワイトボード一杯になる  
くらゝに提案してるのでうつ？」

「ま、まあ、そうなんですが」

さすがに言い難そうなのを理解したのか、セリカは聞いてきた。

「ねえ、シユロ、とりあえず貴方、消してみていいわよ？」

少し申し訳なさそうに答えた。

「いいんですか？」

「良いわよ？」

「わすがに『弓矢』ますよ？」

「気になる言い方をするなよ

『遠慮するな』とこう意味だらう。」

そして、シユロは『遠慮なく』消したのだが……。

「一つだけしか残んねえのかよ……」

「一つだけ残ったのだから、カイリ、貴方は良い方よ。

ねえ、シユロ、私、怒つていいかしら？」

「仕方ないじゃないですか、さつきのセリカさんの提案でも『他のワナのスイッチを押す』って、そもそもブームランじゃなくていいじゃないですか」

「あら、そんなワナつてあるの？」

「そうですね、『弓矢』とこうワナが、しかも確実さを求めるなりやつちの方がいいですよ。

そもそもブームランって、戻らないといけないじゃないですか」

するとセリカは、先ほど自分の言った提案を全部言つたが、そもそも……。

「それなら、ストレートにワナを発動させた方がいいですよ」

そんな結論ですべてが片付くのである。

「じゃあ、カイリも同じ事が言えるじゃない」

「それはそうですけど、『薬をばら撒く』の代わりにあのブームランの軌道を生かして、トゲの床やら氷の床を作るとこのが面白そうだなと思ったのですよ」

「結局、オレの提案も採用されてねえって事じゃねえか！？」

すると考へ込んだセリカに続いて、カイリも思考に続いたのが数分前の事である。

そんな試行錯誤を続く中、一応、ブームランのワナを作り机の前に置くと、やはりカイリが先に手にして、セリカに向けてスイッチを押した。

「ちょっとカイリ、ふざけないで」

軽々と飛来物を掴み、それを眺めるがわらわらと消えた。

それは自分の魔力がないためであるが、セリカは何かをひらめいた。

「何もダメージを『』えるなんて必要ないのよね、ブームランを消すなんてどう？』



## 第一十一話 今日はアラド抜き やの4

その次の日、探索に出かけたシユロが不思議のダンジョンで見たモノは。

「何しやがる……」

ダンジョンを探索していた冒険者の団体が何やらモメていた。

「ちよ、ちよっとこんなトロロで喧嘩はやめてください、ビリしたのですか？」

「こじがダンジョンだからだろうが、冒険者団体様、2団体が頭に血が上つて喧嘩していてもシユロに気付いた。

「ああ、コイツが何か投げて來たんだ」

「んだと、お前らが先に何か投げてきたんだろうが……」

だが、血の氣の多く可愛いモンスターでも容赦なく剣を振り下ろせる冒険者達、また喧嘩を再開する。

しかし大の大人達である。それが取つ組み合いの喧嘩しているので、見るに耐えず、逃げるよつよつにその場を離れると。

「てめえ、こじの野郎……」

今度はモンスター同士でも同じような喧嘩をしていた。

「あ、シリカさん、冒険者達やモンスターなりに当たったのが原因らしい。」

すると何も無い空間から、シリカがやって来た。

「や、シリカさん、これは一体…？」

「ブーメランを見えなくしてワナを作つてみたのだけど…」

「どうやら、この騒ぎ、その見えないブーメランが冒険者達やモンスターなりに当たったのが原因らしい。」

「もうなんですか、どうりで…あれ？」

少し納得しながら、何かに気が付いた。

「肝心のワナはまだ…」

指輪の効果でワナを見ようと地面を眺めるがそれらしきスイッチが見当たらなかつたのだ。

その点に関してはシリカも『わかっている』のか不機嫌そうに答えた。

「ブーメランを作らせたのだけど、案外難しいらしくて、辛うじて生きているけど『見えないブーメラン』しか作れなかつたのよ」

「『辛うじて生きている』がとても気になりますが、だったら、今のこの状況は…？」

するとシリカは『見なさい』と言つて自分の肩に手を置くと、そ

れは見えた。

「ダ、ダロタ？」

ブーメランを手に、布を被つたオークが得意そうに『ブヒッ』と鼻を鳴らして立っていたのだ。

「なるほど、それで作れなかつたから、セリカさんの魔力でダロタの姿を消して、冒険者に投げつけて、一応のシユミレーションをしていたのですね」

その際なのだろう、ブーメランの独特的な不規則さが他のフロアに飛び込んで行き、モンスター同士でも同じような喧嘩沙汰になつたのである。

そう解説を入れれば機嫌も良くなるかと思いもしたが、セリカは不機嫌だった。

「…人間だけじゃなくて、モンスターですら怒らせてているのですから、結果的に良いと思つのですが？」

「そうかしら…」

そう言つてセリカは説明するより見せた方が良いと思つたのだろう、ダロタを呼び寄せて何かを詠唱すると視界が歪んだ。

すると皿の前に広がつたのは…。

「おや、これはシユロ君ではないか」

「おわっーー！」

通りすがりのレックスター、レクターの挨拶に驚いて、状況を掴めぬまま何とか挨拶を仕返していくと、セリカは答えた。

「『』はダンジョンのやうね…まあ、深い所といえばわかるかしら…」

そう言いながら、セリカはレクターに向やうを聞いて、案内されていた。

そして、辿り着いた場所は…。

「セ、セリカさん、帰りませんか？」

ただでさえ、レクターの横を横切るのに緊張するところに、その目の前にいたのは赤、青、黄色に縁、白銀とまるで寝所と化したドリゴン達の眠る部屋だった。

そして、お姫様は『』と言った。

「とりあえず、『』れで試した方が良いでしょ？』

『』のモンスターにブーメランを投げる』と言つていいのだろう、しかし、ドリゴンにブーメランを投げるとこつのだ。

「ダロタ、お願いします

当然、『やりたくない』といつ意味を込めて、ダロタのいる方に向こう直るが、ダロタも頭を下げてブーメランを差し出していた。

「ダロタ、貴方の仕事でしょ?」

首を振つて、まるで手を差し出していくように見えるが、しかし、そこには受け取つてはならない『得物』があった。

## 第一十一話 今日はアラド抜き その5

「ジャンケンか…。

前にも見た事があるが全ての命運を運まかせにする、その勝負。実際に、興味深い…」

おそらく「アラド」には出来ないからだろうか、力社会の彼らだからだろうか、レクターは誰かのモノマネをしながらその勝負を眺めていた。

つまり、今まで『勝負』をしていた。

セリカは、その敗者にクスクスと笑いながら語りかける。

「頑張つてね、シユロ」

何故、チョキを出したのか？

そんな独特の後悔に打ちのめされながら、オーラ勝者からブーメランを受け取り、少し大きめな通路からその部屋を眺めると、さすがに緊張してしまつ。

「ほら、早く」

そうセリカは急かすが、やはり怖いものは怖い、セリカやレクターがいるから安全だと思つてはならない。

危ないモノは危ないのだ。

横を見てもらおう、レクターが鼻の先にある角でオークを小突いているではないか。

熱されていたのだろう『じゅ』っと音を立てて…。

慌ててダロタは逃げるように自分のそばに駆け寄ったが、やはつ力社会の生き物なのだ。

隙あらばなんとやらである。

こんなモノを投げつけたために、『じ』就寝なさつてるドリコン御一行の怒りを貰い。

地上までやつて来て丸呑み、何て事は勇者様御一行でもやりないだろ。

「セリカさん…」

「あら、なあに?」

「守つてくださいよ?」

一応、そう言つて大きく振りかぶる。

田標は赤いウロコをまとつたレクターと一緒にレッヂドリコン。

何でそこを狙つたのかは、先ほどレクターを見たからでもある、それほどあの角、もしかしたら普段からとても熱されており。

「こんな木で出来たブーメランなど燃えてしまうのではないか、なんて… 考えてもみたが、ほとんど賭けである。

しかし、大切な事を忘れていた。

ブーメランとは、真っ直ぐ飛ばないのだ。

曲線を描いたブーメランは首筋、延髄に見事に命中した…。

人間とはどうして緊張すると、その軌跡を田で追うのだろうか…。  
そう考えられるほど時間が流れた、その時、ドラゴンがまだ眠つている事に気が付いた。

「よかっただ…」

そう安心していようと…。

セリカがさつさとそのフロアに入つてブーメランを取つて、こう言つた。

「はい、もう一度」

「もう一度？」

最初は「冗談で言つていいと思ったのだが、何となく気配を察した。

「鬼だ、鬼がいますよ」

「あら、私は魔王よ?」

クスクスと笑いながら、再度『もう一度』とブーメランを渡すが、少し学んだ事がある。

首筋を狙つたくらいでは、目覚めないのだ。

それなら、次に狙う箇所は必ずと限られてくる。

ウロコに覆われた胴体である。

あれだけのが大きいのなら、先ほどのように予想外な場所に当たつたとしても、ダメージすら『えられない』だろ?。

「行きます」

しかし、その時、意氣揚々としていたのがわかつたのだろうか…。  
いや、自分の隣に魔王がいたのを忘れていたのが悪かつたのだろうか…。

「えいっ」

魔王は完全に投げるタイミングの自分の攻撃力を上げてくれた。

## 第一十一話 今日はアラド抜き 完結編

攻撃力が上がるとは…どうこう事だらう?

「に面白い統計がある。

『そして、彼は雄たけびを上げ、振りおろすとする腕の筋肉が通常より引き締まつた』

など『筋力』を増強するイメージと…。

『その魔法を掛けられた剣は、光り輝き、重さを感じなくなつた。

…以下、中略。

まるで羽毛の中に吸い込まれていくよし、魔王の闇の法衣を切り裂いた…』

など『ホント』に、この書物に書いてあるよし『武器』を強化するといった…。

2つのイメージが強いのである。

だが、どれも面白いモノで『筋力』を上げてしまえば、敵の攻撃を避ける動作にも何かしらの影響があるので。

そして『武器を強化』という概念にも同じ事が言え…。

防御力が上がつてしまつのである。

そんな走馬灯を味わいながら、ショロの放つたブーメランは勢いよく…。

レッヂデラゴンに6ほどダメージを与えた。

…そうしてボクらは、燃え盛る火炎を吐いたドラゴンに焼かれ。

「のダンジョンから、追に出された羽田になつたのだが…。

翌週…。

「ねえ、シユロ。

毎回、思うのだけど、ダンジョンに追に出されたくらいで、物事を翌週にまわすのはよくなこと思ひわよ」

「確かに悪いと思つのですがね。

見張りがいますから、仕方がないじゃないですか…。

変に勘ぐりを入れられる前に笑われておいておきましたよ

クスクスとセリカも微笑む中、テーブルの上に転がっているブーメランは何事もなかつたかのように置かれていた。

「つまりセリカさん、序盤でのモンスターには、さつきのワナは効果はあるけど、深部になればなるほど、このブーメランは意味がなくなると言いたかったのですね？」

「そうね、特にドア『ン』なんてウロコが厚いでしょ、あそこまで進入してくる猛者なら、あの程度の気配にいきなり感情を揺らす事はないと思つわよ。

といひでレクターが今回の事で謝りたいから、贈り物だそつよ」「うやつて、指を差すと軽く口のよつた干物りしき、魚類の群れが匂いでいた。

「あの騒さで巻き込まれた魚類達じゃないですか、さすがにもううぬにはなりませんよ」

やう言つて、セリカにあげる事にすると『食料庫にでも放り込んでおくれ』と叫つが、やはり本題が気に入らないのか代わりに答えることになる。

「何とかブーメランがワナに使えませんかね?」

そんな中、ドアが開いた。

「ただいま

「おや、ブーメラン。どうでした、休暇?」

「お、その他の休日なんて、あまり聞くな

しかしブーメランは『じこ』と、自分の手にじてこるブーメランを見て聞いて来た。

「シユロ、変わった武器だな?」

どうやらセリカ同様、ブーメランを知らないらしい。

「これがアーマーの武器だ。」

セリカはいつぞやの自分と同じように説明を始める。

「手元に返つてくる！！

魔力も要さずにつ！！

大袈裟だと思つほど田を輝かせるブランド、しかし、セリカはこう付け加えた。

「これがアーティスト、ダメージを与えた人間もいたそうね…」

嘘は言つてはいないが、思わずセリカを見た。

「これでドラゴンなんか、怖くないな……」

そう言って、ブーメランを受け取るブラドを止めようとしたのだが、セリカは自分の身体を動けなくさせていた。

「ちょっとダンジョン行って、試してきます」

そう意気揚々とブリヂは出て行つたトロロド、よつやく自分の身体を解放した。

「アーニー、何をやるんだ？」アーニーは、

そうセリカは聞いて來たが、シユロは黙り込んで『じい』とセリカを見て言つた。

「それはワナじゃないです」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1391e/>

---

不思議のダンジョンというお仕事

2011年10月6日13時39分発行